

神 正 遺 跡 (A地区)

—平成8年度県営ほ場整備事業に伴う発掘調査報告—

赤 迫 遺 跡 (A地区)

—平成9年度県営ほ場整備事業に伴う発掘調査報告—

1998

財団法人 山口県教育財団
山口県埋蔵文化財センター
阿知須町教育委員会



滑石製子持勾玉



銅製小仏像

序

山口県では、恵まれた自然環境の中、豊かな地域社会の実現に向けて、農業基盤整備事業等の諸施策が推進されています。

財団法人山口県教育財団では、私たちのふるさと山口県の歴史を理解する上で貴重な財産である先人が残した文化財を、開発工事との調整を図りつつ記録に留めて後世に伝えるべく、県営ほ場整備事業に係る埋蔵文化財について発掘調査を実施しております。

平成8年度は、吉敷郡阿知須町浜表に所在する神正遺跡（A地区）の発掘調査を実施し、室町時代の集落の跡を発見するとともに、当時の人々の生活文化の実態を知る上で数多くの貴重な手がかりを得ることができました。特徴的な遺構として地下式横穴があり、山口県内では1遺跡地区内での検出数としては最多となるとともに、分布の上でも県内の東限に位置する興味深い事例となりました。

平成9年度は、同町赤迫に所在する赤迫遺跡（A地区）の発掘調査を実施し、古墳時代から古代・中世にかけての集落跡を発見しました。注目される遺構として古代の大型建物跡や、中世においてこの地を治めた有力氏族の館の周囲を区画した可能性がある堀跡が見つかりました。

本書は、その多くの調査成果をまとめた記録であり、収録された資料が埋蔵文化財への理解を広め、教育・学術文化の振興のために活用されることを期待するものであります。

終わりに、発掘調査の実施にあたって御協力いただきました関係各位に対し、厚くお礼申し上げます。

平成10年3月

財団法人山口県教育財団
理事長 上野孝明

序

阿知須町は自然豊かな海と山、それに加えて交通の便にも恵まれた地で、これらを活かしたまちづくりに向けて町民一体となって日々前進しており、圃場整備事業もその一環のものであります。

阿知須町教育委員会では、将来の阿知須町民の心のよりどころとなる文化財を、この一連の事業との、調和ある保存をはかるため鋭意、努力して参りました。特に、埋蔵文化財につきましては必要に応じて発掘調査を実施し、その保護に万全を期してきたところであります。

本書に係る神正遺跡（A地区）及び赤迫遺跡（A地区）は県営圃場事業に先立って山口県教育財団・山口県埋蔵文化財センターと阿知須町教育委員会が共同で発掘調査を実施し、阿知須の古代から中世の歴史の空白に新たな一ページを加えることができました。

この発掘調査の成果をまとめた本書が、学術・教育に広く利用されることを期待すると共に、阿知須町におきましても豊かなまちづくりの基礎資料として大いに活用したいものだと考えております。

おわりになりましたが、本書に係る調査にあたりご尽力、ご努力いただいた調査関係者、また大所高所からご指導、ご協力いただきました皆様には厚くお礼申し上げます。

平成10年3月

阿知須町教育委員会
教育長 高 重 等

例 言

1. 本書は、県営は場整備事業に先だって、平成8年度に実施した山口県吉敷郡阿知須町浜表所在の神正遺跡（A地区）および平成9年度に実施した同町赤迫所在の赤迫遺跡（A地区）の発掘調査概要報告書である。
2. 本書は、財団法人山口県教育財団が山口県農林部の委託を受けて実施した調査と文化庁国庫補助を得て阿知須町教育委員会が実施したA地区の調査の成果をあわせて報告するものである。

なお、阿知須町教育委員会が山口県農林部の委託を受け、文化庁国庫補助を得て実施したB地区の調査の成果は、阿知須町教育委員会において別に報告書を刊行する。

3. 調査組織は次の通りである。

調査主体 財団法人山口県教育財団

阿知須町教育委員会

調査担当 山口県埋蔵文化財センター指導主事 上山佳彦（平成8・9年度）

鈴木 卓（平成8年度）

大野真司（平成8年度）

直井 晃（平成9年度）

大村 勇（平成9年度）

阿知須町教育委員会

4. 調査にあたっては、山口県農林部耕地課、山口県山口市地改良事務所、並びに地元関係各位から協力・援助を得た。
5. 本書の第1図は、国土地理院発行の2万5千分の1地形図「阿知須」「宇部東部」「台道」「竹島」を複製使用したものである。第2図は、阿知須町発行の「県営圃場整備阿知須地区」（C-4・C-5・D-4・D-5）を複製使用したものである。
6. 本書に使用した方位は、国土座標（第3座標系）で示し、標高は海拔標高（m）である。
7. 出土遺物のうち、石器の石材（表面観察による）については、山口県立山口博物館専門学芸員 亀谷 敦氏の助言を得た。また、輸入磁器については、山口県立萩美術館・浦上記念館学芸課長 上田秀夫氏の教示を得た。
8. 本書に使用した土色の色調の表記はMunsell方式による。
農林水産省農林水産技術会議事務局（監修）『新版標準土色帖』
9. 図版中の遺物番号は、実測図の遺物番号と対応する。
10. 出土遺物実測図中の土器断面は、黒塗りが須恵器、白抜きが土師器・瓦質土器・陶磁器を表す。
11. 本書で使用した遺構略号は次の通りである。

S B：建物跡 S K：土坑 S D：溝状遺構 S T：墓 S P：柱穴 S C：地下式横穴

※ 「地下式横穴」の呼称については、近年全国的には「地下式横」が一般的に使用されているが、本報告書では従来の県内報告書例の呼称と統一するため、「地下式横穴」の用語を踏襲して使用する。

12. 本書に掲載した実測図・写真の作成および執筆は、上山・鈴木・大野・直井・大村並びに阿知須町教育委員会が共同で行い、編集は上山が行った。

本文目次

I 遺跡の位置と環境	1
1. 地理的環境	1
2. 歴史的環境	1
II 調査の経緯と概要	4
1. 調査に至る経緯	4
2. 調査の経過と概要	4
III 神正遺跡（A地区）の調査	7
1. 遺構	7
2. 遺物	21
IV 赤迫遺跡（A地区）の調査	31
1. 遺構	31
2. 遺物	53
V まとめ	69
1. 神正遺跡（A地区）	69
2. 赤迫遺跡（A地区）	71

挿 図 目 次

- | | | | |
|------|--------------------------|------|-----------------|
| 第1図 | 遺跡の位置と周辺の遺跡 | 第29図 | 竪穴住居跡実測図⑥ |
| 第2図 | 調査区設定図 | 第30図 | 掘立柱建物跡実測図① |
| 第3図 | 掘立柱建物跡実測図① | 第31図 | 掘立柱建物跡実測図② |
| 第4図 | 掘立柱建物跡実測図② | 第32図 | 掘立柱建物跡実測図③ |
| 第5図 | 土坑実測図① | 第33図 | 掘立柱建物跡実測図④ |
| 第6図 | 土坑実測図② | 第34図 | 掘立柱建物跡実測図⑤ |
| 第7図 | 地下式横穴実測図① | 第35図 | 掘立柱建物跡実測図⑥ |
| 第8図 | 地下式横穴実測図② | 第36図 | 土坑実測図 |
| 第9図 | 地下式横穴実測図③ | 第37図 | 墓実測図 |
| 第10図 | 地下式横穴実測図④ | 第38図 | 堀土層断面図 |
| 第11図 | 地下式横穴実測図⑤ | 第39図 | 溝状遺構土層断面図 |
| 第12図 | 地下式横穴実測図⑥ | 第40図 | 柱穴遺物出土状況実測図 |
| 第13図 | 墓実測図 | 第41図 | 竪穴住居跡出土遺物実測図① |
| 第14図 | 溝状遺構・包含層トレンチ土層断面図 | 第42図 | 竪穴住居跡出土遺物実測図② |
| 第15図 | 出土遺物実測図 | 第43図 | 竪穴住居跡出土遺物実測図③ |
| 第16図 | 掘立柱建物跡・土坑出土遺物実測図 | 第44図 | 竪穴住居跡出土遺物実測図④ |
| 第17図 | 地下式横穴出土遺物実測図 | 第45図 | 掘立柱建物跡出土遺物実測図 |
| 第18図 | 地下式横穴・墓出土遺物実測図 | 第46図 | 土坑出土遺物実測図① |
| 第19図 | 溝状遺構出土遺物実測図 | 第47図 | 土坑出土遺物実測図② |
| 第20図 | 柱穴・包含層出土および
表面採集遺物実測図 | 第48図 | 墓出土遺物実測図 |
| 第21図 | 出土石器・石製品実測図 | 第49図 | 堀出土遺物実測図 |
| 第22図 | 出土鉄製品実測図 | 第50図 | 溝状遺構出土遺物実測図 |
| 第23図 | 出土銭拓影 | 第51図 | 柱穴出土遺物実測図① |
| 第24図 | 竪穴住居跡実測図① | 第52図 | 柱穴出土遺物実測図② |
| 第25図 | 竪穴住居跡実測図② | 第53図 | 包含層出土・表面採集遺物実測図 |
| 第26図 | 竪穴住居跡実測図③ | 第54図 | 出土石器・石製品実測図 |
| 第27図 | 竪穴住居跡実測図④ | 第55図 | 滑石製子持勾玉実測図 |
| 第28図 | 竪穴住居跡実測図⑤ | 第56図 | 銅製小仏像実測図 |
| | | 第57図 | 出土銭拓影 |

表 目 次

第1表	掘立柱建物跡一覽表	第6表	竪穴住居跡一覽表
第2表	土坑一覽表	第7表	掘立柱建物跡一覽表
第3表	地下式横穴一覽表	第8表	土坑一覽表
第4表	墓一覽表	第9表	墓一覽表
第5表	出土錢一覽表	第10表	山口県内主要地下式横穴一覽表

図 版 目 次

巻頭図版	滑石製子持勾玉・銅製小仏像	図版12	赤迫遺跡(A地区)完掘状況①・②・③
図版1	神正遺跡・赤迫遺跡(A地区)遠景 神正遺跡(A地区)全景	図版13	赤迫遺跡(A地区)検出遺構①
図版2	神正遺跡(A地区)完掘状況①・②	図版14	赤迫遺跡(A地区)検出遺構②
図版3	神正遺跡(A地区)検出遺構①	図版15	赤迫遺跡(A地区)検出遺構③
図版4	神正遺跡(A地区)検出遺構②	図版16	赤迫遺跡(A地区)検出遺構④
図版5	神正遺跡(A地区)検出遺構③	図版17	赤迫遺跡(A地区)検出遺構⑤
図版6	神正遺跡(A地区)検出遺構④	図版18	赤迫遺跡(A地区)検出遺構⑥
図版7	神正遺跡(A地区)出土遺物①	図版19	赤迫遺跡(A地区)出土遺物①
図版8	神正遺跡(A地区)出土遺物②	図版20	赤迫遺跡(A地区)出土遺物②
図版9	神正遺跡(A地区)出土遺物③	図版21	赤迫遺跡(A地区)出土遺物③
図版10	神正遺跡(A地区)出土遺物④	図版22	赤迫遺跡(A地区)出土遺物④
図版11	赤迫遺跡(A地区)遠景 赤迫遺跡(A地区)全景	図版23	赤迫遺跡(A地区)出土遺物⑤
		図版24	赤迫遺跡(A地区)出土遺物⑥

付 図 目 次

付図1	神正遺跡(A地区)遺構配置図	付図2	赤迫遺跡(A地区)遺構配置図
-----	----------------	-----	----------------

I 遺跡の位置と環境

1. 地理的環境

神正遺跡(A地区)は、吉敷郡阿知須町浜表に位置し、中世の集落跡を中心とした遺跡である。赤迫遺跡(A地区)は、神正遺跡から谷一つ隔てた南側の同町赤迫に所在し、古墳時代から古代・中世にかけての集落跡が発見された。

阿知須町は、県央地域の南部に位置し、東は山口湾に面して周防灘に臨み、北は土路石川を境に山口市と接し、南及び西は宇部市に隣接している。町城の外形は東西に長い平行四辺形に近い形をしており、東西の最大幅は7.5km、南北の最大幅は4.8kmで、面積は約25.5km²である。北の土路石川と南の井関川にはさまれた形で山口湾には阿知須干拓地が広がっている。

地形からみると、阿知須町は西側の老年期の丘陵性山地と東側の洪積世の海岸段丘に大別することができる。東側には標高10数mの低い洪積段丘がひろがり町城の大半を占めているが、この段丘面からは古墳時代や古代・中世の集落跡が近年連続して発見されている。土路石川と井関川はこの段丘を開析して西から東に流れ山口湾に注いでおり、川に沿って浅い溝状の沖積平野がみられる。井関川中流域の洪積段丘から東に舌状に伸びた一つの支脈の先端に上河内遺跡(第1図の14)があり、その付け根に当たる部分に領家遺跡(同5)が所在し、領家遺跡の南に神正遺跡(同1)が接し、谷を一つ隔てた南に赤迫遺跡(同2)が位置している。赤迫遺跡のある段丘面は舌状の支脈の東南端に当たり、その南が井関川に臨むという遺跡にとってすぐれた立地条件に恵まれている。

2. 歴史的環境

海に面して瀬戸内の穏やかな気候条件に恵まれた阿知須町城では、古くから人々の生活が営まれてきた。昭和36年(1961年)に阿知須町岩倉で、1万数千年前の後期旧石器時代のナイフ形石器などが発見されている。縄文時代後期から晩期には、丸塚山東麓の海岸段丘とその前面の段丘崖下に狩人たちが住んでいたことが知られており、縄文土器のほか石斧も見つかっている。

昭和50年代には阿知須町教育委員会による引野遺跡(同22)と丸塚古墳群(同6~10)の発掘調査が行われた。引野遺跡は、弥生時代中期の高地性集落跡であり、山頂にある海水産の貝塚を伴う遺跡として知られている。このほかにも阿知須町城西側の丘陵上には弥生時代の遺跡がみられる。また、井関川中流の洪積段丘上にある棚尾遺跡(同17)・向井山遺跡(同18)では隅丸方形の堅穴住居群が発見され、阿知須の弥生時代と古墳時代を結ぶものとなった。

丸塚古墳群は、6世紀末から7世紀の後期古墳で山口湾に臨む段丘端に横穴式石室をもつ7基の円墳である。月崎古墳(同23)や若宮古墳(同24)など、周辺の山口湾に臨む宇部市や山口市の海岸部からも横穴式古墳群が発見されている。また、花ヶ池窯跡(同26)は6世紀末を中心とする須恵器の窯跡であり、その北東には美濃ヶ浜式土器による製塩遺跡として著名な波雁ヶ浜遺跡(同25)がある。井関川に臨む段丘上においては、平成2年(1990年)に実施された赤迫遺跡弘島地区の調査によって、古墳時代から中世にいたる連続した遺跡の埋存が明らかになっている。しかし、この段丘上の集落と結びつく古墳は現在のところ発見されていない。



- | | | | | |
|----------|-----------|----------|-----------|-----------|
| 1 神正遺跡 | 2 赤迫遺跡 | 3 上ノ尾遺跡 | 4 西光寺原遺跡 | 5 領家遺跡 |
| 6 丸塚1号墳 | 7 丸塚6・7号墳 | 8 丸塚2号墳 | 9 丸塚3・4号墳 | 10 丸塚5号墳 |
| 11 旦遺跡 | 12 五反田遺跡 | 13 岡遺跡 | 14 上河内遺跡 | 15 岡山北遺跡 |
| 16 岡山遺跡 | 17 棚尾遺跡 | 18 向井山遺跡 | 19 向井園遺跡 | 20 打越遺跡 |
| 21 赤地山遺跡 | 22 引野遺跡 | 23 月崎古墳 | 24 若宮古墳 | 25 波雁ヶ浜遺跡 |
| 26 花ヶ池窟跡 | 27 砂山古墳 | | | |

第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡

古代の律令制のもとでの阿知須町は、周防国吉敷郡賀宝郷の境域に属したが、町域が山陽道から離れていたこともあってか、この時代の歴史や文化を伝えるものが少ない。条里制の遺構はこの周辺では山口盆地等にその一部が残存するが、阿知須町にはその遺構が見当たらない。

町域は、中世には白松荘に属している。厚東氏の系図によれば4代武綱やその子永綱が白松大夫と号したという。厚東氏の本城のあった霜降山は、神正遺跡や赤迫遺跡の位置からも西方に一段高く盛り上がった山容を見せている。厚東氏が早くから白松方面に勢力を伸ばしたことは自然の勢いであっただろう。繁栄をほこった厚東氏ではあったが、南北朝時代に大内氏との争いに敗れて滅亡した。厚東氏出身の白松氏は、大内氏の支配下に入っており、文献史料に散見する。また、大内氏が毛利氏に敗れると毛利氏の支配下に入った。萩藩の史料によると慶長7年(1602年)頃までは阿知須町に、なお白松氏の領地があったことがわかる。

この時期の阿知須町については、永禄12年(1569年)の大内輝弘の乱が目ざされる。毛利氏の九州出兵の間隙をついて、大内輝弘は豊後の大友氏の支援を受けて、本隊を秋徳浦、一部を白松浦に上陸させて山口に侵入した。しかし、毛利軍の反転により進退きまわって茶臼山(防府市)で自刃した戦である。この時、阿知須町浜衣にあった寺が焼き打ちされ、道案内に強要された地元の僧侶と村人5人がのちに丸塚の首ヶケ浴で殺された。この乱は、記録に残った中世の阿知須地方唯一の戦争物語である。

近年の且遺跡(同11)・岡遺跡(同13)・上河内遺跡などの調査では、井関川に臨む段丘上に中世の集落が営まれていたことが明らかになっており、領家遺跡では中世の館跡にかかわる堀と土塁跡が確認されている。平成7年度に領家遺跡を調査した富士雄氏によると、「領家遺跡の中世を要約すると、北に突出した段丘の先端に位置していること、そして堀で段丘を掘り割っている点に特徴があると言える。すなわち東、西そして北は自然の谷を生かして防備を固め、平坦地でもって続く南を一直線に掘り割って南に備えた施設であると言える。そして出土遺物からみて中世後半の時期が当てられる。」さらに、山口市大内館跡出土遺物との比較検討によって、「大内館の後半に併行する時期であると言うことができよう」と述べられている。

町域は、近世では萩藩における小郡宰判に属し、「防長風土注進案」によると農業中心の井関村と、漁業・廻船業中心の阿知須浦に分かれていた。明治に入ると、再び併せて井関村となった。昭和15年(1940年)に町制を施行して阿知須町となり、昭和19年(1944年)には一時山口市に合併されたが、戦後の昭和22年(1947年)に山口市から分離独立して今日に至っている。

参考文献

- 1 阿知須町 『阿知須町史』 1981
- 2 山口県文書館(編) 『防長風土注進案14小郡宰判』 1964
- 3 山口県地学会 『新版山口県地質図』 1995
- 4 阿知須町教育委員会 『上河内遺跡』 1995
- 5 阿知須町教育委員会 『領家遺跡』 1996
- 6 阿知須町教育委員会 『領家・神正遺跡(神正遺跡B地区)』 1997

Ⅱ 調査の経緯と概要

1. 調査に至る経緯

阿知須町教育委員会では、昭和50年代初めから発掘調査を行って町域の埋蔵文化財の実態把握につとめてきた。主な遺跡として引野遺跡や丸塚古墳群の調査が実施されている。昭和63年度から平成2年度まで3年間にわたり、文化庁国庫補助を得て埋蔵文化財の分布調査を実施している。その後も阿知須町教育委員会は、県営ほ場整備事業に伴う発掘調査を連続して実施しており、最近では平成6年度に上河内遺跡、平成7年度に領家遺跡の調査を実施し成果を上げている。平成7年度に調査を実施した領家遺跡では古墳時代の集落のほか、中世末の遺構が確認されたが、その延長部分は分布調査の空白地帯であった。阿知須町教育委員会では空白地域の実態を把握するために、平成7年秋の水稲刈り入れ後に試掘調査を実施し遺構の埋存を確認した。

この結果、県営ほ場整備事業に伴う発掘調査として、平成8年度に神正遺跡、平成9年度に赤追遺跡の調査を実施することになった。神正遺跡・赤追遺跡とも発掘調査の対象面積が大きいため、阿知須町教育委員会の要請により、両遺跡の文化庁分を除くA地区については財団法人山口県教育財団が山口県農林部から委託を受け、2ヶ年にわたって発掘調査にあたることとなった。A地区の文化庁分とB地区は阿知須町教育委員会が調査を担当することになった。

2. 調査の経過と概要

(1) 神正遺跡(A地区)

調査区については財団法人山口県教育財団と阿知須町教育委員会が協議して設定した。神正遺跡の調査対象面積は13,000㎡であるが、これをA地区8,000㎡とB地区5,000㎡に分けて、財団法人山口県教育財団がA地区のうち文化庁分960㎡を除く7,040㎡の調査を担当し、阿知須町教育委員会がA地区の文化庁分960㎡とB地区5,000㎡を担当することになった。

5月9日から財団法人山口県教育財団担当のA地区の調査区内にトレンチを設定して調査員による試掘調査を実施した。5月10日から重機による表土除去を開始し、5月21日から作業員による遺構検出を始めた。また、6月11日からA地区の平板測量($s=1/100$)を開始した。6月14日から国土座標の標準座標杭の設定を測量業者に委託して実施した。

7月2日から包含層のトレンチ掘り込み、さらに遺構の掘り込みを開始した。また、並行して調査員による遺構・遺物の出土状況の写真記録及び実測図の作成を始めた。

8月5日の調査で、神正遺跡(A地区)の特徴的な遺構である地下式横穴を初めて検出し、最終的には9基の地下式横穴を確認した。1遺跡からの検出数としては山口県内では最多となり、分布でも県内東限に位置する事例となった。地下式横穴のうち天井部が残っていて内部が狭いもの(S C 1・2・5・6・8)は、安全面を考慮して小型重機で天井部を除去して掘り込み作業を進めた。10月24日をもって作業員による遺構掘り込み・表面清掃が終了した。この間、7月22日・23日には中国山東省から山口県埋蔵文化財センターに研修のため来日していた張從軍氏(当時山東省文物局弁公室主任)が現地調査に参加された。また、10月9日には阿知須町立井関小学校児童による柱穴掘り込みの体験



第2図 調査区設定図

学習を実施した。

10月25日に空中写真撮影を行った。翌日の10月26日に現地説明会を実施し約80名の来会者があった。また、10月22日から11月15日にかけて調査員による遺構配置グリッド実測（ $s=1/20$ ）を続けた。

11月21日に神正遺跡（A地区）の現地調査をすべて終了し現地を撤収した。その後は、山口県埋蔵文化財センターにおいて、調査資料を整理し、出土遺物の復元と実測を行った。

（2）赤迫遺跡（A地区）

調査区については財団法人山口県教育財団と阿知須町教育委員会が協議して設定した。赤迫遺跡の調査対象面積は12,500㎡であるが、これをA地区7,500㎡とB地区5,000㎡に分けて、財団法人山口県教育財団がA地区のうち文化庁分900㎡を除く6,600㎡の調査を担当し、阿知須町教育委員会がA地区の文化庁分900㎡とB地区5,000㎡を担当することになった。

5月12日から財団法人山口県教育財団担当のA地区の調査区内にトレンチを設定して調査員による試掘調査を行った。5月19日から6月19日にかけて重機による表土除去を実施し、並行して遺構検出を続けた。この間、5月27日からA地区の平板測量（ $s=1/100$ ）を開始した。また、6月16日から国土座標の標準座標杭の設定を測量業者に委託して実施した。

5月29日から作業員による遺構掘り込みを開始した。6月は梅雨の時期であるが、例年より天候に恵まれて順調に作業が進捗した。この時期に大きな労力を要することが予想された堀の掘り込みに着手し、ベルトコンベアーを導入して深い底部からの埋土の搬出を効率的に行った。堀は、東西方向に延びる標高15m前後の丘陵部を南北方向に分断するようにほぼV字状に掘り込まれており、最大幅約5m、現存の最大深さ約2mであることを確認した。おそらく中世におけるこの地の有力氏族の館の周囲を区画した堀ではないかと推定されたが、今回の調査区からは館跡のものは発見されなかった。

遺構掘り込みと並行して、6月24日から調査員による遺構・遺物の出土状況の写真記録及び実測図の作成を始めた。7月前半は雨や台風の影響で調査が進まなかったが、7月下旬から炎天のもとでの本格的な遺構掘り込みを住居跡・溝状遺構・土坑・柱穴の順番に進めていった。8月後半は特に残暑がきびしかったが、天候は安定していて掘り込み作業が順調に進捗した。調査区南側に大きな楕円形の掘り方を持つ6間×2間の東西に長い大型の掘立柱建物跡を検出した。柱穴の遺物からは奈良時代末～平安時代に相当する遺物と思われ、他の一般の掘立柱建物跡に比べ巨大であり、集落内の特別の施設ではないかと推測された。10月14日をもって作業員による遺構掘り込み・表面清掃は終了した。この間、9月5日には美川町立桑根小学校の児童による柱穴掘り込みの体験学習も実施した。

10月15日に現地説明会を実施し、地元阿知須町を中心に約80名の来会者があった。当日は現地説明会が終わるまで幸いなことに雨が降らなかったが、終了して約1時間後には大雨が降り出した。10月18日には空中写真撮影を当初の予定どおり行うことができた。また、9月30日から10月31日にかけて調査員による遺構配置グリッド実測（ $s=1/20$ ）を続けた。

11月5日に山口土地改良事務所担当の現地立会を経て、赤迫遺跡（A地区）の現地調査をすべて終了した。

その後、山口県埋蔵文化財センターにおいて、調査資料の整理、出土遺物の復元と実測を行い、神正遺跡（A地区）と赤迫遺跡（A地区）をあわせて、この報告書を作成した。

III 神正遺跡 (A地区) の調査

1. 遺構

今回の発掘調査で検出された遺構は、掘立柱建物跡14棟、土坑145基、溝状遺構38条、地下式横穴9基、墓4基、柱穴約1,260個である。特徴的な遺構としては、地下式横穴がある。山口県内では、1遺跡地区内での検出数としては最も多い9基もの地下式横穴が検出された。なお、各遺構の上面は、後世の水田開発により削平を受けており、遺存状況は全般的によくはない(付図1)。

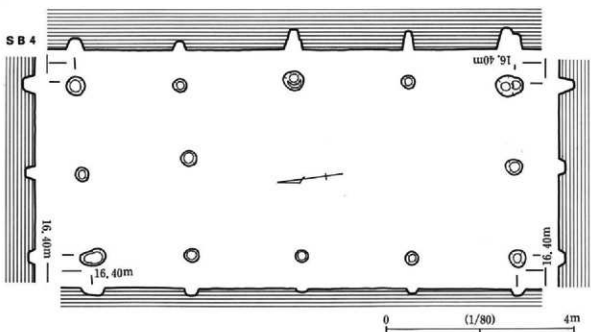
(1) 掘立柱建物跡 (第3・4図)

調査区内に多数の柱穴が検出され、その中から掘立柱建物が14棟復元できた(第1表)。他にも掘立柱建物として復元される可能性があるものもあるが、確実に柱穴が並ぶものを取り上げた。その多くは2間×1間、3間×2間の規模である。また、棟方向をみると、現在の畦畔に沿うものが多く見られる。柱穴の埋土、出土遺物などからその多くを中世に比定することができる。

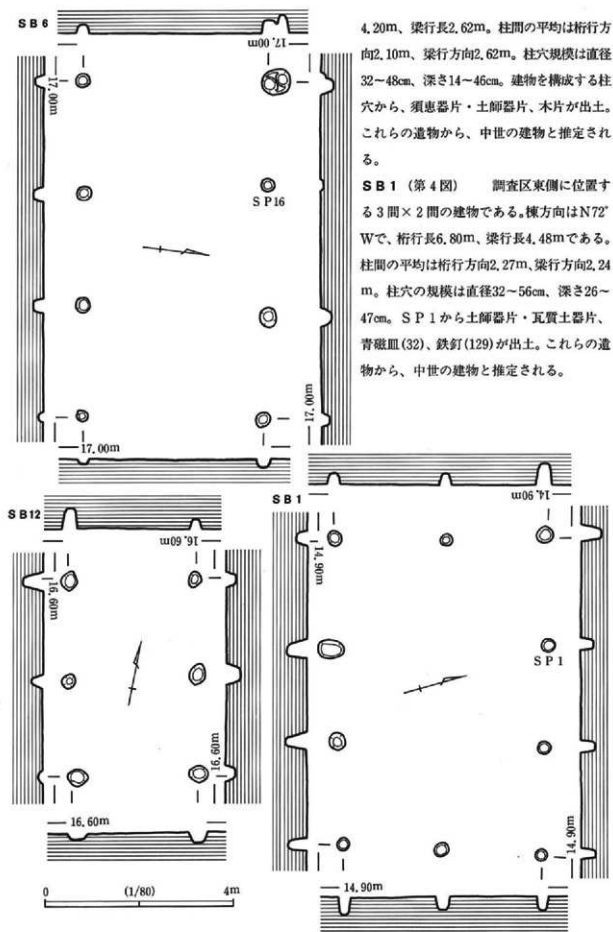
SB 4 (第3図) 調査区南側に位置する4間×2間の建物である。棟方向はN7°E、桁行長9.16m、梁行長3.66mである。柱間の平均は桁行方向2.29m、梁行方向1.83m。柱穴の規模は直径32~56cm、深さ9~47cm。柱穴から土師器などが出土した。

SB 8 (第4図) 調査区西側に位置する3間×1間の建物である。棟方向はN82°Eで、桁行長7.10m、梁行長3.90mである。柱間の平均は桁行方向2.36m、梁行方向3.90m。柱穴の規模は直径24~64cm、深さ13~29cm。SP16から土師器鍋、土師器皿(14・15)、常滑焼の壺(37)が出土。これらの遺物から中世の建物と推定される。

SB 12 (第4図) 調査区西側に位置する2間×1間の建物である。棟方向はN13°Wで、桁行長



第3図 掘立柱建物跡実測図①



4.20m、梁行長2.62m。柱間の平均は桁行方向2.10m、梁行方向2.62m。柱穴規模は直径32~48cm、深さ14~46cm。建物を構成する柱穴から、須恵器片・土師器片、木片が出土。これらの遺物から、中世の建物と推定される。

SB1 (第4図) 調査区東側に位置する3間×2間の建物である。棟方向はN72°Wで、桁行長6.80m、梁行長4.48mである。柱間の平均は桁行方向2.27m、梁行方向2.24m。柱穴の規模は直径32~56cm、深さ26~47cm。SP1から土師器片・瓦質土器片、青磁皿(32)、鉄釘(129)が出土。これらの遺物から、中世の建物と推定される。

第4図 独立柱建物跡実測図②

第1表 掘立柱建物跡一覧表

番号	規模 (間)	棟方向	柱 間		出土遺物	時代
			桁 行	梁 行		
			建物の南西隅から(m)	建物の南西隅から(m)		
1	3×2	N72° W	6.8(2.34・2.18・2.28)	4.48(2.12・2.36)	土師器、瓦質土器、青磁、鉄釘	中世
2	2×1	N12° W	3.34(1.64・1.70)	3.08	土師器	中世
3	2×1	N83° W	4.66(2.32・2.34)	4.16	土師器、瓦質土器、陶器	中世
4	4×2	N7° E	9.16(2.30・2.34・2.36・2.16)	3.66(1.94・1.72)	土師器(鏝)	中世
5	3×2	N72° W	6.10(2.18・2.18・1.74)	5.54(2.68・2.86)	土師器、瓦質土器	中世
6	3×1	N82° E	7.10(2.36・2.38・2.36)	3.90	土師器(鏝)、土師器(皿)	中世
7	3×2	N88° E	7.66(2.50・2.70・2.46)	4.40(2.10・2.30)	なし	
8	2×1	N3° W	6.20(3.00・3.20)	3.00	須恵器、土師器、瓦質土器	中世
9	2×1	N85° E	4.20(1.96・2.24)	3.90	なし	
10	2×2	N85° W	4.08(2.10・1.98)	3.74(2.00・1.74)	土師器、土製品、陶器	中世
11	2×2	N4° W	6.02(2.74・3.28)	5.74(2.84・2.90)	土師器、陶器(備前)	中世
12	2×1	N13° W	4.20(2.06・2.14)	2.62	須恵器、土師器、木片	中世
13	2×1	N78° E	3.84(1.94・1.90)	1.48	須恵器	
14	3×1	N19° W	6.00(2.00・1.80・2.20)	2.20	土師器、土製品破片	

(2) 土坑(第5・6図、図版3)

今回の調査では145基もの土坑が検出された。出土遺物、埋土から中世のものとは比定できるものが多い(第2表)。

SK106(第5図)

SK106は調査区北西部に位置する隅丸長方形の土坑。規模は長軸82cmで、短軸72cm、深さ19cm。遺物は土師器杯(21・22)が出土。

SK119・120・121(第5・6図)

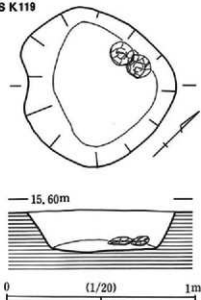
この3基の土坑は、調査区南西部に長軸の方向は異なるが北西から南東に並んで位置する。

SK119は円形の土坑で、規模は長軸230cm、短軸218cm、深さ33cmである。遺物は土師器杯(23・24)、瓦質土器が出土。

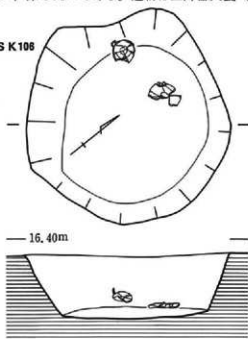
SK120は円形の土坑で、規模は長軸220cm、短軸220cm、深さ74cmである。遺物は土師器杯(25・27)、備前焼の大甕(38)が出土。

SK121は円形の土坑で、規模は長軸200cm、短軸200cm、深さ74cmである。遺物は土師器大甕(39)が出土。

SK119

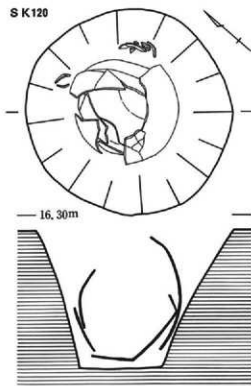


SK106

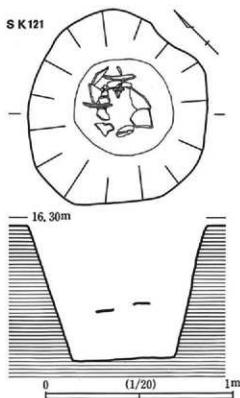


第5図 土坑実測図①

SK120



SK121



第6図 土坑実測図②

第2表 土坑一覽表(1)

番号	平面図	縦 横 (cm)			出土遺物	時代
		長	横	深		
1	隅丸長方形	136	80	10		
2	隅丸長方形	160	66	62		
3	長円形	60	50	48	土師器、瓦質土器(鉢)	中世
4	隅丸長方形	64	50	34		
5	隅丸長方形	152	148	27	土師器、青磁(梅)	中世
6	長円形	104	70	22		
7	隅丸長方形	122	50	22	瓦質土器	中世
8	長円形	146	108	16		
9	隅丸長方形	132	108	5		
10	不整形	112	94	22		
11	円形	62	58	60		
12	隅丸長方形	80	68	25	瓦質土器(足鉢)	中世
13	長円形	152	98	44	石製品	中世
14	隅丸長方形	310	232	67	瓦質土器(足鉢)、陶器、スラフ	中世
15	長円形	124	40	12		
16	長円形	222	80	21	土師器、瓦質土器	中世
17	不整形	118	18	50		
18	不整形	282	132	50	土師器、瓦質土器(足鉢)、瓦質土器(すり鉢)、陶器(備前)	中世
19	長円形	74	34	20		
20	円形	48	46	6	土師器	
21	長円形	102	74	13		
22	長円形	260	220	44	土師器、瓦質土器	中世
23	隅丸長方形	344	250	72	土師器(組)、瓦質土器(鉢)、青磁、陶器	中世
24	長円形	90	48	31		
25	不整形	210	62	9	土師器、瓦質土器	中世
26	不整形	168	102	17	土師器、瓦質土器	中世
27	長円形	120	102	25		
28	長円形	140	60	7		
29	長円形	160	60	9		
30	隅丸長方形	110	60	85	土師器(組)	中世
31	長円形	144	56	10	土師器(組)	
32	隅丸長方形	78	52	75	土師器(組)	中世
33	隅丸長方形	234	132	22	土師器(組)	中世
34	不整形	120	76	15		
35	不整形	108	70	14		
36	不整形	90	76	18		
37	不整形	120	102	25		
38	不整形	122	96	31		
39	不整形	450	364	2		
40	隅丸長方形	74	60	6	須恵器、土師器、瓦質土器(すり鉢)、青磁	中世
41	隅丸長方形	420	252	32	須恵器、土師器、瓦質土器(足鉢・羽釜)、白磁	中世
42	長円形	144	66	23		
43	長円形	184	40	10		
44	長円形	146	102	30		
45	不整形	184	144	45		
46	長円形	186	72	16		
47	不整形	116	100	32		
48	不整形	196	168	13	瓦質土器(鉢)、陶器(備前)	中世

第2表 土坑一覽表(2)

番号	平面図	規模 (cm)			出土遺物	時代
		長	幅	深さ		
49	長方形	116	62	32		
50	不整形	88	60	8	土師器	
51	長方形	226	180	7	土師器(碗)	
52	隅丸長方形	114	72	21	土師器、瓦質土器	中世
53	長方形	158	90	18	須惠器、土師器	
54	隅丸長方形	106	70	11	土師器、瓦質土器(足箱)	中世
55	隅丸長方形	136	84	8	土師器、瓦質土器	中世
56	円形	80	70	25		
57	長方形	90	62	14		
58	隅丸長方形	58	52	5		
59	長方形	72	52	5		
60	長方形	90	60	39		
61	隅丸長方形	226	72	6		
62	長方形	100	80	19		
63	不整形	82	60	17		
64	不整形	176	98	35	瓦質土器	中世
65	円形	90	78	15		
66	隅丸長方形	136	118	21	須惠器、瓦質土器	中世
67	不整形	126	106	5	瓦質土器	中世
68	不整形	314	132	43	土師器	
69	長方形	116	96	45	石鏡	
70	長方形	116	72	29	瓦質土器	中世
71	不整形	60	55	14	須惠器	
72	不整形	204	76	—		
73	長方形	94	80	8		
74	●崩落	—	—	—		
75	長方形	200	130	36	瓦質土器(足箱)	中世
76	隅丸長方形	84	80	10	土師器、瓦質土器(足箱)、陶器(備前)	中世
77	隅丸長方形	148	142	36		
78	隅丸長方形	176	152	57	千石鉢(備前)	
79	長方形	86	68	16	瓦質土器	中世
80	長方形	114	50	26	瓦質土器	中世
81	不整形	212	116	28		
82	隅丸長方形	294	206	25		
83	隅丸長方形	134	124	30		
84	不整形	142	94	34	土師器、瓦質土器	中世
85	長方形	60	56	32	土師器(皿)	中世
86	不整形	250	172	30		
87	隅丸長方形	84	78	28	土師器(皿)	中世
88	不整形	94	74	55	土師器、瓦質土器、磁器(漆付)	中世
89	隅丸長方形	25	22	24	土師器(皿)、瓦質土器(足箱)	中世
90	不整形	140	136	35	土師器、瓦質土器(足箱)、青磁、陶器	中世
91	不整形	202	200	39	磁石	
92	不整形	158	96	18		
93	不整形	854	324	76	瓦質土器、陶器(備前)	中世
94	隅丸長方形	212	144	32		
95	不整形	132	52	28	瓦質土器	中世
96	隅丸長方形	134	80	69	瓦質土器	中世
97	長方形	222	96	28		
98	不整形	254	246	24	土師器、瓦質土器(楕・足箱)、白磁、青磁	中世
99	隅丸長方形	202	70	9	土師器(皿)、瓦質土器	中世
100	不整形	156	104	12		
101	円形	82	78	10		
102	円形	106	90	15		
103	長方形	84	84	9	土師器、瓦質土器	中世
104	長方形	314	254	29	土師器、瓦質土器	中世
105	円形	392	356	29	瓦質土器(大鉢)	中世
106	隅丸長方形	82	72	19	土師器(杯)	中世
107	長方形	20	74	13		
108	不整形	184	78	23		
109	不整形	152	76	19		
110	隅丸長方形	114	64	29	瓦質土器	中世
111	隅丸長方形	152	71	11		
112	隅丸長方形	126	106	31	土師器(皿)、瓦質土器	中世
113	不整形	114	76	34		
114	不整形	104	72	29		
115	隅丸長方形	62	62	39	土師器、瓦質土器、土師	中世
116	不整形	92	48	42		
117	不整形	616	58	25	須惠器、土師器(皿)、瓦質土器、青磁(碗)、陶器(備前)	中世
118	隅丸長方形	70	50	8		
119	円形	230	218	33	土師器(杯・皿)、瓦質土器	中世
120	円形	220	220	74	土師器(杯・皿)、大鉢(備前)	中世
121	円形	200	200	74	土師器(大鉢)	中世
122	隅丸長方形	128	118	17		
123	隅丸長方形	132	102	19	土師器(杯)、瓦質土器	中世
124	隅丸長方形	66	65	23	土師器(杯)、瓦質土器、陶器	中世
125	円形	150	148	86	土師器	中世
126	不整形	152	52	30	土師器(皿)、瓦質土器(楕・千石鉢)	中世
127	隅丸長方形	80	50	50	土師器、瓦質土器、土師	中世
128	長方形	100	74	16		
129	長方形	64	46	44	土師器、瓦質土器	中世
130	円形	70	62	60		
131	長方形	56	56	25		
132	長方形	84	52	21		
133	長方形	122	54	41	土師器、土師	
134	円形	54	52	34	土師器(皿)	中世
135	円形	100	96	15		
136	長方形	58	40	30	土師器	中世
137	長方形	68	50	53	土師器	中世
138	長方形	60	46	32	須惠器、土師器	中世
139	隅丸長方形	180	144	37	瓦質土器	
140	不整形	200	58	32	土師器、瓦質土器(足箱)	中世
141	長方形	98	64	9		
142	不整形	104	50	22		
143	円形	46	46	44		
144	長方形	70	52	11	須惠器、瓦質土器	中世
145	不整形	116	72	22		

(3) 地下式横穴 (第7~12図、図版3~6)

中世の特殊な遺構として、地下式横穴9基を検出した(第3表)。基本的構造は、地表面から竪坑を掘り込み、さらに地中で横方向に主室を設けている。個々の遺構について、概要を以下に述べる。

SC1 (第7図) 調査区北東の丘陵辺縁に1基のみ単独で見つかった。竪坑が東側で、主軸は東西方向を示す。竪坑は平面形が150cm×90cmの横長隅丸長方形を呈し、深さ105cmほど掘り込まれ、60cmの段差をもって主室床面につながる。主室は、平面形が楕円形を呈し、奥行220cm、幅170cm、高さ145cmである。竪坑端部から主室先端までの全長は300cmとなる。断面形態は典型的な地下式横穴のタイプである。主室床面には、20~40cmの厚さの外部から流れ込んだ暗青灰色の粘土層の堆積が見られたが、天井部まで空洞であった。遺物は、竪坑の埋土中から土師器のすり鉢(62)が出土している。

SC2 (第7図) 調査区の南側にあり、SD10の南にSC3・4とともに3基で第2のグループを形成する。北側に竪坑、主軸は南北をとる。竪坑の平面形は、55cm×55cmの隅丸方形で、55cmの深さに垂直に掘られ、100cmの段差で主室床面に斜めにつながる。主室は横長隅丸長方形で、奥行90cm、幅100cm、高さ105cm、全長170cmと小規模である。主室床面には20~40cmの厚さの暗青灰色粘質土が堆積し、天井部は原形をとどめ空洞状態であった。遺物は、竪坑埋土中から瓦質土器破片が出土した。

SC3 (第8図) 東西方向を主軸とし、竪坑を東側に、主室を西側に配している。既に天井部が崩落して内部を充填しており、もとのプランははっきりとはわからない。竪坑の平面形は推定隅丸方形で幅70cm、残存する深さは50cm、主室は奥行210cm、幅160cmで、奥壁に向かってやや広がりぎみの縦長隅丸長方形で、推定高110cmとなる。竪坑と主室床面とは80cmの段差を持つ。全長は310cm。奥壁には工具による掘削痕が残っている。埋土中の出土遺物には、土師器、瓦質土器、青磁、陶器がある。

SC4 (第8図) 西側に竪坑があり、東西方向を主軸とする。天井部が崩落し、内部に土が埋まった状態であった。竪坑は推定80cmの隅丸方形で深さ55cm。主室は、奥行130cm、幅120cm、推定高75cmで、横穴の全長190cmと比較的小規模である。竪坑底面と主室床面とは40cmの段差を持つ。この底面と床面直上には、10~25cm大の礫が散乱した状態で出土した。当時、竪坑から投棄された状況をとどめるものと推測される。主室床面からは中国製染付皿(58)、石臼(115)、瓦質の羽釜が出土した。

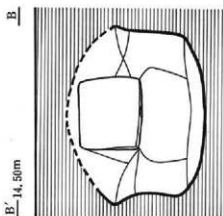
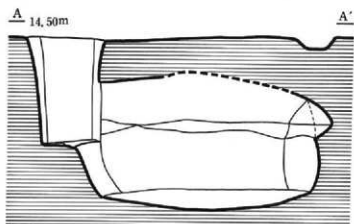
SC6 (第9図) 調査区の北西側で、SC5・7・8・9とともに5基で第3のグループをなす。主室の主軸は東西方向で、奥壁に向かって竪坑は、主軸をはずれて右後方に位置している。竪坑は、推定直径80cmの円形であり、東側に連結して240cm×130cmの隅丸方形で、深さ90cmの土坑が掘り込まれている。この土坑と竪坑が同時期か、土坑が竪坑部分を切り後に掘り込まれたものかは、埋土の状況からは判断できなかった。竪坑底と主室は90cmの垂直な段差を有する。主室は、縦長隅丸長方形をなし、奥行210cm、幅140cm、高さ200cm。天井部との間に空洞部を残して約100cmの厚さで、埋土が堆積していた。奥壁・側壁には、工具による掘削痕跡を明瞭にとどめていた。埋土中から陶器(52)、瓦質土器の大甕(54・57)・鉢(55)・火鉢(56)、土師器のすり鉢(53)、石臼(118)が出土した。

SC9 (第9図) 掘削途中の横穴と推定される。竪坑入り口部は不整形で、主室は東西方向に主軸をとる。竪坑は長軸140cm、短軸95cm、深さ160cmで段を有さず主室床面に至る。主室は奥行180cm、幅160cm、高さ110cmの規模である。内部は埋土で充滿していた。出土遺物は、瓦質の鍋(61)・足鍋。

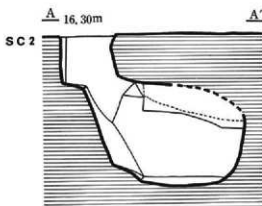
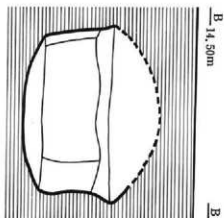
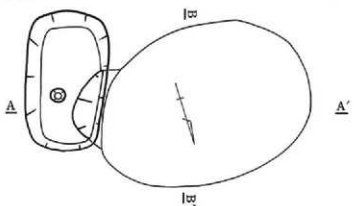
SC7 (第10図) 主軸は東西で、竪坑は東側にある。天井部は崩落しており、竪坑は80cm程度の隅

丸方形で、深さ70cm、段差50cmでなだらかに主室床面につながる。主室は縦長隅丸長方形で、奥行125cm、幅110cm、復元高100cmとなる。全長210cm。床面に角礫が3個確認された。奥壁・側壁には工具掘削痕が観察された。遺物は埋土中から土師器・瓦質土器・青磁(60)・白磁(59)が出土した。

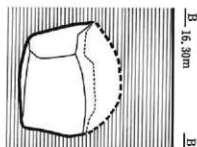
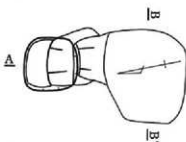
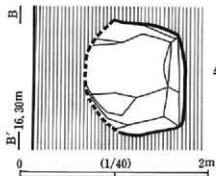
SC8(第10図) 主軸は東西方向。竪坑は、推定90cmの隅丸方形で段差を有さず、200cmの深さで主室床面に直接つながる。主室は竪坑から東西両方向にのびる。天井部が残る西側は、奥行170cm、幅135



SC1

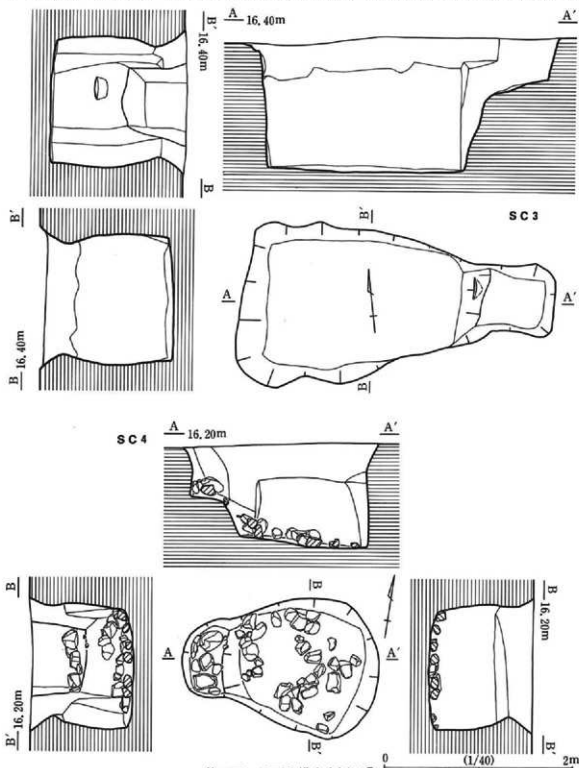


SC2

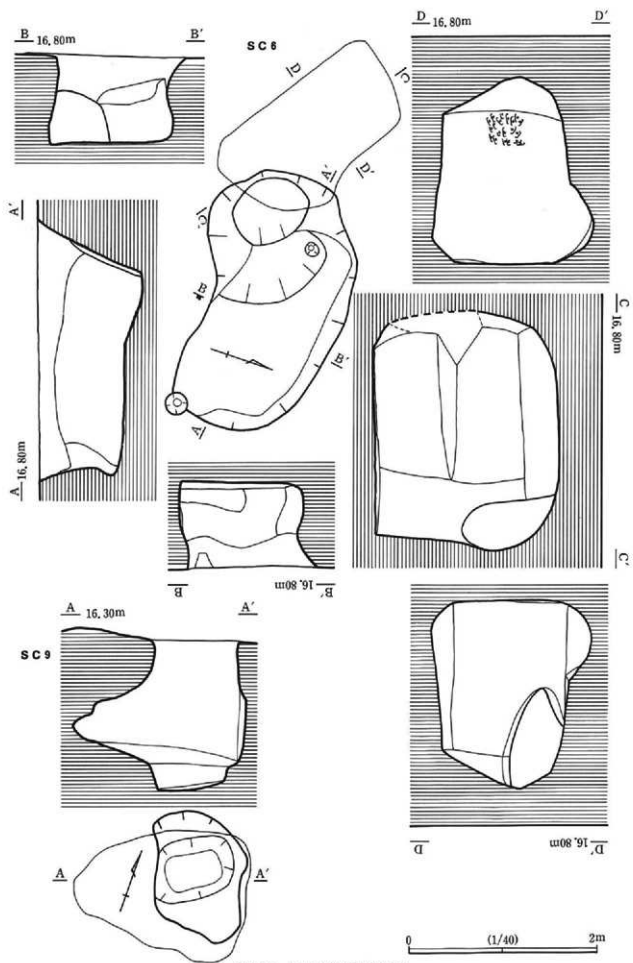


cmの縦長隅丸長方形を呈し、高さは110cm。東側は天井部が一部崩落し、後世人為的に埋められたと思われる埋土が詰まった状態であった。床面は粘土質流入土と横穴壁面からの崩落砂質土が覆っていた。東端は後世の削平のため、はっきりとした元の形状を確認できなかった。推定全長540cm。主室の南壁側に2室、北壁側に1室、副室が確認された。遺物は、埋土中から青磁片が出土した。

SC 5 (第11・12図) 主軸は北東方向。竪坑は、主軸を外れて左斜め後方に位置し、100cm×85cmの楕円形で、垂直に深さ110cmの底面まで掘り込まれ、一旦段をなし、斜め方向に入り口部が続いて主室へとつながる。主室は前室・後室の複室構造をなす。前室は、180cmの皿状の円形で高さ150cm。床面

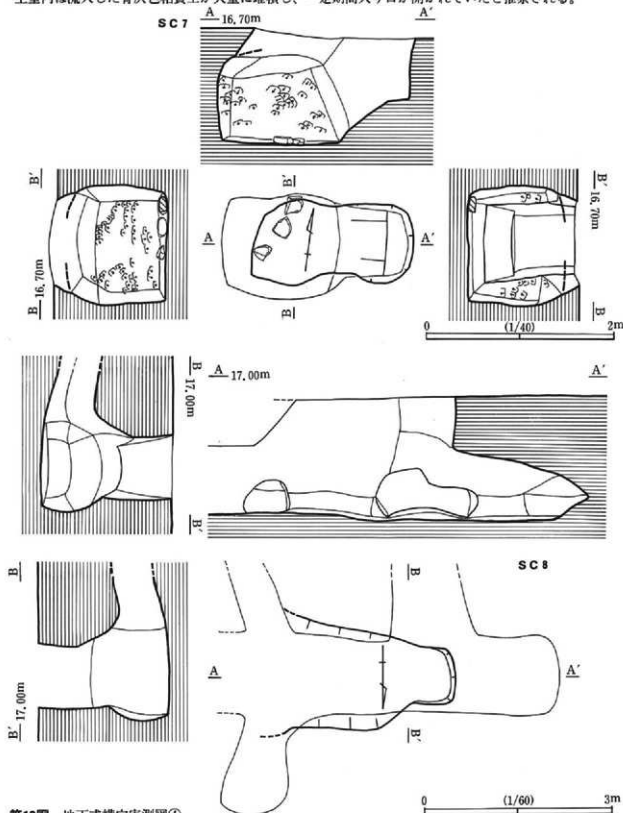


第8図 地下式横穴実測図②

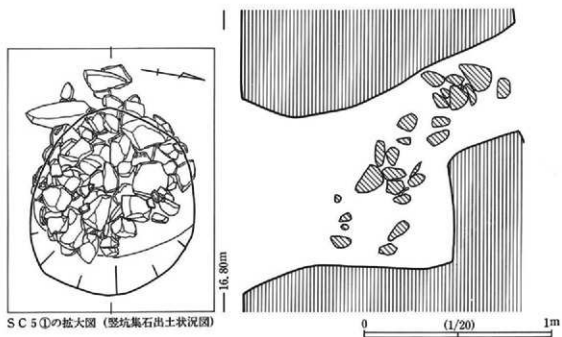
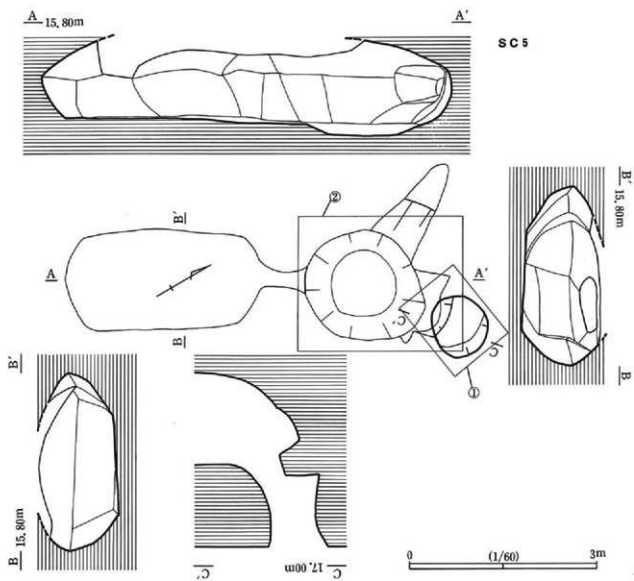


第9图 地下式横穴实测图③

は、後室床面より約20cm低い。前室と後室の間はせばまり後室へとつながる。後室は奥行360cm、幅280cmの縦長隅丸長方形を呈し、推定高130cmとなる。全長は700cmで、9基中最大規模を誇る。前室右壁には、棚状の副室が付設されている。竪坑から前室入り口部にかけて、閉塞目的で投入されたと考えられる礫が大量に充填された状態で出土した。礫群に混じて瓦質土器(40・42-44・47-51)・土師器(41・45)・陶器(46)・砥石(112)・石臼(116)・五輪石(119)が破損した状態で出土した。主室内は流入した青灰色粘質土が大量に堆積し、一定期間入り口が開かれていたと推察される。

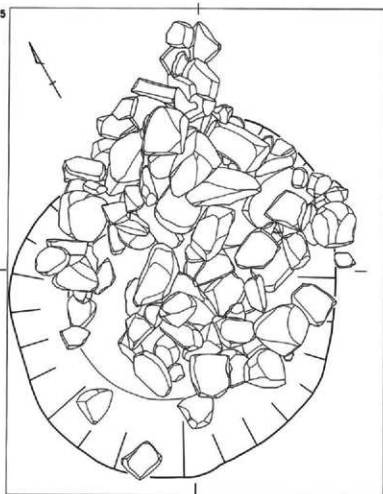


第10図 地下式横穴実測図④

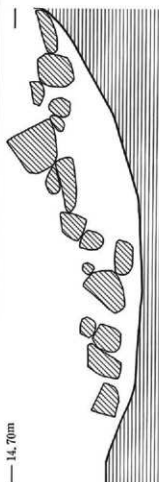


第11圖 地下式横穴実測図⑤

SC5



— 14.70m

SC5②の拡大図
(主室集石出土状況図)

0 (1/20) 1m

第12図 地下式横穴実測図⑥

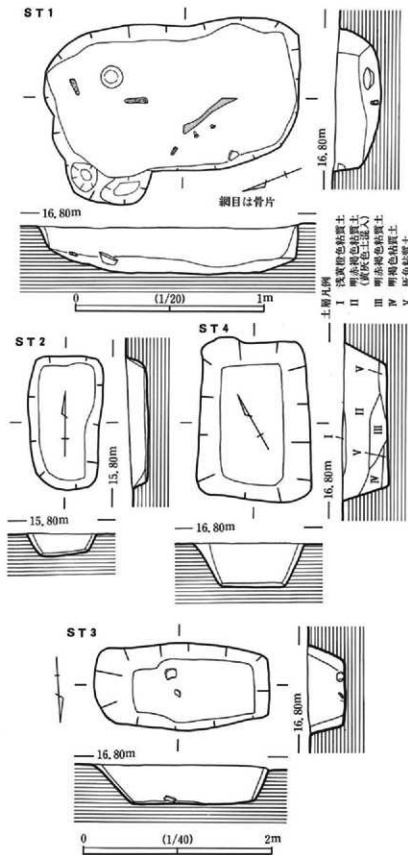
第3表 地下式横穴一覽表

() は推定

番号	壁			坑 (cm)			主室 (cm)				出土遺物	時代	備考
	平面形	長軸	短軸	長さ	平面形	土壁方向	奥行	幅	深さ	埋没・土壁			
1	横長隅丸長方形	150	90	105	横内形	N75°W	220	170	145	300	土師器(すり鉢)	中世	壱坑段あり
2	隅丸方形	55	55	55	横長隅丸長方形	N15°E	90	100	105	170	瓦質土器	中世	壱坑段あり
3	隅丸方形小	—	70	50	横長隅丸長方形	N85°W	210	160	(110)	310	土師器, 瓦質土器	中世	壱坑段あり 天守部遺跡 工具痕あり
4	隅丸方形小	—	80	55	不規則長方形	N80°E	130	120	(75)	190	染付磁器, 瓦質土器(割璧)	中世	壱坑段あり 天守部遺跡 遺あり
5	横内形	100	85	110	横長隅丸長方形	N30°E	180 360	180 280	150 (130)	700	瓦質土器(鍋・足鍋・ホーロク・大甕) 土師器, 陶器(壺), 磁石, 石臼 瓦磁石	中世	壱坑段あり 小割壁あり
6	横内形	(80)	(80)	(90)	横長隅丸長方形	N55°E	210	140	290	(240)	陶器(壺?), 瓦質土器(大甕・水鉢・鍋・足鍋), 土師器(すり鉢・足鍋) 石臼	中世	壱坑段あり 工具痕あり
7	隅丸方形小	—	80	70	横長隅丸長方形	N83°E	125	110	(100)	210	白磁, 青磁, 土師器, 瓦質土器	中世	壱坑段あり 天守部遺跡 工具痕あり
8	隅丸方形小	—	90	200	横長隅丸長方形	N90°E	(360)	(135)	(135)	(540)	青磁	中世	壱坑段なし 天守部遺跡 遺あり
9	不整形	140	95	160	不整形	N70°E	160	160	110	180	瓦質土器(鍋・足鍋)	中世	壱坑段なし 未完成か

(4) 墓 (第13図、図版6)

4基の墓を検出した。その内訳は、木棺墓と考えられるものが3基、土坑墓1基である(第4表)。



ST1 調査区南側に位置している。墓坑は、長軸136cm、短軸82cmの長方形で、深さは24cmである。長軸方向はN21°E。墓坑の北東部から土師器杯(63)が出土。鉄釘(120・121)も2本出土している。

ST2 調査区南側で、SD14を切るように位置している。墓坑は、長軸70cm、短軸40cmの長方形で、深さは11cmである。長軸方向は北。墓坑から土師器杯(64・65)と鉄釘(122・123)が2本出土している。また、銅銭が9枚(第23図、第5表、図版10)も出土している。

ST3 調査区西側に、SD20を切るように位置している。墓坑は、長軸186cm、短軸93cmの長方形で、深さは41cmである。長軸方向はN87°W。墓坑の南部から陶器が出土。

ST4 調査区西側、SD38に囲まれるように位置している。墓坑は、長軸87cm、短軸61cmの長方形で、深さは25cmである。長軸方向はN30°E。埋土は5層からなる。墓坑から鉄釘(124~126)3本、銅銭13枚(第23図、第5表、図版10)が出土している。

埋土や出土遺物から、ST1とST2は中世のものと推定することができる。

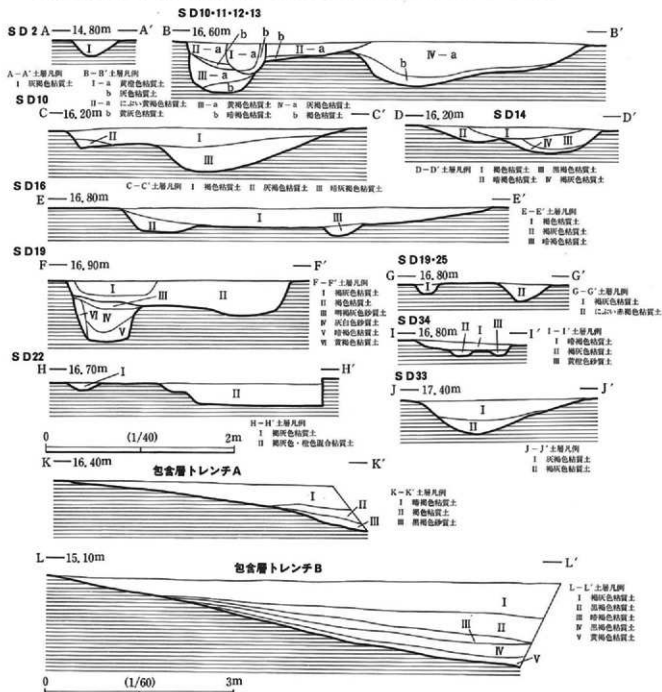
第13図 墓実測図

第4表 墓一覧表

番号	平面形	規模 (cm)			出土遺物	時代
		長	幅	深さ		
1	長方形	136	62	24	土師器(杯)、鉄釘	中世
2	長方形	70	40	11	土師器(杯)、鉄釘、中国銭	中世
3	長方形	186	93	41	陶器	
4	長方形	87	61	25	鉄釘、中国銭	

(5) 溝状遺構・包含層 (第14図)

調査区内から38条の溝状遺構を検出した。流路の方向で大別すると、SD16・19・21のように調査区を取り囲むように流れるものと、SD10のように調査区を東西方向に流れるものがある。SD19からは土師器鍋(72)や瓦質土器鍋(73)・すり鉢(74)などが出土しており、建物群と同時期中世と考えられる。包含層の多くは、調査区の東側及び西側、丘陵の落ち込み部分に位置している。遺物は、瓦質土器足鉢(100)や青磁(99)、瓦質土器すり鉢など中世に関わるものが出土している。



第14図 溝状遺構・包含層トレンチ土層断面図

2. 遺物

調査の結果、縄文時代～古代の遺物が包含層や溝状遺構などから少量出土したが、出土遺物の大半は中世の土師器・瓦質土器・陶器・輸入磁器・石製品・鉄製品・中国銭などであった。時期的には室町時代の遺物が中心となる。以下、各遺構ごとに、主な遺物を取り上げる。

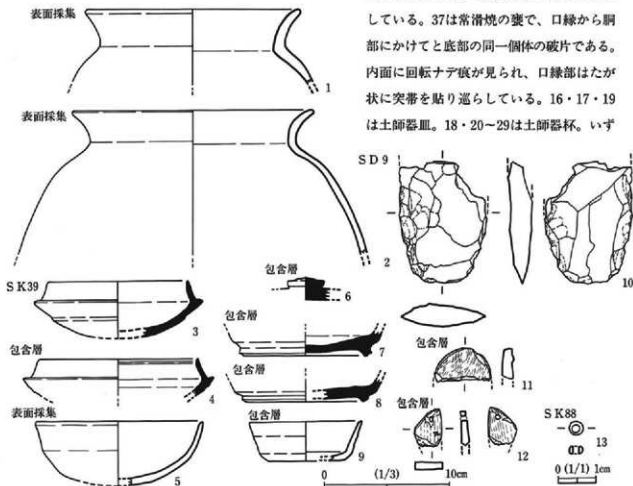
(1) 縄文時代～古代 (第15図、図版7)

1・2は古墳時代の土師器の甕。口縁は「く」の字状に大きく外反し、端部は丸く整形されている。3・4は須恵器の杯身。口縁はやや内傾しながら比較的高く立ち上がる。4の口縁端内面には一条の沈線を施す。6世紀中頃から後半のもの。5は土師器の杯。口縁部外面にナデ調整痕を残す。6は須恵器の杯蓋で、扁平な擬宝珠つまみを持つ。7・8は須恵器の杯身で外端部が傾斜して内側のみが接地面となる高台がついている。奈良時代末～平安時代前半期に比定。9は土師器で須恵器の杯身を模した器形で、外傾しながらまっすぐ立ち上がる。10は縄文時代晩期に多く見られる打製石斧で、安山岩製。11・12は滑石製模造品で片側半分が欠損している。12は穿孔があり、垂下使用が想定される。13は、緑色のガラス小玉で、表面に錆が付着していて透明ではない。

(2) 中世 (第16～23図、図版7～10)

① 掘立柱建物跡・土坑出土遺物 (第16図)

14・15・37は掘立柱建物跡S B 6の柱穴S P 16からの一括出土遺物である。14・15は土師器皿。ともに底部糸切りで、口縁部内面にスガが付着している。37は常滑焼の甕で、口縁から胴部にかけてと底部の同一個体の破片である。内面に回転ナデ痕が見られ、口縁部はたが状に突審を貼り巡らしている。16・17・19は土師器皿。18・20～29は土師器杯。いず



第15図 出土遺物実測図

れも、体部が直線的に外傾して立ち上がり、器壁が非常に薄く、ロクロ回転痕が明瞭に見られるものが多い。内外面とも回転ナデ、底部は糸切り。20・21・27・28は底部に板目痕を残す。30は染付磁器の小杯。麒麟を鼻須で描く。31は備前焼すり鉢の口縁部破片。32は青磁の皿か。38は25・26・27の杯と共伴出土した備前焼の大甕。内外面にヘラケズリを行っている。39は土師器大甕の底部で、外面にタタキを施す。33～36は、土師。縦長の管状を呈し、両端部の角が丸みを帯びている。

② 地下式横穴出土遺物 (第17・18図)

40～51はすべてSC5からの出土である。40～45・47は鍋である。脚部が付き足鍋となる可能性があるものもある。41・45は土師器、ほかは瓦質土器である。40・41・42は口縁端部を内側に折り返しており、42は屈曲の度合いがより大きく、時期が下る。内外面にハケ調整、底部外面にタタキの格子目痕が残る。43は口縁端部が重受状に窪みを有している。47は同じく瓦質の鍋。口縁端部の折り返しがなく平坦になるとともに、口縁部と体部の境にある屈曲の段も緩やかになり、時期的に下る。48は足鍋底部と脚部の破片で、指頭整形痕がよく残る。49は瓦質でホーロクの把手部分と思われる。46は備前系の壺。肩部から胴部にかけて回転ヘラケズリにより整形し、内外面は回転ナデで仕上げている。SC5前室の集礫石中から出土した。50は瓦質、51は土師質の大甕である。50は内面にハケ、外面にナデ調整を行ない、底部には板目痕が残る。復元口径60cm。52～57はSC6出土遺物である。52は唐津系陶器の甕。体部外面は回転ナデ、内面はタタキの同心円文がある。口縁部から体部にかけて、淡黄色の釉が部分的に掛けられている。53は土師器すり鉢。内面に横方向、外面に縦方向のハケ調整があり、オロシメが放射状に施されている。口縁部の内側への折り返し退化した型式であり、衰退段階の特徴を有する。54・57は、瓦質土器の大甕の口縁部破片。55は瓦質の鉢かまたは香炉と考えられる。56は瓦質の火鉢口縁部。58は染付磁器皿。鼻須で、外面・見込みに草花文様を描いている。景德鎮の民窯産と考えられるもので16世紀後半に比定。59は白磁器の小杯。16世紀後半の中国製。60は龍泉窯系の青磁碗の高台部分で、14世紀後半～15世紀代に比定されるもの。61は瓦質土器鍋。62は土師器すり鉢。口縁部内面の粘土帯貼り付け部分は退化し、上端に平坦面をもつ。内面は横方向のハケの放射状のオロシメを刻んである。

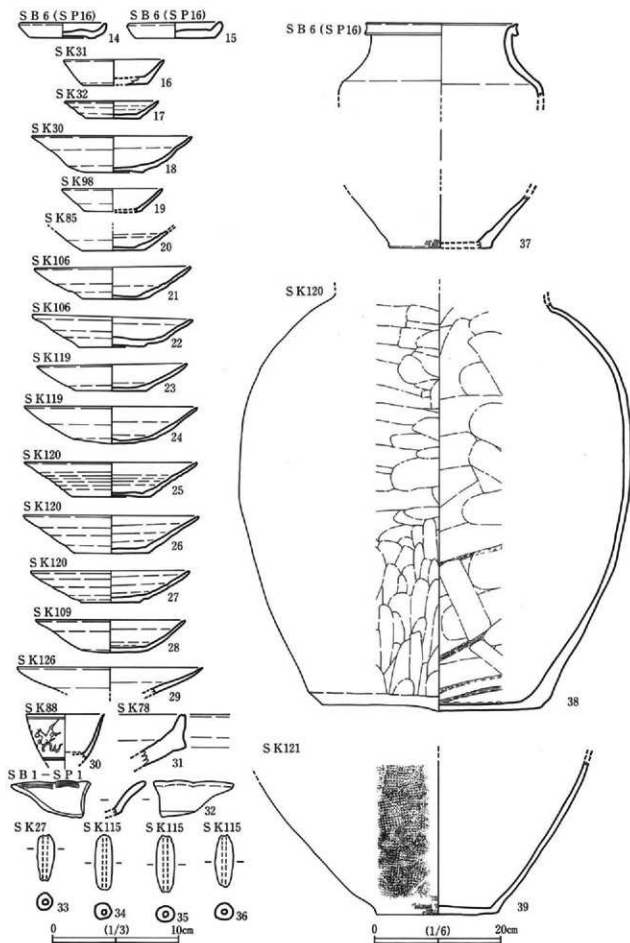
③ 墓出土遺物 (第18図)

63はST1出土の土師器杯。器壁はやや厚手で、体部はわずかに外反しながら立ち上がり、口縁部は尖りぎみに終わる。器高は高く、14世紀代と考えられる。64・65はST2出土の土師器杯。器壁は薄く、体部は真っすぐ外傾しながら浅く立ち上がる。口径は12.5cmと12.2cm。15～16世紀代。

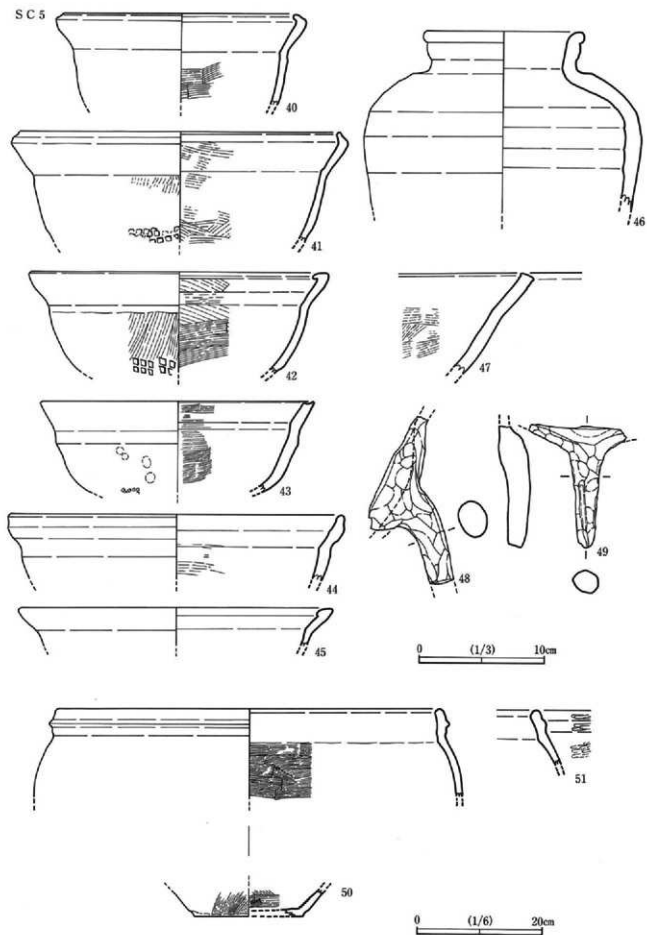
④ 溝状遺構出土遺物 (第19図)

66は土師器杯。67は陶器の碗。見込み部分は、ドーナツ状の釉刺しが行われている。畳付を除き内外面は、透明釉がかかる。口縁部は波状をなす。68・70は龍泉窯系の青磁碗。68は15世紀末～16世紀に比定される。69は備前焼の瓶の底部と考えられ、糸切り痕がある。71は瓦質土器ホーロクの把手。72・73は瓦質土器の鍋。74はすり鉢。75は土師質、76は瓦質の茶釜。76は吊り手部分が破損した後、新たに穿孔補修して使用されたことをうかがわせる。77・79は瓦質土器の火鉢の口縁部破片で、頸部に印文を繰り返して巡らす。78は土師器の羽釜。80は備前焼の大甕の口縁部破片と思われる。

⑤ 柱穴出土遺物 (第20図)



第16图 据立柱建物跡・土坑出土遺物実測図



第17图 地下式横穴出土遺物実測図

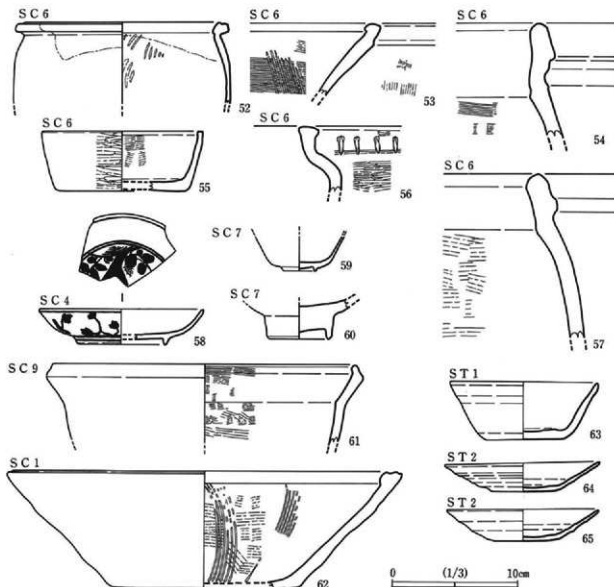
81は土師器杯で、器壁が薄く、器高も低い。82は土師器杯で、底部中央に焼成後とみられる穿孔がある。83は土師器皿。84・85は土師器碗。85は高台がほとんど退化しており、底部に糸切り痕がある。86は土師器杯で、底部糸切り。87は厚手で糸切り痕のある底部を持つ土師器。88・91は土師器鍋で、くの字状に大きく屈曲する口縁部破片。92・93・94は瓦質土器鍋の口縁部で、口縁部の折り返しが少なく、古いタイプである。95は土師質の火鉢の脚付き底部。内面にハケメがある。89は青磁碗。90は青磁盤。龍泉窯系で14世紀半ばの製品と考えられる。96はふいごの羽口片。鉄滓の溶着が見られる。

⑧ 包含層出土遺物 (第20図)

97は土銚。両端部に使用による磨滅が観察される。98は備前焼すり鉢。99は青磁碗の高台部分で、見込みに草花文を描いている。100は瓦質土器の足鍋。口縁端部の内側への折り返しがあり、脚部先端の外側への屈曲がほとんどなくなっている。

① 表面採集遺物 (第20図)

102・103は青磁の碗。104は白磁。口縁部端が無釉のいわゆる口禿の碗。中国福建地方など南方系産で13世紀代と考えられる。105は陶器碗で、内面および外面中位までの範囲に灰白色の釉が掛かる。高

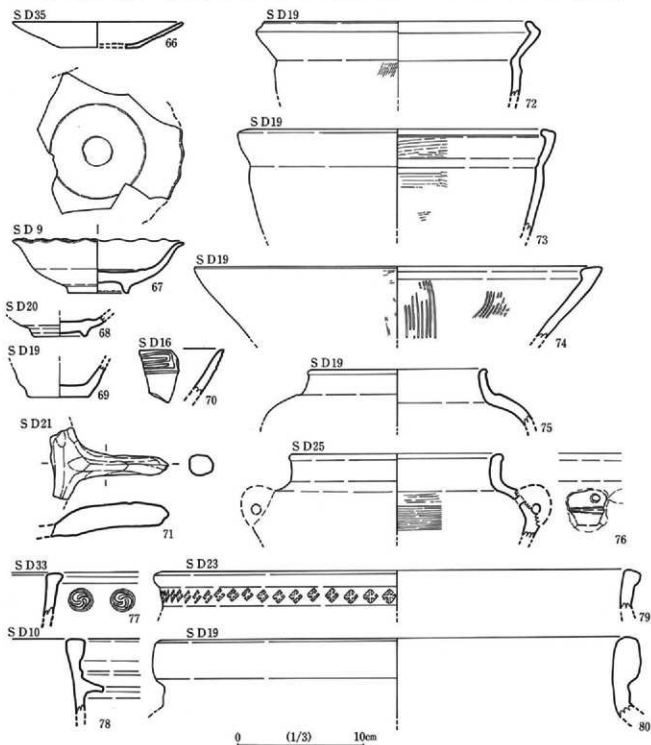


第18図 地下式横穴・墓出土遺物実測図

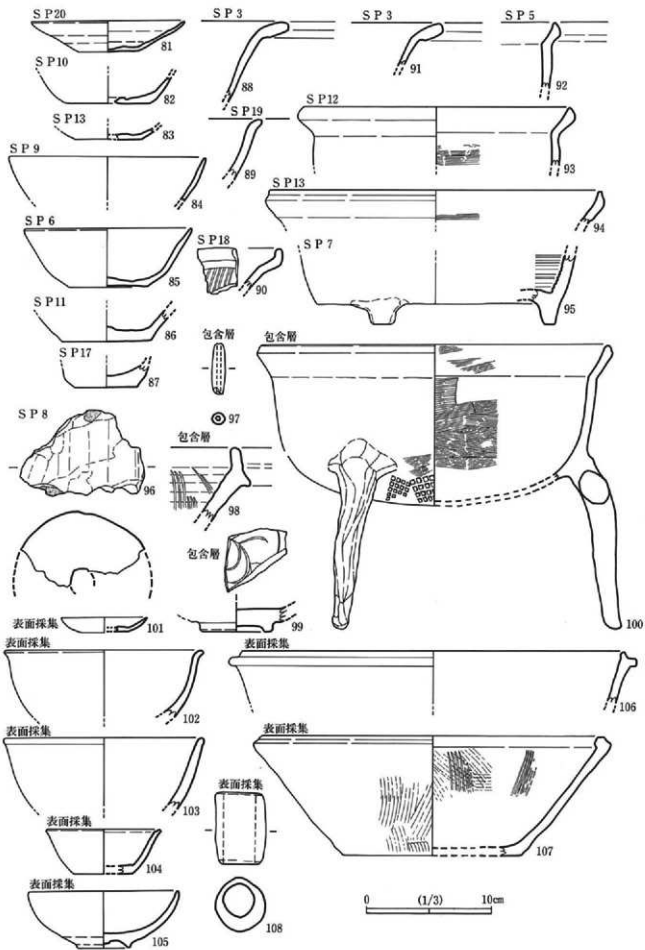
台は削り出し。106は瓦質土器で、羽釜の口縁部か。107は土師器すり鉢。外面は縦方向のハケ、内面は斜め方向のハケのちオロシメを放射状に刻んである。内面底部は、使用による磨耗が著しい。108は円筒状の土製品で、両端部は焼成前に丸く整形してある。土錘ではないかと推定される。

⑧ 石製品 (第21図)

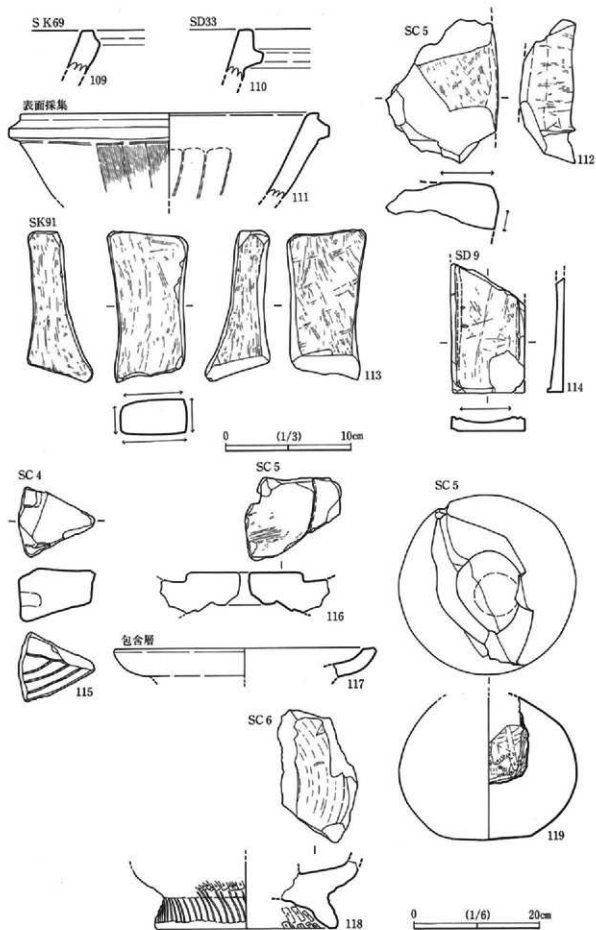
109～111は滑石製石錘破片である。110・111は口縁部外面に鈎状突起を持つ。宇部市下請川南遺跡の産である可能性がある。112・113は砥石。112は地下式横穴SC5からの出土で、大半が欠落しており、2面に研ぎ跡を確認できる。石材は凝灰岩。113は4面に研ぎ面としてかなり使い込んである。砂岩製。



第19図 溝状遺構出土遺物実測図

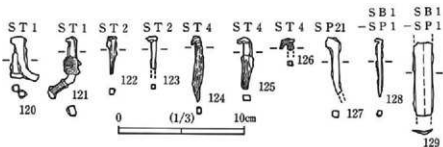


第20圖 柱穴・包含層出土および表面採集遺物実測図



第21圖 出土石器・石製品実測図

114は硯。中央部は長期の使用により磨耗し、窪みとなっている。灰色を呈する泥岩製。115～118は石臼で、破損し



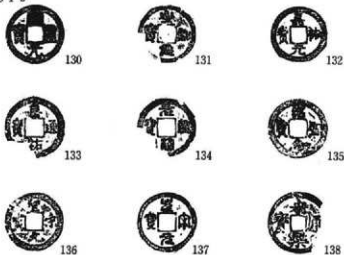
第22図 出土鉄製品実測図

た状態で出土した。117を除き地式下横穴からの出土である。115は挽臼で、すり面に溝が刻まれている。砂岩。116は茶臼の下白部である。安山岩。117は116の欠損した受皿部分に相当する。砂岩。118は116・117の台座に相当する部分。台座の底部裏は半球状にノミで削り貫いてある。安山岩。119は五輪石の水輪。軽量化のため中をノミで削り貫いている。半分に割れた状態で出土した。砂岩。

④ 金属製品 (第22・23図)

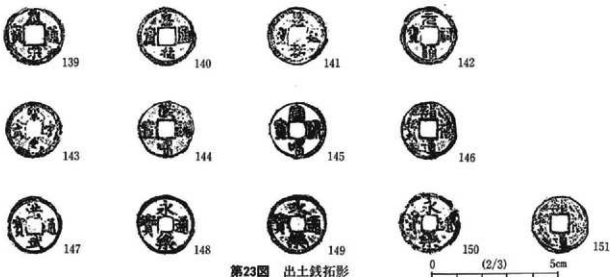
鉄製品(第22図) 120～123はST 1・2から出土した鉄釘である。木棺に使用されていたものと思われる。124～126はST 4から出土した鉄釘で、木棺の接合に使用されたことをうかがわせるように先端部に木質の残片が付着しているものがある。127・128も同じく鉄釘。129はヤリガンナの破片ではないかと思われる。

出土銭(第23図・第5表) 25個体の中国銭が出土した。詳細は、第5表の通りである。大半は、ST 2



ST 2・4の副葬品としてまとまっての出土であり、他は柱穴・溝状遺構から出土した。出土銭では永樂通寶が定期的に最も下ることから、ST 2・4については15世紀初頭を上限とし、それ以降の年代に比定される。なお、破損・錆付着が著しく資料化が困難なものは、第23図の拓影には掲載していない。

ST 4



第23図 出土銭拓影

第5表 出土銭一覧表

『下右田遺跡第4次調査概報』の古銭一覧表に準拠

番号	出土遺構	銭種	初鋳年代	書体	読み方	直径(cm)	穿径(cm)	備考	遺物番号
1	ST 2	開元通寶	武德四年以後 (621年～)	隸書	対読	2.3	0.6		130
2	ST 2	至和元寶	至和二年 (1055年)	篆書	順読	2.3	0.6	一部破損	131
3	ST 2	嘉祐元寶	嘉祐元年 (1056年)	楷書	順読	2.3	0.6		132
4	ST 2	嘉祐通寶	嘉祐元年 (1056年)	楷書	対読	2.4	0.7	一部破損	133
5	ST 2	元祐通寶	元祐元年 (1086年)	篆書	順読	2.4	0.7	一部破損	134
6	ST 2	紹聖元寶	紹聖元年 (1094年)	行書	順読	2.4	0.7		135
7	ST 2	聖宗元寶	建中靖國元年 (1101年)	行書	順読	2.3	0.7		136
8	ST 2	聖宗元寶	建中靖國元年 (1101年)	篆書	順読	2.4	0.7		137
9	ST 2	永樂通寶	永樂六年 (1408年)	楷書	対読	2.4	0.6	一部破損	138
10	ST 4	皇宗通寶	寶元元年 (1038年)	隸書	対読	2.4	0.7		139
11	ST 4	嘉祐通寶	嘉祐元年 (1056年)	楷書	対読	2.3	0.6		140
12	ST 4	嘉祐通寶	嘉祐元年 (1056年)	楷書	対読	2.4	0.7		141
13	ST 4	元祐通寶	元祐元年 (1086年)	篆書	順読	2.3	0.6		142
14	ST 4	聖宗元寶 ?	建中靖國元年 (1101年)	不明	順読	2.3	0.7		143
15	ST 4	政和通寶	政和元年 (1111年)	篆書	対読	2.3	0.6		144
16	ST 4	宣和通寶	宣和元年 (1119年)	篆書	対読	2.3	0.6		145
17	ST 4	開禧通寶	開禧元年 (1205年)	楷書	順読	2.3	0.7		146
18	ST 4	洪武通寶	洪武年間 (1368～1369年)	楷書	対読	2.2	0.6		147
19	ST 4	永樂通寶	永樂六年 (1408年)	楷書	対読	2.4	0.6		148
20	ST 4	永樂通寶	永樂六年 (1408年)	楷書	対読	2.5	0.6		149
21	ST 4	永樂通寶	永樂六年 (1408年)	楷書	対読	2.4	0.6		150
22	ST 4	不明	—	楷書	順読	2.2	0.7	開禧通寶か	151
23	SP22	嘉祐元寶	嘉祐元年 (1056年)	楷書	順読	—	—	破 損	
24	SD10	元祐通寶	元祐元年 (1086年)	篆書	順読	2.4	0.7		
25	SD10	永樂通寶	永樂六年 (1408年)	楷書	対読	—	—	破 損	

Ⅳ 赤迫遺跡（A地区）の調査

1. 遺構

今回の発掘調査で検出された遺構は、古墳時代の竪穴住居跡10軒をはじめ、掘立柱建物跡37棟、土坑160基、堀1条、溝状遺構12条、墓3基、柱穴約4,090個である。これらの遺構の多くは、出土遺物から判断して古代・中世のものとみられる。注目される遺構としては古代の大竪掘立柱建物跡と中世の堀がある。堀は、東西方向に張り出した丘陵を南北に断ち割った形で検出されている。遺構面は、後世の水田開発などにより西側の高台はかなりの削平をうけているが、遺存状況は全般的にまずまず良好であった（付図2）。以下、代表的なものを取り上げ説明する。

（1）竪穴住居跡（第24～29図、図版13・14）

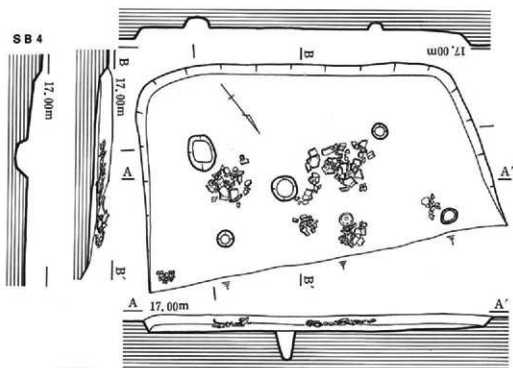
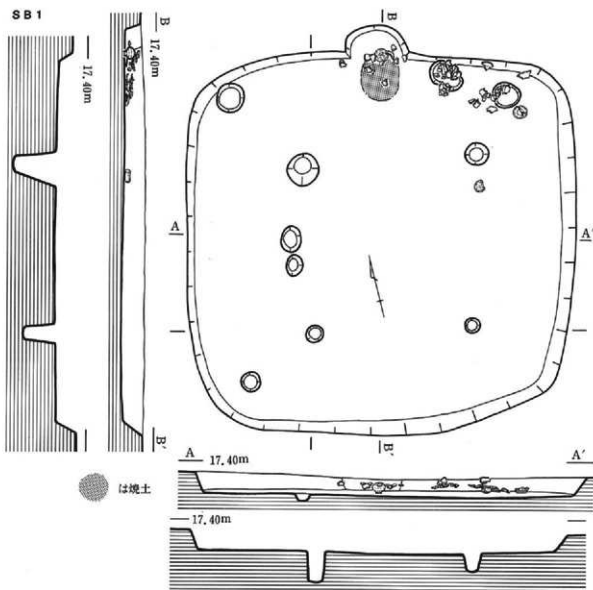
竪穴住居跡10軒は、隅丸方形・方形の平面形を示し、SB10を除き、調査区西側の丘陵高台部に集中して検出された。規模は1辺4m程度のもが多く、出土遺物から古墳時代のもと考えられる。検出された住居の中でSB1・SB6以外は、後世の掘り込みや削平によって、住居の一部が破壊されている。そのため、主柱穴の確認できないものや床面までが浅いものが多い。SB1・SB3・SB5・SB6の壁面にはカマド跡と見られる形跡が確認された。また、どの住居にも周溝は検出されなかった。なお、概要については、第6表のとおりである。

SB1（第24図） 調査区の中央部の南側に位置し、主柱穴が4本、規模が4.10m四方の隅丸方形住居である。今回調査した住居の中で最も遺存状況が良好であった。住居の北側にカマドがあり、その床面に焚口の跡と考えられる焼土が検出された。煙出部が北壁外に30cmほど張り出している。北壁に沿って東側の床面から土師器の甕(171)・杯(174)・甕(175)、須恵器の杯身(172)・長頸壺(173)が出土、中央部からたつき石(365)が出土した。出土遺物からこの住居は6世紀後半のものと考えられる。

SB4（第24図） 調査区の中央部の北側に位置し、主柱穴が4本の方形住居と考えられるが、北側が後世の削平で残存していないので確認できない。また、削平もあって床面までの深さは8cmと浅い。床面中央部付近から土師器の甕(189・191)・甕(190)、須恵器の杯蓋(188)・用途不明の石製品が出土している。出土遺物からこの住居は6世紀前半から中頃のものと考えられる。

SB2（第25図） 調査区の中央部の西側に位置し、主柱穴が4本の方形住居と考えられるが、北側が後世の削平で残存していないので確認できない。規模は検出できたところで5.80mの長さであり、今回の調査で最大規模の竪穴住居と推定される。遺物も多く含まれ、土師器の甕(152・153)・杯(154・155)・高杯(156)、須恵器の杯蓋(157～159)・杯身(160～162)・壺(166・167)・甕(168)などが出土している。しかし、住居内に後世の柱穴の掘り込みが多く、住居に伴わない遺物も多く出土している。出土遺物からこの住居は6世紀前半から中頃のものと考えられる。

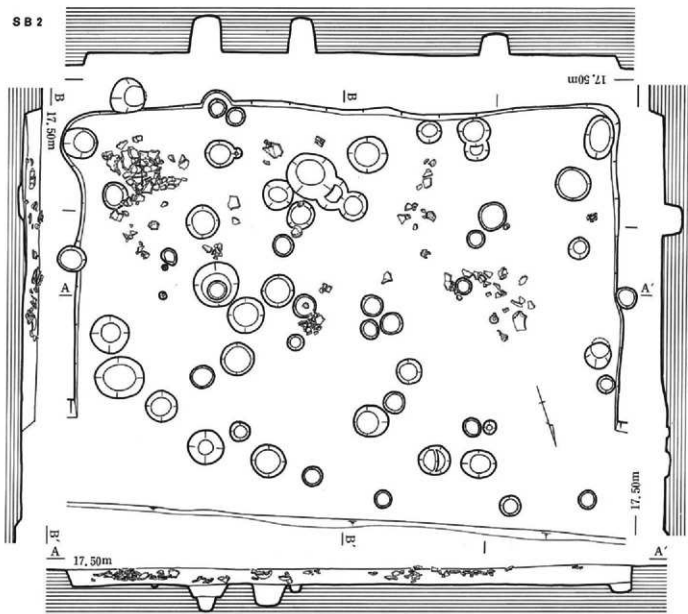
SB9（第25図） SB2の西側で切り合っているが、両者の新旧関係は不明である。後世の削平で残存部が少ないため、主柱穴は検出されていないが、住居床面の掘り込みが明確であるところから、住居と判断した。



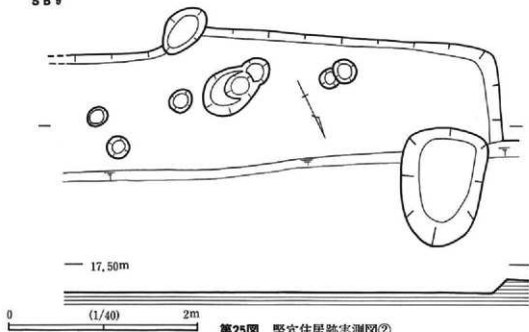
0 (1/40) 2m

第24图 竖穴住居跡实测图①

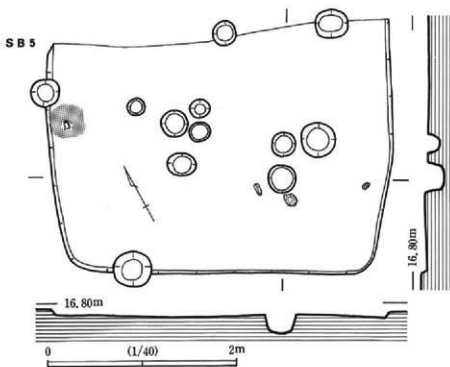
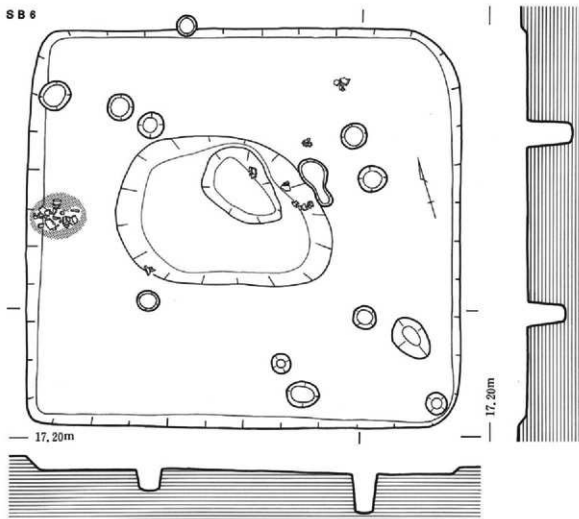
882



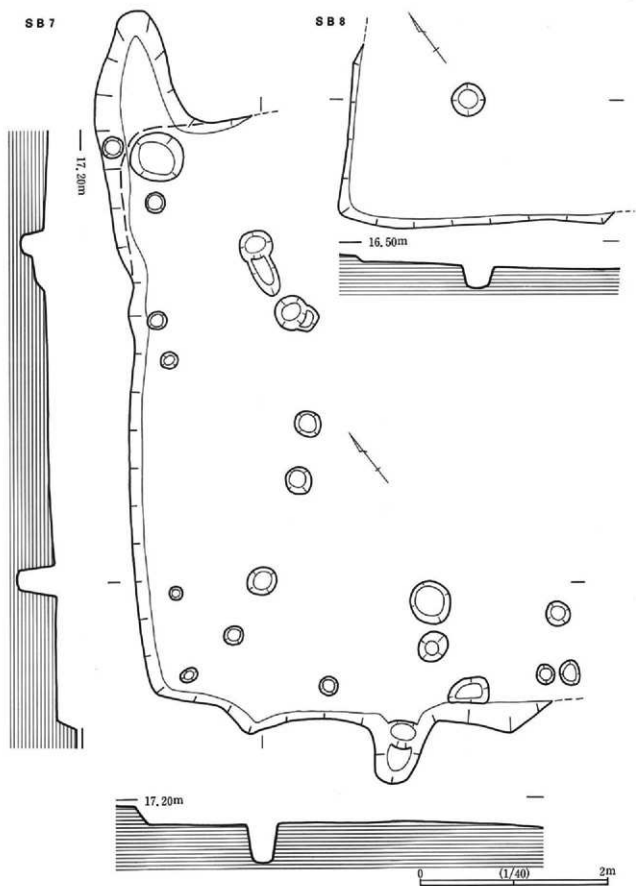
889



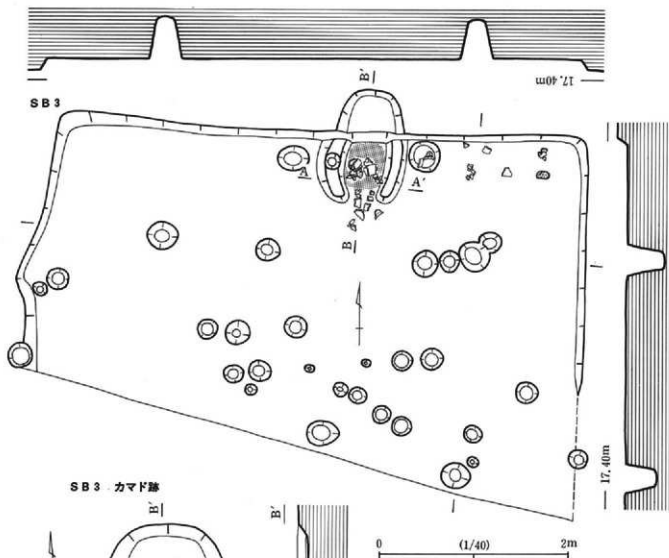
第25图 竖穴住居跡実測图②



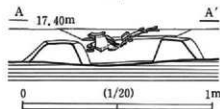
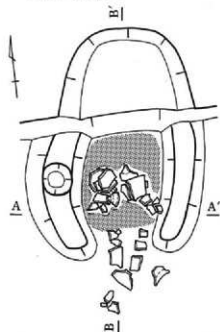
第26圖 竪穴住居跡実測圖③



第27图 竖穴住居跡実測图④



SB 3 カマド跡



SB 6 (第26図) 調査区の中央部の北側に位置し、主柱穴が4本の隅丸方形住居である。住居西壁の中央付近床面にカマド跡と見られる焼土が検出された。中央部の長径2mの土坑は、造構面の土色観察により、後世の掘り込みであると推定される。出土遺物は土師器の甕(183)・杯(184)、須恵器の杯身、たたき石(366)などである。これらの遺物からこの住居は6世紀代のものであると考えられる。

SB 5 (第26図) SB 4の東側に位置する。方形住居と考えられるが、北側は後世の削平で残存していない。主柱穴は不明である。住居の北西側の床面にカマド跡と見られる焼土が検出された。遺物は、住居東側床面から土

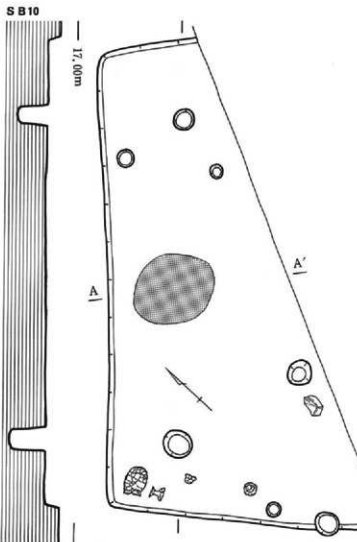
第26図 竪穴住居跡実測図⑤

製支脚 (185)、砥石 (368) が出土している。

SB 7 (第27図) 調査区の中央部で堀の西側に位置する。主柱穴が4本の方形住居と考えられるが、東側の大部分をSD 3と堀に切られている。遺物は、土師器の甕(181)、製垣土器(182)、須恵器の杯蓋 (180) が出土している。出土遺物からこの住居は6世紀代のもと考えられる。

SB 8 (第27図) 調査区の中央部北側で堀の西側に位置する。住居の東側はSD 3と堀に切れ、北側も後世の削平で残存していない。検出された住居中央部の柱穴が主柱穴の1つと考えられる。遺物は須恵器の杯蓋(186・187)、土師器、木炭が出土している。出土遺物からこの住居は6世紀前半から中頃のもと考えられる。

SB 3 (第28図) SB 1の西側に位置する。南側は後世の削平で残存していないが、主柱穴と見られる柱穴が3本確認できるので主柱穴4本、規模は1辺5.80mの方形住居と考えられる。住居の北壁にカマド跡があり、北壁中央部の床面から焼土を検出した。カマドの天井部は崩落している。また、



- 土層凡例
 I 暗褐色土
 II 黒色土
 III 暗黄褐色土
 IV 黄褐色土
 V 赤褐色焼土

燻出部が北壁の外に約40cmほど張り出している。このカマド跡付近から土師器の甕 (177・178) と高杯 (179) が出土している。高杯はその脚部を転用して支脚として用いたと推測される出土状況であった。その他の遺物には、須恵器の杯蓋 (176) がある。出土遺物からこの住居は6世紀中頃～後半のもと考えられる。

SB 10 (第29図) 調査区の東側に1軒離れて位置し、一連の竪穴住居跡群の東限である。住居の東側が後世の削平で残存していない。主柱穴と見られる2本の柱穴が確認できることから、主柱穴4本、規模が5.10mの方形住居と考えられる。住居の西壁近くの床面から焼土を検出、炉跡の可能性もある。遺物は、住居西隅の床面から土師器の高杯 (195)・甕 (196)・小型丸底蓋 (192・194) が出土している。これらの遺物によりこの住居は他の住居に比べ、一段階古い時期のもと考えられる。

第29図 竪穴住居跡実測図⑥

第6表 竪穴住居跡一覧表

番号	規模 (cm)			軸方位 長軸基本 深さ	カマド の向き	出土 遺物	時代
	長軸	短軸	深さ				
1	410	410	20	N75° W	北	土師器(甕・杯・甌)、須恵器(杯身・甕)、たつき石	古墳
2	580	—	13	N21° E	—	土師器(甕・杯・高杯)、平づくね土器、須恵器(杯身・甕・甕)	古墳
3	580	—	12	N4° E	北	土師器(甕・高杯)、須恵器(杯蓋)、石製品	古墳
4	360	—	8	N57° W	—	土師器(甕・甌)、須恵器(杯蓋)	
5	360	—	6	N60° W	北西	須恵器(杯身)、土製支脚、砥石	
6	460	428	7	N20° E	西	土師器(甕・杯)、須恵器(杯身)、たつき石	古墳
7	622	—	17	N47° E	—	土師器(杯身・高杯)、製塩土器、須恵器(杯蓋)	古墳
8	—	—	8	N38° E	—	土師器、須恵器(杯蓋)、木炭	古墳
9	—	—	14	N65° W	—		
10	510	—	14	N48° E	—	土師器(高杯・甕・小型丸底壺)	古墳

(2) 掘立柱建物跡 (第30～35図、図版15・16)

調査区内に多数の柱穴が検出され、その中から掘立柱建物跡が37棟復元できた(第7表)。他にも掘立柱建物として復元される可能性もあるが、確実に柱穴が並ぶものを取り上げた。特筆すべきことは、規模が6間×2間の大型建物跡(S B24)が検出されたことである。また、梁行が1間のものが多く、梁行が広めでも間に柱を通してない。棟方向をみると主に3方向に向いている。第1の方向は、S B24と同じ棟方向で、N72° Wの向きを基準に南北20°の範囲で20棟の建物が建っている。第2は、それとほぼ直行するN23° Eの方向に8棟の建物が建っている。第3の方向は特に調査区の東側に多く、N10° Eの方向で9棟の建物が建っている。棟方向の同じ建物が同じ時代と考えられるとは一概にいえないだろうが、棟方向の変化が、時代の違いを示す可能性もある。柱穴の埋土、出土遺物などから、建物の多くは古代・中世に比定することができる。

S B24 (第30図) 調査区の南側で堀の東に位置する。規模は現状では6間×2間の建物で、今回の調査で最大の建物である。西から2間めに間仕切りとみられる柱穴が検出された。この大型建物は、はじめ5間×2間で建てられ、後に東側の1間が増設された可能性がある。その根拠は次の点である。まず、西から5間目の柱穴に二度掘りの痕跡が確認された。次に、東南端の柱穴が南側の柱穴列から外れている。さらに、桁行の柱間が西側5間は平均2.28mであるのに対して、次の6間めは2.80mと距離が違っている。これらのことにより東側を1間増設したと考えられる。また、建物の西側で2本、南側で大小5本の柱穴列が確認され、底あるいは塀等の構造物が付設されていたと想定される。棟方向はN72° W。柱間の平均は桁行方向2.40m、梁行方向2.34m。柱穴の直径は、平均で長軸120cm・短軸75cmの掘り方を持ち、深さは12～36cmで、後世の削平によりかなり浅くなったと考えられる。柱穴から須恵器の杯蓋(197～203)、製塩土器(204～207)、土師器片が出土。出土遺物から奈良時代末～平安時代前期の建物と推定される。

S B29 (第31図) 調査区の最も東側に位置する3間×2間の建物である。棟方向はN1° W。柱間の平均は桁行方向2.57m、梁行方向2.51m。柱穴の規模は直径40～58cm、深さ36～84cm。建物の南側の柱穴は支え柱として利用された可能性がある。S P1から須恵器の杯蓋(208)、その他の柱穴から土師器の皿片、瓦質土器片が出土。出土遺物から中世の建物と推定される。

S B28 (第31図) 調査区の東側に位置し、現状では5間×1間の建物である。建物の西側は調査区外で柱穴を確認することができないため、桁行はさらに延びる可能性がある。また、南東端の柱穴は検出されなかった。棟方向はN74° W。柱間の平均は桁行方向1.92m、梁行方向3.60m。柱穴の規模は、直径26～36cm、深さ48～69cm。柱穴からの出土遺物はない。

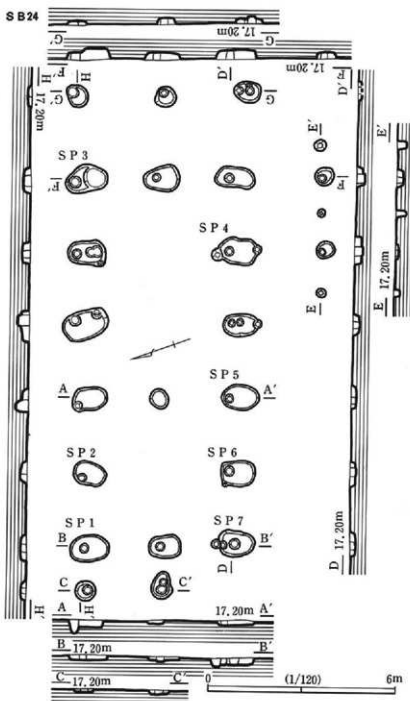
SB11 (第32図) 調査区の最も西側に位置する3間×2間の建物である。棟方向はN80°W。柱間の平均は桁行方向2.27m、梁行方向2.32m。柱穴の規模は直径22~36cm、深さ6~49cm。建物西側中央の柱穴は検出されなかった。SP1から青磁(214)が出土。出土遺物から中世の建物と推定される。

SB18 (第32図) 調査区の西側に位置する3間×2間の建物である。棟方向はN25°E。柱間の平均は桁行方向2.45m、梁行方向2.14m。柱穴の規模は、直径26~40cm、深さ10~19cm。柱穴から土師器の残片・皿片、須恵器片、青磁片が出土。出土遺物から中世の建物と推定される。

SB26 (第32図) 調査区の中央部に位置する3間×3間の総柱建物である。棟方向はN70°W。柱間の平均は桁行方向2.76m、梁行方向1.89m。柱穴の規模は直径20~36cm、深さ10~25cm。柱穴から土師器片、須恵器片が出土。

SB14 (第33図) 調査区の北西側に位置する3間×2間の建物である。棟方向はN75°W。柱間の平均は桁行方向2.01m、梁行方向1.84m。柱穴の規模は直径26~46cm、深さ21~67cm。柱穴から土師器の杯片、須恵器片、滑石製品が出土。

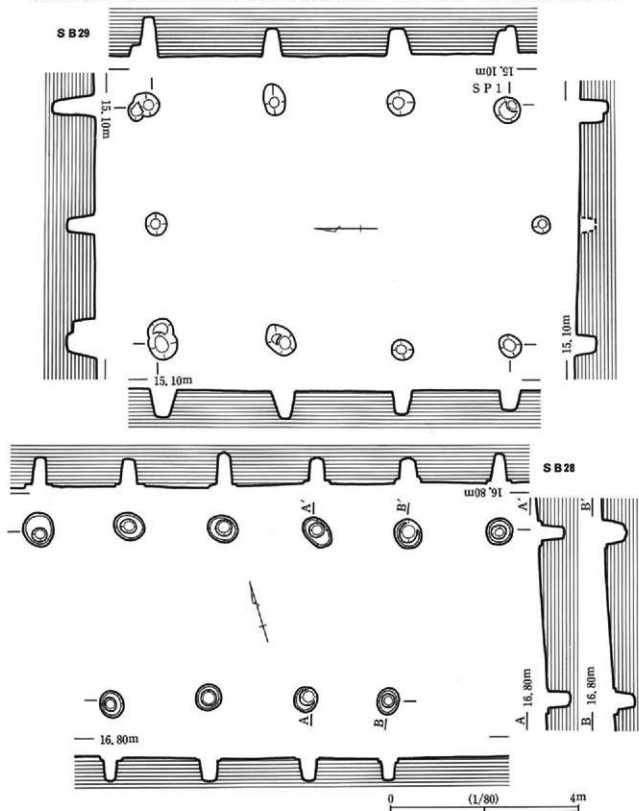
SB16 (第33図) 調査区の北西側に位置する2間×1間の建物である。棟方向はN24°E。柱間の平均は桁行方向2.50m、梁行方向3.84m。柱穴の規模は直径32~40cm、深さ19~46cm。SP1から瓦質土器の足鍋(215)が出土。出土遺物から中世の建物と推定される。



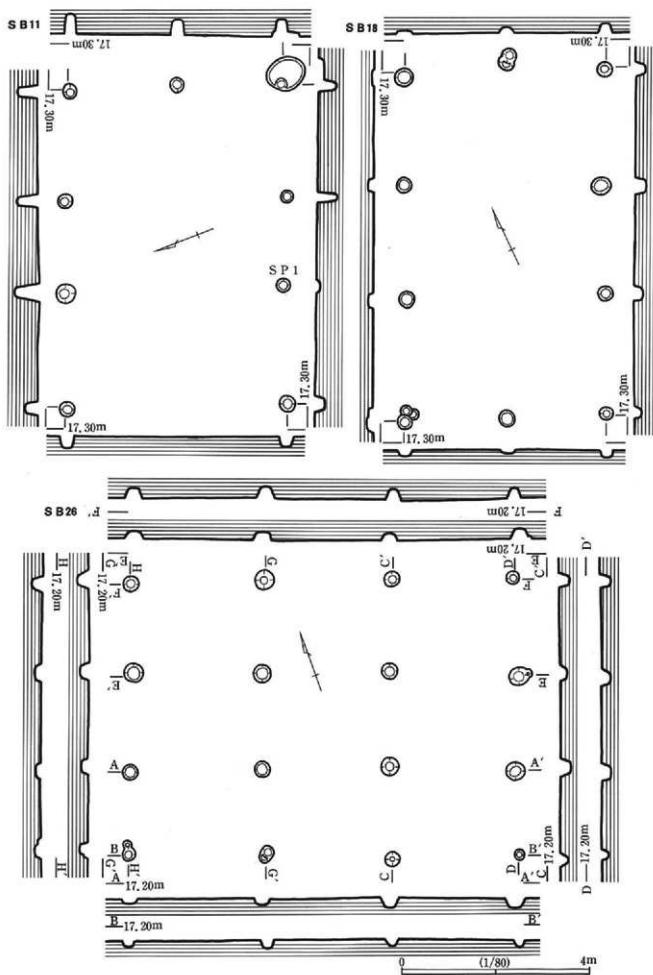
第30図 掘立柱建物跡実測図①

SB13 (第33図) 調査区の北西側に位置する2間×2間の建物である。棟方向はN74°W。柱間の平均は桁行方向2.57m、梁行方向1.87m。柱穴の規模は直径24~60cm、深さ16~50cm。柱穴から土師器片、須恵器片、瓦質土器の足鍋片が出土。出土遺物から中世の建物と推定される。

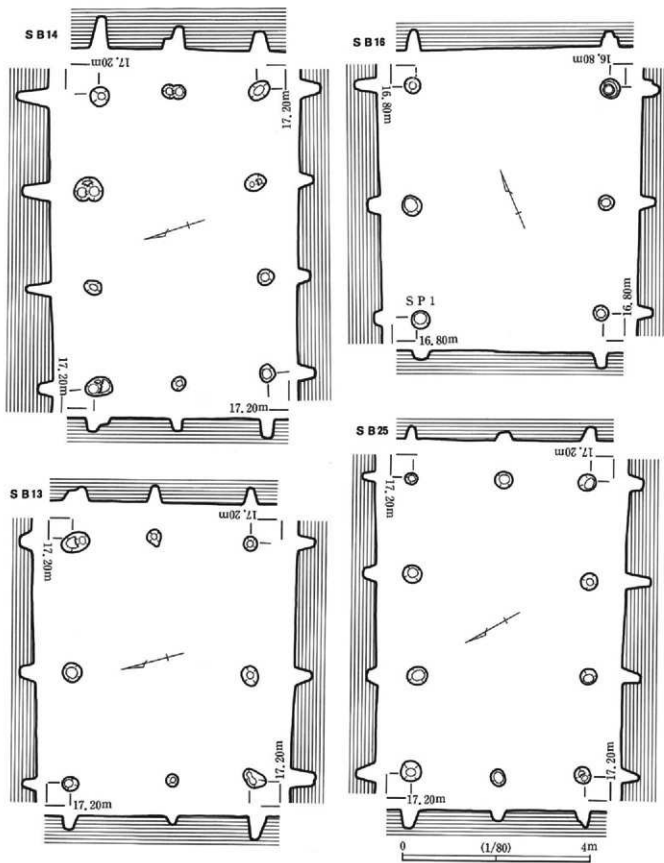
SB25 (第33図) 調査区の東側に位置する3間×2間の建物である。棟方向は、N59°W。柱間の平均は桁行方向2.09m、梁行方向1.83m。柱穴の規模は直径24~40cm、深さ20~52cm。柱穴から土師器の



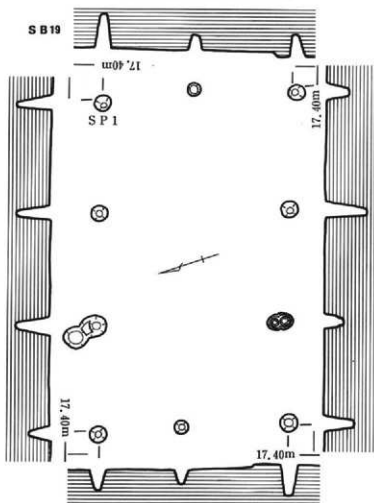
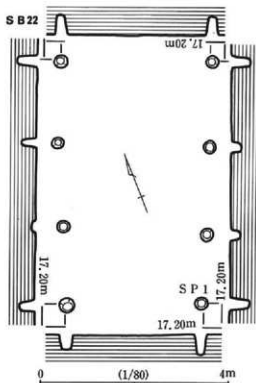
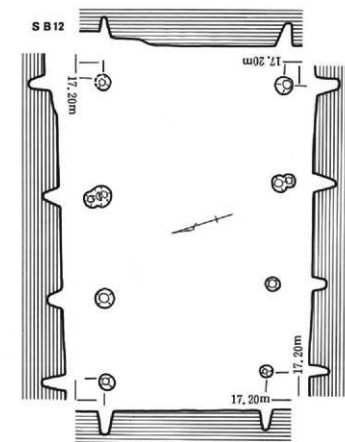
第31図 掘立柱建物跡実測図②



第32图 据立柱建物跡实测图③



第33图 矗立柱建物跡実測图④



斐片、須恵器片、製塩土器片、スラグが出土。

SB12 (第34図) 調査区の北西側に位置する3間×1間の建物である。棟方向はN69°W。柱間の平均は桁行方向2.03m、梁行方向3.36m。柱穴の規模は直径26~44cm、深さ29~50cm。柱穴から土師器片、須恵器片、瓦質土器のすり鉢片・羽釜片が出土。出土遺物から中世の建物と推定される。

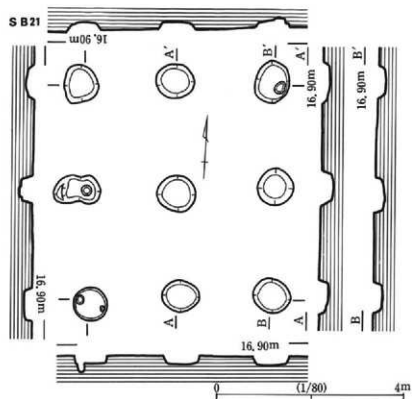
SB22 (第34図) 調査区の南東側に位置する3間×1間の建物である。棟方向はN23°E。柱間の平均は桁行方向1.75m、梁行方向2.82m。柱穴の規模は直径24~30cm、深さ9~43cm。SP1から土師器の皿(210)・碗(211)が出土。

SB19 (第34図) 調査区の中央部の西側に位置する3間×2間の建物である。棟方向はN72°W。柱間の平均は桁行方向2.35m、梁行方向2.00m。柱穴の

第34図 掘立柱建物跡実測図⑤

規模は直径28～42cm、深さ30～81cm。SP1から土師器の皿(209)、その他の柱穴から土師器の杯片、滑石製品が出土。

SB21 (第35図) 調査区の北東側に位置する2間×2間、9本の総柱建物である。これは他の類例から判断して高床倉庫と推定される。棟方向はN5°Wで、周辺にある他の掘立柱建物とは異なる方向を示している。調査区の東側に同じ棟方向の建物がならんでいることから考えると、東側にある建物と同じ時代の建物と推



第35図 掘立柱建物跡実測図④

測することもできる。柱間の平均は桁行方向2.36m、梁行方向1.90m。柱穴の規模は直径70～88cm、深さは19～25cmで後世の削平などにより浅くなっていると考えられる。時代決定の判定材料となるような遺物の出土はなかった。

第7表 掘立柱建物跡一覧表(1)

番号	規模(間)	棟方向	柱 間		出土遺物	時代
			桁 行	梁 行		
			建物の南西隅から(m)			
11	3×2	N80° W	6.80(2.52・1.88・2.40)	4.64(2.24・2.40)	土師器(杯)、須恵器(杯蓋) 青磁	中世
12	3×1	N69° W	6.08(1.86・2.14・2.08)	3.36	土師器、須恵器 瓦質土器(すり鉢・羽釜)	中世
13	2×2	N74° W	5.14(2.28・2.86)	3.74(1.62・2.12)	土師器、須恵器 瓦質土器(足鍋)	中世
14	3×2	N75° W	6.02(2.08・2.04・1.90)	3.68(1.80・1.88)	土師器(杯)、須恵器 滑石製品	
15	2×2	N21° E	4.26(1.96・2.30)	3.04(1.50・1.54)	土師器、須恵器	
16	2×1	N24° E	5.00(2.46・2.54)	3.84	土師器、須恵器(杯身) 瓦質土器(足鍋)	中世
17	1×1	N18° E	1.97	1.97		
18	3×2	N25° E	7.34(2.62・2.42・2.30)	4.28(2.16・2.12)	土師器(樽・皿)、須恵器 青磁	中世
19	3×2	N72° W	7.06(2.18・2.34・2.54)	4.90(2.24・1.76)	土師器(杯・皿)、須恵器 滑石製品	
20	2×1	N65° W	4.16(2.00・2.16)	2.80		
21	2×2	N5° W	4.72(2.26・2.46)	3.80(1.90・1.90)		
22	3×1	N23° E	5.26(1.74・1.80・1.72)	2.82	土師器(皿・杯)	
23	3×2	N64° W	4.86(1.52・1.72・1.62)	3.22(1.90・1.32)	土師器、須恵器	
24	6×2	N72° W	14.40(2.36・2.28・2.40・2.28・2.32・2.76)	4.68(2.28・2.40)	土師器、須恵器、製塩土器	古代
25	3×2	N59° W	6.26(2.10・2.08・2.08)	3.66(1.84・1.82)	土師器(甕)、須恵器 製塩土器、スラグ	
26	3×3	N70° W	8.28(2.96・2.66・2.66)	5.68(1.76・2.04・1.88)	土師器、須恵器	
27	2×1	N68° W	4.46(2.14・2.32)	2.26	土師器(樽)、磁器	中世
28	(5)×1	N74° W	9.62(1.90・2.00・1.90・1.92・1.90)	3.60		
29	3×2	N1° W	7.70(2.44・2.62・2.64)	5.02(2.48・2.54)	土師器(皿)、須恵器 瓦質土器、焼成粘土塊	中世
30	2×1	N12° E	5.04(2.62・2.42)	2.74	土師器(皿)、須恵器(杯蓋) 瓦質土器、青磁(甕)	中世

第7表 掘立柱建物跡一覧表(2)

番号	規模 (間)	棟方向	柱 間		出土遺物	時代
			新 行	梁 行		
			建物の南西隅から(m)	建物の南西隅から(m)		
31	2×1	N73° W	4.08(2.00-2.08)	2.16	土師器、須恵器	
32	2×1	N88° W	2.84(1.40-1.44)	2.80	土師器、須恵器 瓦質土器(羽釜)	中世
33	3×1	N23° E	7.96(2.70-2.66-2.60)	3.36	土師器(杯・皿)、須恵器	中世
34	2×1	N21° E	3.70(1.90-1.80)	2.10	土師器、須恵器	
35	2×1	N19° E	3.80(1.80-2.00)	3.00	土師器	
36	2×1	N68° W	4.08(2.10-1.98)	3.08	土師器	中世
37	4×1	N62° W	7.74(2.00-1.90-1.80-2.04)	2.38	土師器	
38	3×1	N59° W	5.82(1.90-2.24-1.68)	3.80	土師器(皿)、須恵器(杯身)	中世
39	3×1	N52° W	4.66(1.54-1.52-1.60)	3.08	土師器(杯)、須恵器	中世
40	3×1	N14° E	6.98(2.30-2.36-2.32)	3.90		
41	2×1	N66° W	4.40(2.20-2.20)	2.30	土師器	
42	2×2	N 4° E	3.60(1.80-1.80)	4.00(2.00-2.00)		
43	2×1	N 2° E	4.00(1.90-2.10)	3.18	土師器	
44	3×2	N 6° E	7.10(2.04-2.52-2.54)	3.22(1.94-1.28)	磁石	
45	3×1	N10° E	5.88(1.94-1.74-2.20)	3.70		
46	(4)×1	N87° W	8.68(2.18-2.20-2.10-2.20)	3.88	土師器	
47	2×1	N13° E	3.80(2.04-1.76)	2.42	須恵器(杯身)	古代

(3) 土坑 (第38図、図版17)

今回の調査で160基の土坑が確認された。出土遺物から古代・中世のものと考えられるものが多いが、遺物を伴わない土坑も数多く検出された(第8表)。

SK29 調査区の西側に位置する長円形の土坑である。規模は長軸112cm、短軸66cm、深さ20cm。底から直径30cm、深さ35cmの柱穴が確認された。遺物は土師器の甕(219)、須恵器の杯身(218)が出土。

SK32 調査区の西側に位置する隅丸長方形の土坑である。規模は長軸118cm、短軸60cm、深さ25~40cm。遺物は土師器の杯(233)、須恵器片、瓦質土器片が出土した。中世の土坑と考えられる。

SK39 調査区の中央部で、堀の西側に位置する長円形の土坑で、SD3に切られている。規模は長軸108cm、短軸68cm、深さ36cm。遺物は須恵器の杯蓋(225)・甕(235)が出土した。古代の土坑と考えられる。

SK72 調査区の中央部で、堀の東側に位置する長円形の土坑である。規模は、長軸100cm、短軸70cm、深さ11cm。遺物は土師器の椀(231)、須恵器片が出土した。中世の土坑と考えられる。

SK55 調査区の東側に位置する隅丸方形の土坑である。規模は1辺4m四方、深さ31cm。大きさ・形から竪穴住居とも考えられたが、内部から柱穴が検出されなかったこと、住居の掘り込み部分が明確ではないことなどから住居ではないと判断した。遺物は土師器片、須恵器片が出土。

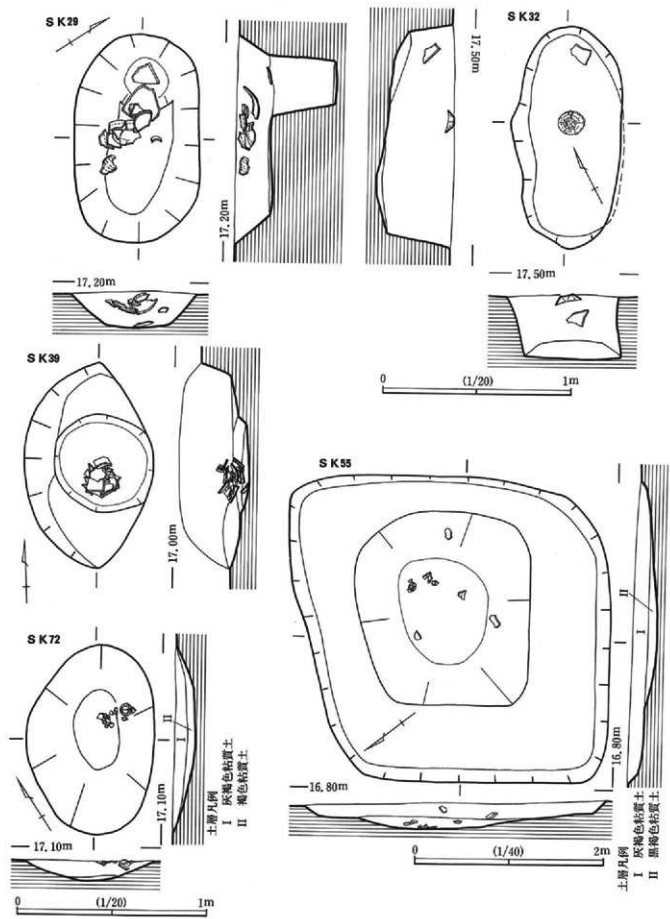
(4) 墓 (第37図、図版17)

今回の調査で3基の墓を検出した。その内訳は木棺墓と考えられるものが1基、土坑墓2基である。出土遺物から3基とも中世墓と考えられる(第9表)。

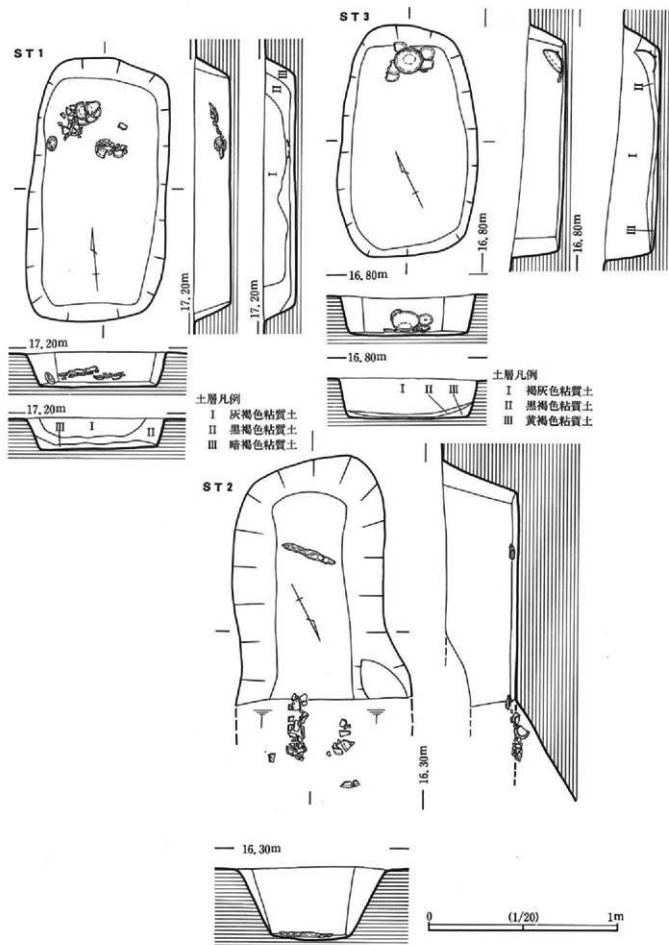
ST1 調査区の西側に位置している。墓坑は、長軸140cm、短軸74cmの長方形で深さは18cm。長軸方向は、N4°E。埋土は3層からなる。墓坑の北側から土師器の皿(236~238)・杯(239)が出土。また、鉄釘(240)が出土しているので、木棺墓と考えられる。

ST2 調査区の中央部で堀の東側に位置しているが、北側は後世の削平で破壊されており、遺存状況は良好とはいえない。墓坑は残存部で長軸128cm、短軸72cmの長方形で、深さは40cm。長軸方向は、N27°E。墓坑の北側から土師器の皿・椀(248~250)、青磁片(251)、南側から鉄製刀子(252)が出土。

ST3 調査区の東側に位置している。墓坑は、長軸124cm、短軸72cmの長方形で、深さは20cm。長軸方向はN28°E。墓坑の北側から土師器の皿(241~245)・椀(246)、鉄製刀子(247)が出土。



第36圖 土坑実測圖



第37圖 墓室測圖

第 8 表 土坑一覽表(1)

番号	平面圖	規模 (cm)			出土遺物	時代
		長	幅	深		
1	隅丸長方形	184	100	23	土師器(皿)、須惠器	中世
2	長円形	139	44	17		古代
3	隅丸長方形	130	84	7	土師器、須惠器	中世
4	隅丸長方形	140	76	11	土師器、須惠器	中世
5	隅丸長方形	152	56	13		
6	長円形	258	140	5	土師器、須惠器	中世
7	円形	120	100	6	土師器(碗)	中世
8	円形	98	88	16		
9	長円形	110	60	20	土師器、須惠器	
10	長円形	112	54	17	土師器	中世
11	隅丸長方形	82	56	16	土師器(皿)、須惠器	中世
12	隅丸長方形	122	88	14		
13	長円形	100	82	12		
14	隅丸長方形	104	56	11		
15	長円形	64	50	9		
16	隅丸長方形	154	98	13		
17	隅丸長方形	122	78	9		
18	隅丸長方形	160	70	18		
19	隅丸長方形	136	40	7		
20	不整形	336	136	62	土師器(杯・皿)	中世
21	長円形	232	114	9	土師器	
22	長円形	176	126	15		
23	不整形	680	204	10		
24	隅丸方形	126	86	7	土師器(皿)	中世
25	円形	68	62	9	土師器	中世
26	隅丸方形	116	96	10	土師器、須惠器(杯身)	中世
27	長円形	336	110	4	土師器(甕・壺)、須惠器	
28	長円形	126	86	13	土師器、須惠器	
29	長円形	112	66	20	土師器(甕)	
30	隅丸長方形	192	136	36	土師器(甕)、須惠器(杯身)	古墳
31	長円形	88	68	9	土師器、瓦質土器	中世
32	隅丸長方形	116	60	40	土師器(杯)、須惠器、瓦質土器	中世
33	隅丸長方形	124	74	26	土師器(杯)、須惠器、瓦質土器(兩甕)	中世
34	隅丸長方形	132	90	26		
35	長円形	148	30	13		
36	長円形	116	58	12		
37	長円形	132	64	10	土師器(杯)、須惠器	中世
38	長円形	96	46	10	土師器(皿)	中世
39	長円形	108	68	36	須惠器(杯蓋)	古代
40	円形	78	68	13		
41	隅丸長方形	108	44	7		
42	円形	76	72	14		
43	円形	88	84	8		
44	隅丸長方形	200	88	20		
45	隅丸方形	100	72	20		
46	長円形	92	60	23		
47	長円形	82	58	30		
48	不整形	276	84	20		
49	隅丸長方形	420	160	16	土師器、須惠器(杯身)	古代
50	隅丸長方形	220	114	18	土師器(甕)、須惠器(杯蓋)	古代
51	長円形	112	96	28	土師器	
52	隅丸方形	64	56	19	土師器	
53	長円形	92	46	8		
54	長円形	166	60	24	須惠器	
55	隅丸方形	400	400	31	土師器、須惠器	
56	長円形	68	50	10	土師器	
57	円形	80	72	17	土師器	中世
58	長円形	224	52	29	土師器	古代
59	長円形	140	122	16	土師器、須惠器(高杯・杯身)	
60	長円形	190	116	13		
61	隅丸長方形	96	72	13	土師器	
62	円形	90	84	53		
63	長円形	68	46	15	土師器、須惠器	
64	長円形	76	60	24	土師器、須惠器	
65	長円形	92	76	20	土師器、須惠器	
66	長円形	78	48	28	土師器	
67	長円形	74	30	11		
68	円形	66	60	18	須惠器(杯身・杯蓋)	古代
69	不整形	326	100	22		
70	不整形	334	104	23	土師器、須惠器	
71	不整形	200	184	40		
72	長円形	100	70	11	土師器(碗)、須惠器	中世
73	長円形	152	130	8		
74	隅丸長方形	182	68	19		
75	長円形	90	66	25	土師器	
76	隅丸長方形	164	92	17		
77	円形	78	78	32	土師器	
78	隅丸長方形	124	44	14	土師器、須惠器(杯蓋・杯身)	
79	長円形	182	124	13		
80	円形	96	88	10	土師器(皿)	中世

第8表 土坑一覽表(2)

番号	平面図	規模 (cm)			出土遺物	時代
		長	幅	深		
81	長円形	204	152	13	須恵器(杯蓋)	
82	長円形	106	66	9		
83	隅丸長方形	218	108	13		
84	隅丸長方形	150	66	10		
85	長円形	122	64	13		
86	長円形	182	72	29		
87	不整形	326	88	21		
88	長円形	186	108	22		
89	不整形	452	156	11	土師器、須恵器	
90	長円形	82	54	26	土師器、須恵器	
91	長円形	128	60	13		
92	長円形	76	50	10		
93	長円形	84	70	31		
94	円形	82	70	22	土師器	
95	不整形	290	136	30		
96	長円形	122	80	12	土師器	古墳か?
97	長円形	80	60	40		
98	長円形	106	76	18		
99	長円形	66	44	22	土師器	
100	長円形	64	48	27		
101	円形	60	50	8	土師器	
102	円形	80	76	10		
103	隅丸長方形	100	36	11		
104	長円形	116	92	18		
105	隅丸長方形	132	118	20		
106	長円形	130	80	10		
107	長円形	122	90	25		
108	長円形	102	84	25		
109	長円形	204	80	23		
110	長円形	138	86	35		
111	隅丸長方形	172	90	26		
112	長円形	100	60	34		
113	長円形	116	80	19		
114	隅丸長方形	184	84	24		
115	不整形	104	84	15		
116	長円形	96	72	23		
117	隅丸方形	186	166	8	土師器(杯・皿・陶)、須恵器、瓦質土器、青磁	中世
118	長円形	160	72	13	土師器(杯・皿)、須恵器、白磁	中世
119	隅丸長方形	274	62	25		
120	長円形	110	40	12		
121	長円形	160	100	29		
122	円形	94	94	20		
123	長円形	136	54	13		
124	隅丸長方形	124	90	18		
125	長円形	80	58	11		
126	不整形	216	90	20		
127	隅丸長方形	162	64	18		
128	隅丸長方形	160	70	9		
129	長円形	100	60	15		
130	長円形	118	58	17		
131	不整形	174	96	33		
132	隅丸長方形	132	88	21		
133	隅丸方形	122	120	45		
134	長円形	134	54	15		
135	隅丸長方形	106	76	11		
136	隅丸方形	114	104	40		
137	長円形	122	54	26		
138	不整形	128	110	34		
139	円形	66	62	40		
140	円形	76	68	46		
141	長円形	88	42	24		
142	長円形	112	72	34		
143	長円形	88	64	35		
144	長円形	84	60	21		
145	長円形	76	58	41		
146	長円形	72	52	37		
147	円形	68	64	40		
148	長円形	90	54	15		
149	長円形	104	60	37		
150	長円形	104	70	15		
151	長円形	108	86	27		
152	長円形	142	88	36		
153	隅丸長方形	136	50	25		
154	長円形	160	68	54		
155	隅丸長方形	114	74	37		
156	長円形	106	88	18		
157	隅丸長方形	76	50	6		
158	長円形	68	48	60		
159	隅丸長方形	104	56	18		
160	隅丸長方形	106	56	10		

第9表 墓一覧表

番号	平面形	規模 (cm)			出土遺物	時代
		長軸	短軸	深さ		
1	長方形	140	74	18	土師器(杯・皿)、鉄釘	中世
2	長方形	128	72	40	土師器(皿・椀)、鉄製刀子、青磁	中世
3	長方形	124	72	20	土師器(皿・椀)、鉄製刀子	中世

(5) 堀 (第38図、図版18)

堀は、西側から東側へ向けて標高15m前後で緩やかな傾斜を持って張り出す丘陵部を南北方向に断ち切るように掘られている。調査区範囲内で、長さ90m、北端部で最大幅4.8m、最大深さ2.0mとなる。南側は、上面が削平を受け、しかも2条に分かれる形態になっているため、測定基準確定が難しいが、南端部で最大幅9.0m、最大深さ1.0mである。もとの状況をとどめる北端部の測定値を堀の規模を表す数値としたい。断面形は北側でV字状・U字状をなし、南側で2条に別れ、V字状・逆台形状をなす。中央付近は幅が広く、底部は浅く平坦である。南側の2条は、西側の方が深く、本体部と思われる。北側と南側で谷方向に向けて、堀の深さが増している。以下、特徴的な箇所での現存規模を示す。

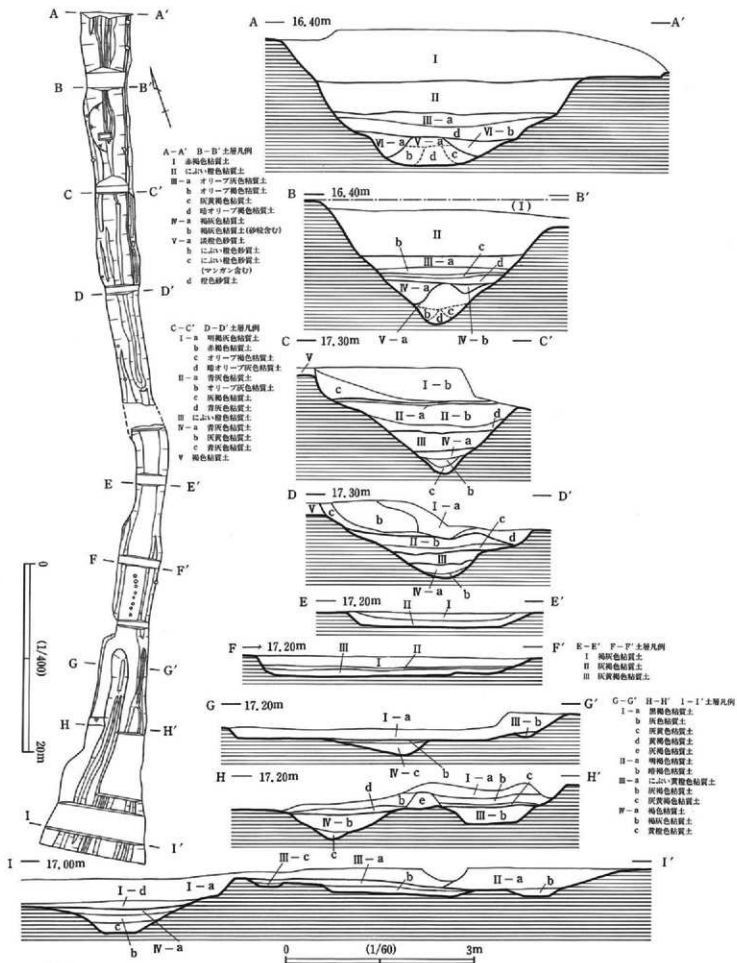
A-A' (上端幅4.8m、底幅1.5m、深さ2.0m) B-B' (上端幅3.6m、底幅0.8m、深さ1.9m)
 D-D' (上端幅3.2m、底幅0.3m、深さ1.7m) F-F' (上端幅5.2m、底幅3.4m、深さ0.3m)
 H-H' (西側-上端幅1.6m、底幅0.2m、深さ0.4m 東側-上端幅1.9m、底幅0.7m、深さ0.7m)
 I-I' (西側-上端幅2.5m、底幅0.5m、深さ0.5m 東側-上端幅5.0m、底幅2.0m、深さ0.4m)

堀の埋土の状況は、底部下層は青灰色・褐灰色粘質土で、流れ込みや沈殿堆積によるものであるが、上層は、堀の廃絶後長期にわたり自然堆積したのではなく、人為的に水平に2～3段階にわたり客土して埋め戻したような層位形成が観察される。堀の廃絶後、短期間に埋め戻されたものと推測される。

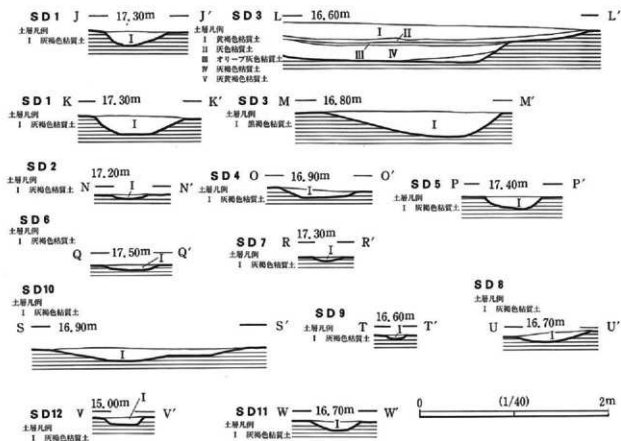
また、土塁があった可能性が考えられるが、調査区内ではその痕跡を確認できなかった。その原因は、堀が廃絶されて埋め戻される際に埋め土として削平されたためか、後世に耕地化された際に削平を受けたため、と推察される。堀の周囲に幾つかの柱穴は検出されたが、明確に欄列・逆茂木などの施設とみなされる整然と並んだ構築物の形跡は、見当たらなかった。堀を渡る橋や入り口の門などの施設も削平などの原因によるものか、本来付設されていなかったためか、いずれも確認されなかった。F-F'の南側の堀底中央部に8個の並んだ柱穴が確認されたが、直径30cm前後、深さ5～10cmと浅く小さいもので、具体的用途ははっきりしない。遺物は、埋土中から須恵器・土師器など古代の遺物も出ているが、底部下層では中世の瓦質土器・土師器・備前焼すり鉢・青磁・石鏝などが出土している。

(6) 溝状遺構 (第39図)

調査区内から12条の溝状遺構を検出した。全般的に後世の削平により底までの深さは浅く、土層は



第38圖 壤土層断面図



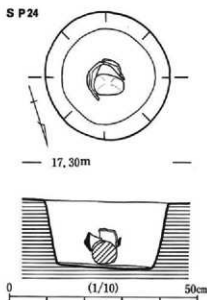
第39図 溝状遺構土層断面図

1層のものが多い(第39図)。流路の方向をみると、SD 1・SD 2・SD 4のように東西方向に流れるものと、SD 3・SD 5のように堀に平行して南北方向に流れるものの2つの型がある。これは建物の棟方向の2つの型と一致するもので、建物との関連性がうかがわれる。SD 3は、SD 1と北側で合流しており、SD 3がSD 1を切っている。遺物は、SD 1から土師器のこね鉢(293)、SD 3から土師器の皿(292)、須恵器の杯蓋(287)・杯身(288)、SD 5から土師器の皿(291)・杯(289・290)が出土している。出土遺物から溝状遺構の多くは、中世のものと推定される。

(7) 柱穴(第40図)

調査区の広い範囲で、約4,090個の柱穴が検出された。特に密集していたのは調査区の西側高台部であった。検出された柱穴のうち、3分の1程度の柱穴から遺物が出土している。柱穴の埋土・遺物からこれらの柱穴は古代・中世に掘られたものと推定される。

SP 24(第40図) 調査区の中央部に位置する。直径34cm、深さ17cmの規模で、遺物は土師器杯(336)が出土。出土遺物から中世のものと考えられる。



第40図 柱穴遺物出土状況実測図

2. 遺物

調査の結果、古墳時代・古代（奈良～平安時代）・中世（鎌倉～室町時代）の各時代にわたり遺物が出土している。また、縄文～弥生時代にさかのぼる石器が、包含層や流れ込み埋土中から数点出土している。主な遺物は、須恵器・土師器を中心として、瓦質土器・輸入磁器・製塩土器・土製品・石製品・銅製小仏像などであった。近世の遺物も少量出土している。以下に、主な遺物を取り上げる。

（1）古墳時代以前（縄文～弥生時代）（第54図、図版24）

358は縦長剣片で、石材は黒曜石である。正面右側上半縁部に二次加工が施され、正面左側縁には原礫面が残る。359は石匙で、横長形態。刃部の調整加工を表裏両面に施し、中央部分には素材面を残す。石材は玄武岩。縄文時代のもと考えられる。364は玄武岩製の磨製大型割刃石斧。刃部には擦過痕が見られる。重量510g。S B 2流れ込み埋土中からの出土である。弥生時代の所産といえよう。

（2）古墳時代・古代・中世（第41～56図、図版19～24）

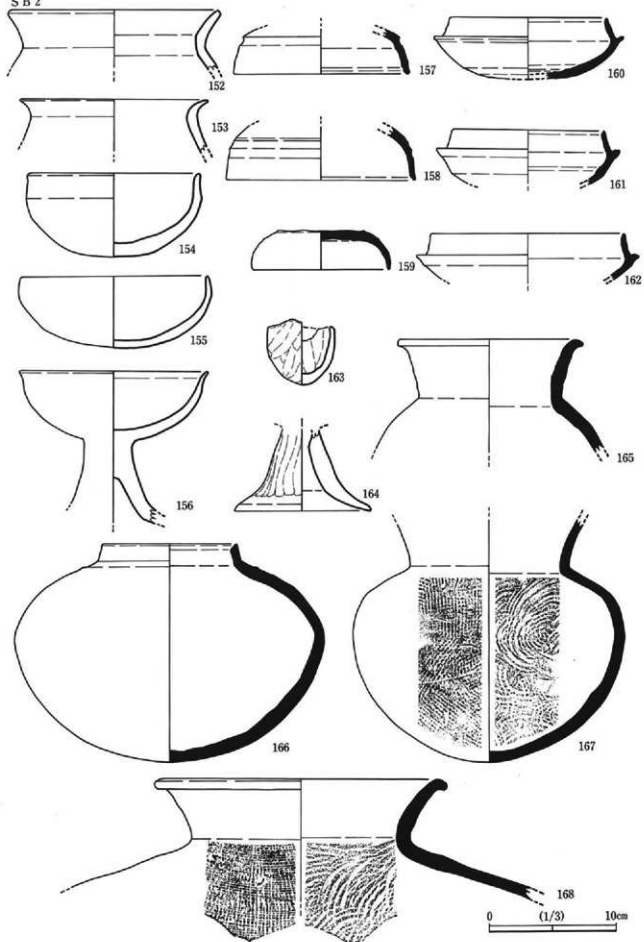
① 竪穴住居跡出土遺物（第41～44図）

竪穴住居跡は、遺物の出土状況などから判断していずれも古墳時代後半に属する遺構であり、主な遺物は土師器と須恵器である。

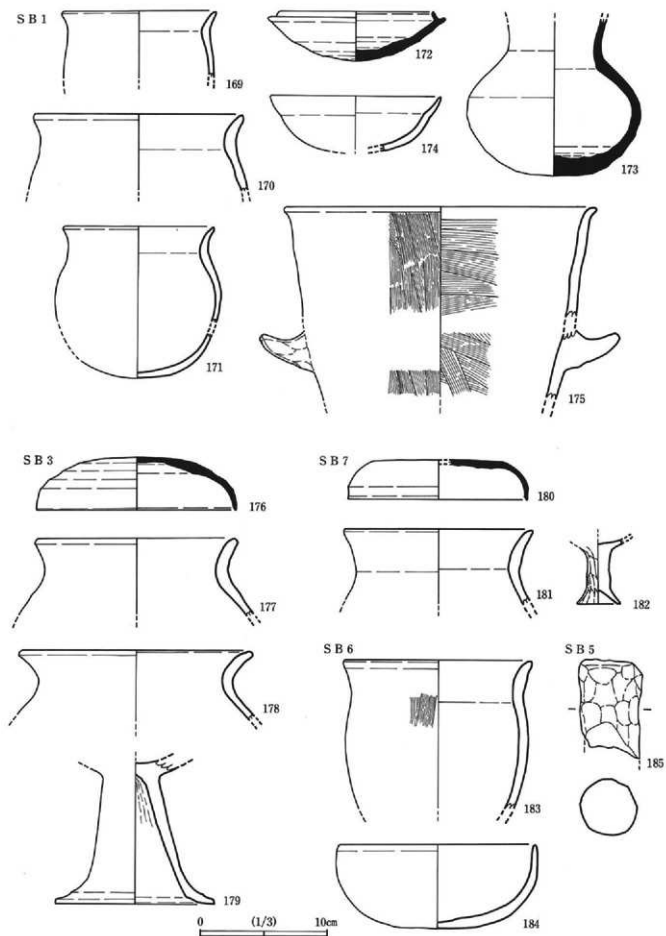
S B 2 出土遺物（第41図152～168） 152～156・163・164は土師器で、他は須恵器である。152・153は甕。器面の磨耗により調整は不明瞭である。154・155は杯。154の器形は体部から口縁部への転換点でわずかに内湾しながら、口縁端部で再度やや外反している。155は口縁端部がゆるやかに内湾しながら終わる。156・164は高杯である。156では、杯部の口縁端部は、器壁が薄くなり開きぎみに外反して終わる。脚部は、杯部の口径に比べてあまり長くはない。164は高杯脚部で、縦方向のミガキが外面に施されている。163は手づくねミニチュア土器で、祭祀などに用いられたものと思われる。内外面に指頭圧痕が底部から口縁部方向に見られる。157・158は須恵器杯蓋、160～162は須恵器杯身である。157・158は、天井部から口縁部への転換点の稜がはっきりと立っており、口縁端部内面に一条の沈線が通る。6世紀前半から中頃のものと考えよう。159は天井部が平坦で、ヘラ切りのままケズリを施していない。口縁端部は丸く終わっている。166タイプの短頸壺の蓋であろう。160～162は口縁部の立ち上がりが高く、まだあまり退化傾向は見られない段階のもの。160・161では、立ち上がり部内面端には、面取りが行われている。6世紀中頃前後に比定されよう。165・167は壺。頸部から口縁部にかけてラッパ状に外側に開いている。165では口縁端部は、外側へ折り返しぎみに縁をかたどる。167は口縁端部が欠損している。肩部の張りが大きく、底部はやや尖りぎみの丸底である。内外面にタタキメ痕が残る。168は甕で、頸部の「く」の字状の屈曲度が大きく肩部の張り出しも大きい器形が想定される。頸部以下内外面にタタキメ痕がある。

S B 1 出土遺物（第42図169～175） 169～171は甕。頸部から口縁部にかけてS字状に緩やかに外反し、口縁端部はやや丸みを帯びる。174は杯。体部と口縁部境に屈曲部をもつが、口縁部の立ち上がりは短い。175は甕。外面は縦方向のハケメ、内面の上部は縦方向、下部は斜め方向にハケメを施す。口縁端部は、外反し丸くおさめる。173は、口縁先端部が欠損している長頸壺。

SB 2



第41图 竖穴住居跡出土物実測图①



第42图 竖穴住居跡出土物実測図②

172の口縁部立ち上がりは、短く退化ぎみに緩やかな角度で内傾しており、底部は丸底傾向がうかがわれる。口径も小型化している。6世紀後半代と考えられる。

SB 3 出土遺物 (第42図176~179) 176は須恵器杯蓋。天井部がやや平坦化して器高が低く、口径もやや小さくなっている。口縁端部は丸みがある。177・178は甕で、頸部の屈曲度が169・170に比べ大きく明瞭である。179は高杯の脚部。脚部は稜が立つ。基部内側に粘土紋り痕が残る。

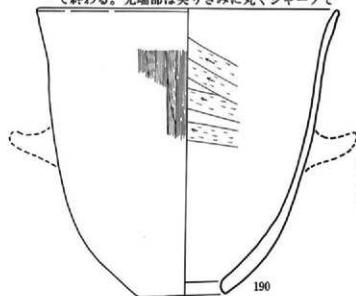
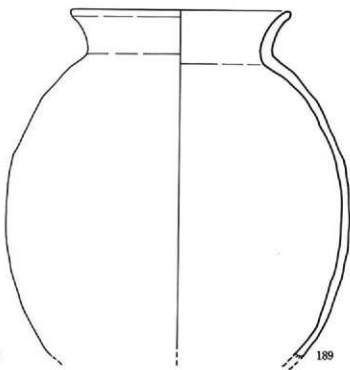
SB 7 出土遺物 (第42図180~182) 180は須恵器杯蓋。天井部が直線的に平坦になっており、口縁端部内側には、一条の沈線の刻み目が巡る。181は甕の口縁部。182は製塩土器の脚部。裾部は外側に開きぎみで安定感を持つ。美濃ヶ浜式Ⅲ類に比定され、6世紀代の所産と考えられる。

SB 6 出土遺物 (第42図183・184) 183は甕で、169・170と同様に頸部のくびれは緩やかで、胴長の器形を呈する。184は杯で、口径に比べて器高が低く、口縁部は直線的に立ち上がって終わる。先端部は尖りぎみに丸くシャープで

SB 8

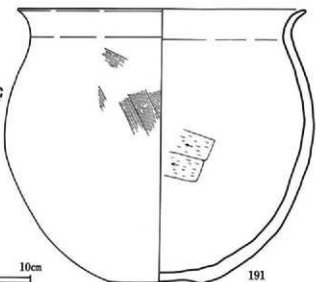


SB 4



190

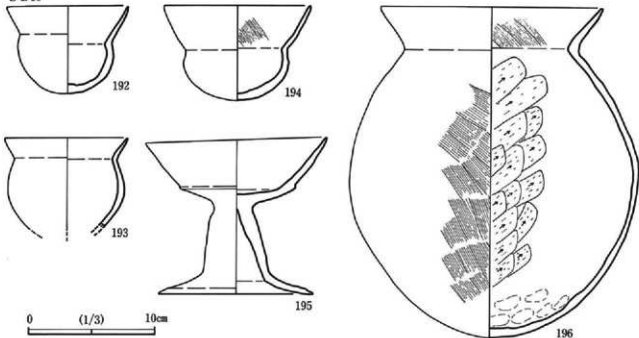
0 (1/3) 10cm



191

第43図 竪穴住居跡出土遺物実測図③

SB10



第44図 竪穴住居跡出土遺物実測図④

ある。底部はやや平坦化している。

SB5出土遺物(第42図185) 185はカマド使用の土製支脚で、先端部が半分欠損している。土器が置かれる上端部には丸い窪みがある。

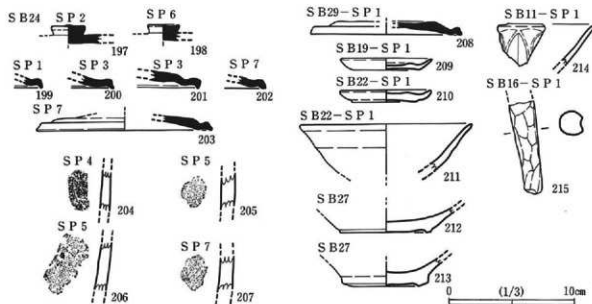
SB8出土遺物(第43図186-187) 186・187は、須恵器杯蓋。天井部は高く丸みを帯び、口縁部との境に明瞭な稜を持つ。186は口縁端部内面を面取りし、187では一条の沈線がめぐる。6世紀前半から中頃のものとされよう。

SB4出土遺物(第43図188-191) 188は186・187と同型式、同時期の須恵器杯蓋である。189・191は甕である。189は頸部が狭まり、くびれ角度が鋭い。口縁部は、やや外反しながら長い。胴長の形態である。191は頸部のくびれは緩やかで、口縁部も短く外湾する。底部は平底化の傾向を示す。胴径24.6cm、器高21.3cmで横長の形態。外面ハケ、内面はヘラケズリ調整を行なっている。190は甕で、把手は出土しなかった。外面は縦方向のハケ、内面は斜め横方向のケズリが施されている。

SB10出土遺物(第44図192-196) 192・194は土師器の小型丸底甕。胴部と頸部の接合部に明瞭な屈曲部を有し、頸部から口縁端部にかけて、ほんのわずかに内湾ぎみに外へ開きながらほぼ真っすぐ、器壁の薄い口縁が長く伸びている。193は小型の甕。195は高杯。少し短めの脚部の裾は、大きく外に屈折して長く伸びて接地面を持つ。杯部は中位で屈曲部を持って斜め上方に屈折し、そのまま真っすぐ伸びて口縁端部に至る。196は甕である。胴部最大径が器高のほぼ中位あたりに位置し、やや胴長丸底の器形である。頸部で「く」の字状に大きくくびれて、口縁端部まで真っすぐ外反して伸びる。調整は、外面に斜め方向のハケ、内面に斜め方向のヘラケズリが施されている。

② 掘立柱建物跡出土遺物 (第45図)

SB24出土遺物(197-207) いわゆる大型建物跡を構成する柱穴からの出土である。197-203は須恵器の杯蓋である。197・198は擬宝珠つまみ部分で、初源期に見られる上端部の丸く尖った宝珠形態がかなり退化して扁平になった時期のものである。199-203は197・198と同じ型式・時期の口縁部である。杯蓋口縁に本来付いていた「かえり」が退化・簡略化して、波線の谷山状に屈曲した端部形態



第45図 掘立柱建物跡出土遺物実測図

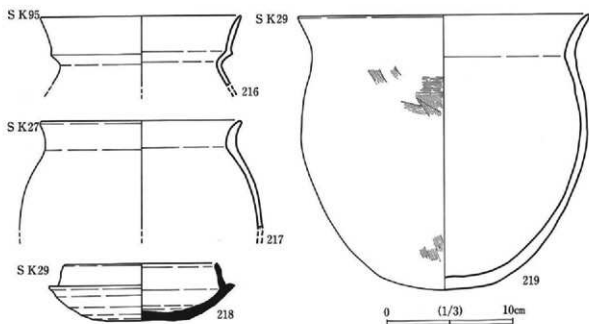
を呈している。天井部が平坦化し、器高は低い。奈良時代末～平安時代前半期に比定されよう。204～207は、六連式製塩土器破片で、内面に布目圧痕が見られる。このタイプの製塩土器は一般に时期的には8～9世紀代に流通したものと考えられており、共存する須恵器の年代観ともほぼ一致する。

その他のSB出土遺物(208～215) 208は須恵器の杯蓋でSB24出土のものと同タイプ。209・210は土師器皿。ともに底部は承切り。前者は底部器壁が薄く、後者は厚い。211は土師器の杯または碗。212は土師器碗の底部で、高台がかなり退化した時期のもの。213は白磁碗の高台部で、削り出しによって製作してある。214は青磁碗の口縁部破片。外面に蓮葉弁文が見られる。215は瓦質土器足鏝の脚部。先端部は外に反らず直線的に終わる特徴を持ち、時期が潤るものではない。

③ 土坑出土遺物(第46・47図)

古墳時代の遺物(第46図216～219) 216は複合口縁の壺で、いわゆる山陰系土器である。217・219は土師器の甕。219の底部はやや平坦ぎみの丸底で、外面はハケのちナデ調整を施している。218は須恵器の杯身で、口縁部は、ロクロ回転痕の凹凸をとどめやや内傾しながら立ち上がっている。底部はヘラケズリ整形し、平坦面を持つ。

古代・中世の遺物(第47図220～235) 220～222は須恵器の杯蓋、223～224は杯身である。221～223はSK50からの共存で、蓋身がほぼセットをなす。蓋はつまみが偏平になり、天井部は平坦化の傾向が見られ緩やかに傾斜して口縁部に続き、端部がわずかに下方へ折れ曲がっている。身は223では平坦な底部から外開きに真っすぐ口縁端部に向けて立ち上がる。224ではやや丸みを帯びた底部を持ち、体部は少し反りぎみに外開きに立ち上がり、口縁端部で内側につまむように仕上げてある。225・226は須恵器の杯蓋、227～230は同じく輪高台付きの杯身で、型式・时期的に蓋身でセットを構成する。227・228はSK81からの、229・230はSK49からの共存出土遺物である。225～226は220～222に比べて、杯蓋はつまみがより偏平に、天井部がより平坦になり、口縁端部も屈曲が大きくなっている。227～230の杯身の輪高台は、初源期に見られる断面ハの字形に高く張り出す形態から幾分退化した段階のもので、平安時代前半に比定されよう。235は須恵器の大甕。口縁は、頸部から屈曲後短く伸びて終わる。やや胴長でタタキメ痕が明瞭に残る。231・232は土師器碗、233・234は杯。



第46図 土坑出土遺物実測図①

④ 墓出土遺物 (第48図)

S T 1 (236~240) 236~238は土師器皿。底部に糸切り痕がある。口径は7.9~8.0cm。239は土師器杯。口縁端部はやや肥厚しながら丸く終わる。体部は右回転ナデ、底部はやや厚く裏側は糸切り。240は鉄釘。断面は方形である。木棺に使用されたものと思われる。

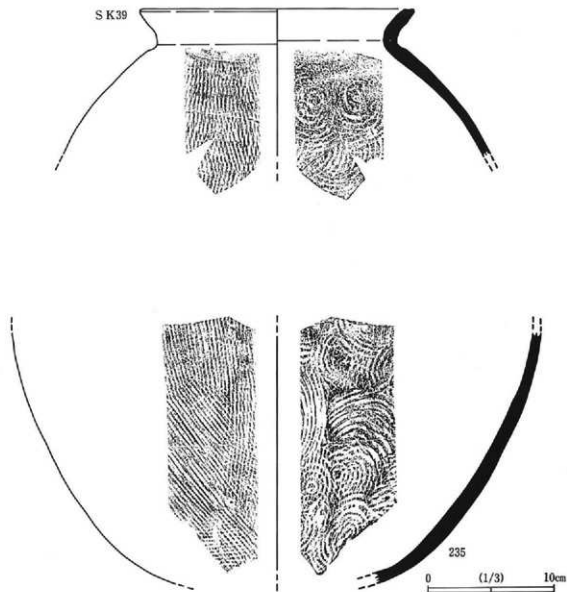
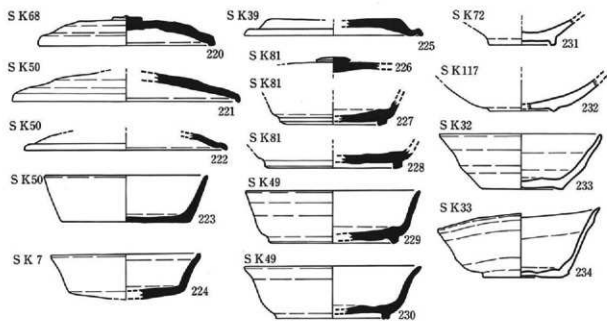
S T 3 (241~247) 241~245は土師器皿。口径は7.8~8.0cm。いずれも回転ナデ調整で、底部には糸切り痕が見られる。246は土師器椀。底部は糸切り後に断面三角形の高台を貼り付けている。体部壁面は回転ナデ調整。247は鉄製刀子の先端部で、刃部は上方へ反らず直線的に突端に至る。

S T 2 (248~252) 248~250は土師器椀。249は底部糸切り後、断面逆台形状の高台が、250は底部に断面三角形の高台が、それぞれ貼り付けられている。251は青磁碗の体部下位破片。内面に割花文らしき文様が描かれ、外面には縦方向に櫛描文状の条痕が見られる。252は鉄製刀子。全長29.4cm、刃幅2.4cmである。刃先端部は、247とは異なり通常見られるように上方に反る。

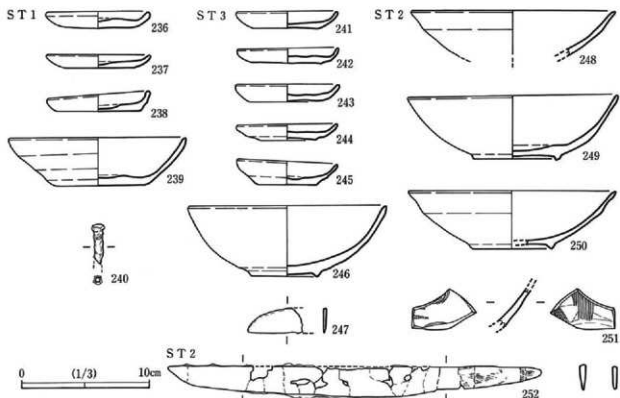
⑤ 堀出土遺物 (第49図)

古代の遺物 (253~266) 堀への流れ込みまたは埋土からの出土で、堀以前の時期の遺物である。253~256は須恵器のつまみ付きの杯蓋。257~260は輪高台付きの須恵器の杯身。260は口径15.4cmと大きく、体部がまっすぐ急な角度で立ち上がり、器高も6.6cmと高く、断面四角の高台が外に張る。奈良時代末期に溯るものと考えられる。261は口径12.0cm、器高3.6cmとやや小ぶりの須恵器の杯身である。262は須恵器の皿と思われる。263は須恵器の大甕。大きく外反する口縁端部にU字形の溝が巡り、タグ状を呈する。内面にタキ当て具の同心円文が残る。264は、高台付きの壺の底部と推定される。底径10.5cm。265・266は六連式の製塩土器片で、内面に布目圧痕が明瞭に観察される。

中世の遺物 (267~286) 堀の底部・下層からの出土品を中心とし、堀の時期決定の参考資料となるものである。267は土師器椀で、断面四角形の高台が付いている。268・269は瓦質土器の鍋または足鍋の口縁部である。14~15世紀代の形態と思われる。270~273は瓦質土器の足鍋脚部破片。273は先端部がわずかに外側に屈曲しており、獸脚状に顕著に外側へ屈曲させる段階から屈曲がなくなり棒状



第47图 土坑出土文物实测图②



第48図 墓出土遺物実測図

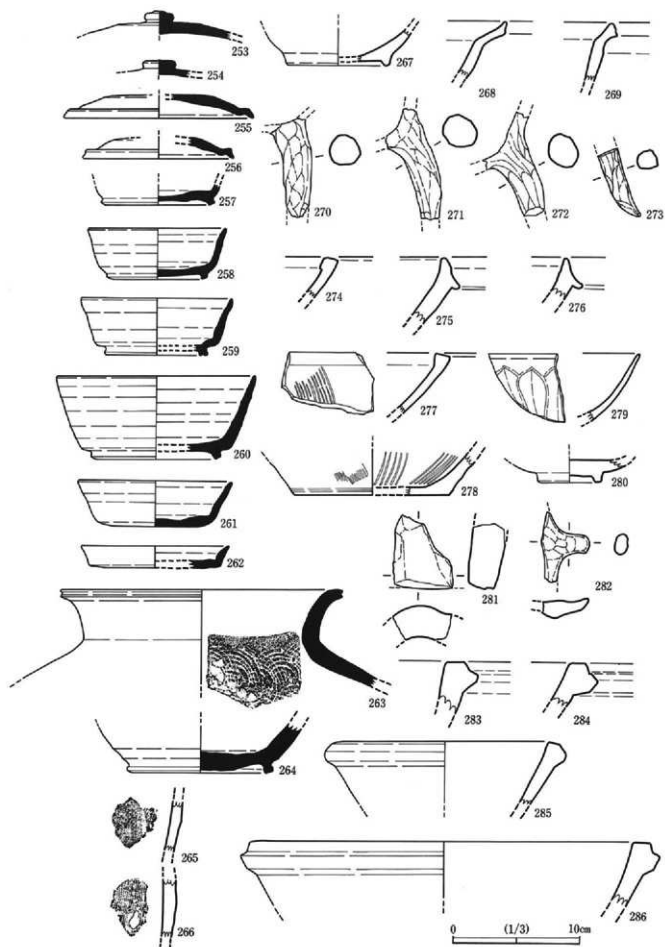
になる段階への一連の型式変化の中間段階に位置づけられるものである。14世紀後半から15世紀代と考えられる。275・276は、備前焼すり鉢で、口縁部の上部を上立ち上げさせ、外部下方に「かえし」状の突起が張り出す形態である。備前焼福年Ⅳ期に相当し、15世紀代に比定されよう。274は土師器こね鉢の口縁部破片。口縁端部内面に断面四角形の肥厚帯が薄く貼り付けられている。277・278は土師器のすり鉢。277では口縁端部内面に断面三角形の肥厚帯が貼り付けられている。278には4条の備目で放射状のオロシメが刻まれる。279・280は青磁碗。279は龍泉窯系で鎮蓮弁文を外面に描く。281はふいこの羽口破片。282は土師質でホーロック把手の破片と思われる。整形のための指頭圧痕が明瞭である。283～286は滑石製石鍋の口縁部である。283・284・286は口縁部直下に削り出された断面不等辺台形の鈎が巡るタイプである。口縁端部に平坦な面を持つ。286は推定復元口径29.8cmである。285は鈎の削り出しが不明瞭で、断面は丸みをおびた台形を呈する。鈎が退化する段階の型式と考えられる。口径は16.2cmでやや小型である。宇部市下舘川南遺跡が有力な産地と考えられる。

④ 溝状遺構出土遺物 (第50図)

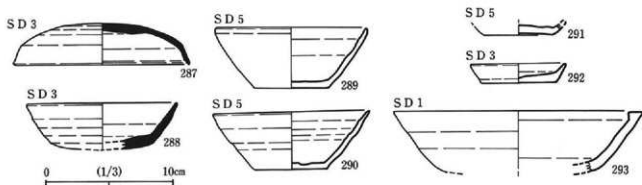
287・288は須恵器の杯蓋と杯身。289・290は土師器杯。器壁は薄く、底部から直線的に外反しながら立ち上がり、底が深い形態である。ロクロ回転痕跡が明瞭であり、底部は糸切り。289は口径11.8cm、底径5.8cm、器高4.8cm。290は口径12.2cm、底径5.8cm、器高5.1cm。291・292は土師器皿。293は土師器のこね鉢か。口縁端部内側に断面三角形の肥厚帯が貼り付けられている。復元口径19.8cm。

⑦ 柱穴出土遺物 (第51・52図)

古墳時代の遺物 (第51図294～300) 294・295は土師器の甕。294は頭部のくびれが大きく胴張りの器形である。口縁端部は薄く尖らず厚い器壁のまま先を丸めている。295は頭部のくびれがほとんどなく口縁部から胴部へなだらかに続き、胴長の器形である。外面は縦方向のハケ、内面は縦方向の



第49图 出土文物实测图



第50図 溝状遺構出土遺物実測図

ケズリによる器面調整を行っている。296は土師器の杯である。口縁端部は、器壁が薄くシャープに尖っている。復元口径15.6cm。297・298は須恵器杯身。297は口縁立ち上がり外側へ反りぎみに急な角度で内傾し、長い。6世紀中頃。298は297より口縁立ち上がりは退化して短くしかも傾斜角度はより内側に向いている。6世紀後半代。299・300は美濃ヶ浜式の製塩土器の脚部。右裾部内側の半球形の凹みが顕著な皿類に編年されるタイプである。300は299に比べ脚が短い。

古代の遺物(第51図301~314) 301・302は六連式の製塩土器破片で、内面に布目匠痕が残る。303・304・307・308・311・312は須恵器の擬宝珠つまみを持つ杯蓋である。303・304は、一段階古い型式である。305・306・309・310・313・314は須恵器の杯身である。体部から口縁端部にかけて、ほぼ直線的に斜め上方に外開きに立ち上がる器形を呈する。高台は底部の外縁部分に、外側へ張らない角度で低く貼り付けられている。なお、304・305・306はS P 10からの共伴遺物である。以上、これらの須恵器は奈良時代末期~平安時代前半の所産と考えられる。

古代・中世の遺物(第52図) 315~324は土師器皿。口径は6.8~9.0cm、器高は1.0~2.0cmで小型のもの。回転ナデを施し、すべて底部糸切りである。325は土師器の台付皿。高い高台部に比べ皿部は浅く直線的に外側に開く。平安期に比定。326~331は土師器椀。326は体部がわずかに内湾しながら立ち上がり、口縁部でやや外反し、端部は丸く仕上げられている。底部に高い高台が貼り付けられている。平安期と考えられる。327・328は、323の土師器皿とともにS P 26から共伴出土したもので、ほぼ同一の規格品である。断面三角形の低い高台が貼り付けられ、器壁は薄く口縁端部に向けて内湾ぎみの形態をとる。327は口径15.2cm、器高5.1cm。328は口径15.4cm、器高5.5cm。329~331も同じ型式のものである。13世紀後半~14世紀にかけての時期と見られる。332~337は土師器杯である。体部は器壁が薄く、直線的に外開きに立ち上がり、口縁端部は、上方に尖りぎみに仕上げられている。ロクロ回転の凹凸が顕著に見られ、底部は糸切り痕が認められる。333は口径12.7cm、底径6.5cm、器高4.7cmで深めの器形であり、336は口径13.3cm、底径6.5cm、器高3.7cmでやや浅めの器形を呈する。338は瓦質土器の羽釜である。内面は横方向のハケ、外面は縦方向のハケが施されている。復元口径30.2cm。339は瓦質土器鉢。内面に横方向のハケ、外面に縦方向のハケ調整を行っている。340は土師器鉢。口縁端部をわずかに折り返す。341~343は東播系のこね鉢。体部器面に明瞭なロクロ回転痕が見られる。口縁端部をわずかに上方につまみあげている。341・342の口縁端部外面には黒色釉がかかっている。344~345は玉緑の白磁碗。346~350は鍋蓮弁の青磁碗で、龍泉窯系。351は青白磁合子の身である。側面菊座形を呈している。口径4.5cm、器高2.0cm、底径3.8cm。軸葉は底部から外面下半分にかけてと受部を除き、内外面ともにかかっている。352は青磁皿で、見込みに割花文を描いている。12世紀代のものと考

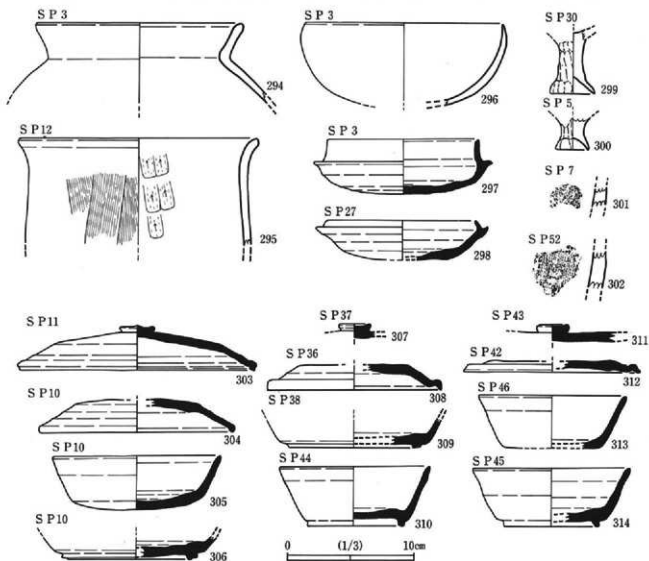
えられる。

⑧ 包含層出土・表面採集遺物 (第53図)

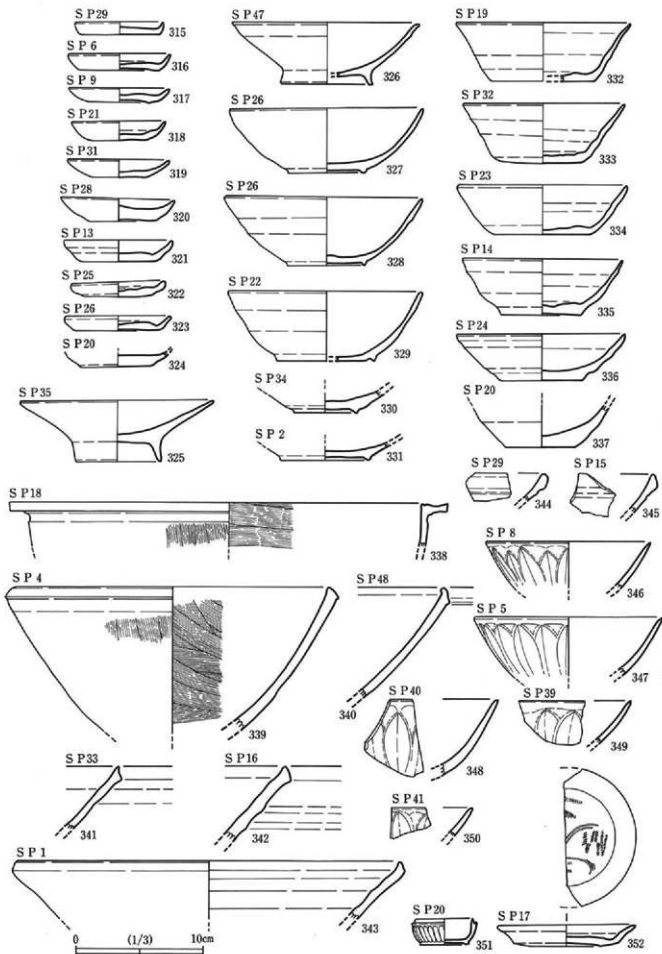
353は土師器杯。底部は丸底で、体部から口縁部にかけてわずかに内湾しながら立ち上がり端部を尖りぎみに丸く仕上げている。354は台付皿と見られるもので、底部は糸切り。外面は回転ナデを施す。355は瓦質土器鉢。356は東播磨のこね鉢。器面にロクロ回転痕の凹凸が顕著に見られる。口縁端部は上方へつまみあげるように丸く尖らせており、下方にも断面三角状の張り出しがある。底部は糸切り。底部内面は使用により器面がかなり磨耗している。青灰色を呈する。13~14世紀代のもものと見られる。357は土鉢。長さ5.4cm、径3.2cm。

⑨ 石器・石製品 (第54・55図)

358・359・364は「古墳時代以前」の遺物として53ページで既に述べた通り。360・361は滑石製模造品で穿孔が見られ、吊り下げて使用されたものと推測される。362は、滑石製紡績車の未製品と見られる。上面から底面に向けて面取りによる整形過程にあり、中央部穿孔は未だ行われていない。363は、泥質変岩製の用途不明石製品である。断面U字形の溝が縦方向に刻まれている。表面の左側側面・下側面は、磨いて面取り状に加工してある。裏面は半分剥離して欠損しているが、表面の溝に対応して



第51図 柱穴出土遺物実測図①

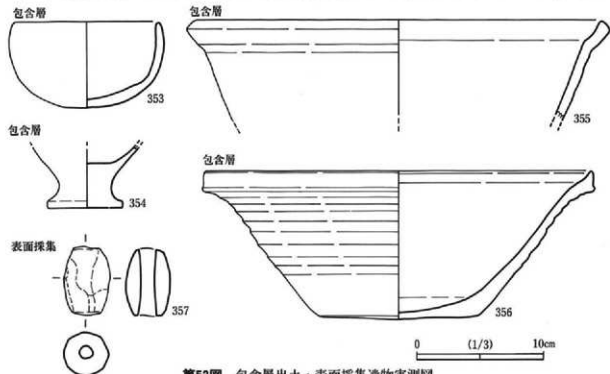


第52図 柱穴出土遺物実測図②

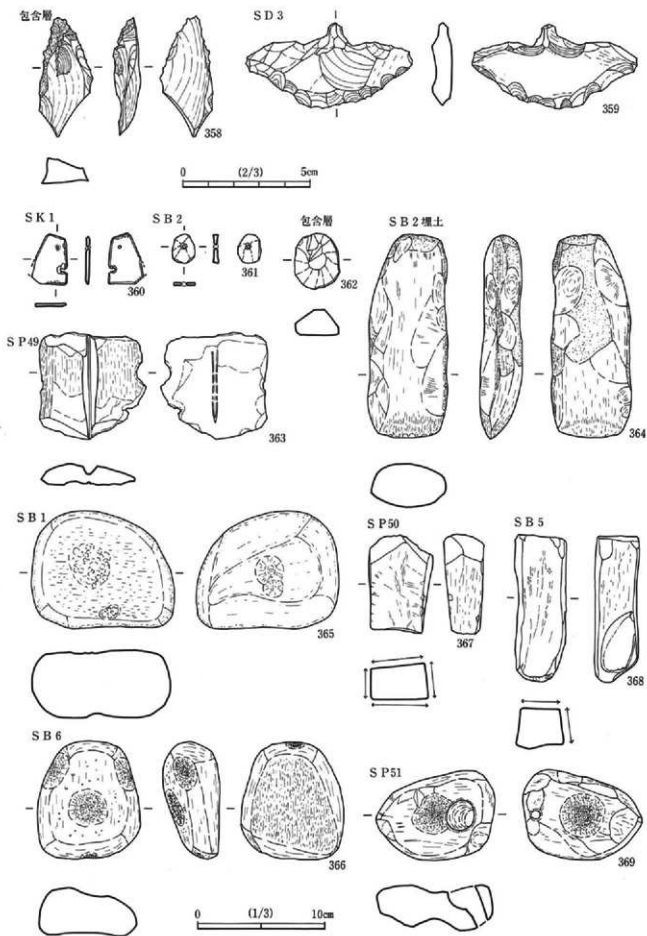
平行に溝が彫られていた痕跡をとどめている。縄文時代の矢柄研磨器の一部である可能性もあるが、はっきりとした用途はわからない。365・366は竪穴住居跡S B 1・S B 6出土のたたき石である。365は下面中央に使用による凹みがあり、上面にも一部使用打痕が観察される。石材は花崗斑岩。366は上面中央部と4側面あわせて5箇所に使用の形跡が確認できる。砂岩製。367・368は砥石。367は凝灰岩製で4面が使用されている。中砥と思われる。368は2面に使用が認められる。石材は砂岩。369は上面と下面に凹みがあり、もともとたたき石として使用されたものと考えられる。その後、上面から下面に斜め方向に直径2.2~1.0cmの穿孔を施したものである。穿孔の目的とこの石製品の用途は不明である。花崗岩製。

370は滑石製子持勾玉である。S B 6北西、S B 4南東の周辺部に所在した灰褐色の遺物包含層下層（古墳時代の須恵器・土師器を含む）の地山に接する地点から出土したもので、具体的遺構に伴うものではない。親勾玉と子勾玉を合わせた勾玉全体の長さ9.6cm、幅5.0cmである。本体部（親勾玉）のみについては、長さ9.6cm、幅4.3cmである。本体部の長さとの幅の比率は0.45となり、内側への反り具合が小さくなっている。本体部断面については、最大幅3.4cm、断面の厚み1.6cmで、最大幅に対する断面の厚みの比率は0.47となり、長方形に近く扁平な板状を呈する。穿孔は行なわれていない。製作方法は、石材から子勾玉となる部分を含めて作り出し、次の工程で親勾玉の背を削り出して子勾玉部分を表現している。子勾玉の突起部分は単に削り出しただけで充分に整形されていない。表側と裏側にある凸帯状の削り出し部分も、古い型式の勾玉では刻みを入れて分割してあるものが多いのに対して、この勾玉では、分割の刻みが施されていない。これらのことから、製作途上の未製品である可能性と、勾玉全体を構成する個々の部位が形態的特徴として、本来持っていた機能的意味が失われた退化簡略化過程にある、時期が下る製品である可能性の両方が考えられる。子持勾玉の一般的な編年観では、

1. 勾玉本体（親勾玉）の横断面形が、円形に近いものから楕円形、扁平な長方形へと変遷すること、
2. 勾玉本体の内側への反り具合（長さに対する幅の比率が大きい）が大きいものほど古い傾向を示



第53図 包含層出土・表面採集遺物実測図



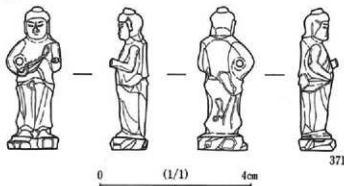
第54图 出土石器·石製品実測図

すこと、3. 子勾玉部分は、1個1個が独立したもののから連接したものの、親勾玉の背部を削り出して表現したものへと変遷する傾向にあること、が研究史の中では支持されている。以上の点から、370は型的には子持勾玉の退化型に属するもので、年代的には子持勾玉は5世紀～7世紀にかけて変遷していくと考えられており、今回は共伴する明確な遺物がないため、型式変化の観点から判断してひとまず6世紀後半から7世紀代に想定しておきたい。

⑩ 銅製小仏像 (第56図)

371は銅製小仏像である。流路を変えて北側へ流れているSD1とSD3の下流(北側)が重なっている地点から出土したもので、他の遺構からの流れ込みと考えられる。総高3.8cm、像高3.4cm、頭一顎0.9cm、面幅0.7cm、面奥0.7cm、胸厚0.9cm、台座幅1.5cm、台座奥行0.9cmである。非常に小さい銅の一鑄造仏である。顔の表情、衣のひだ表現などをノミで細かく丁寧に刻んで仕上げている。頭頂には小さく盛り上がった宝髻があり、胸前を左肩から右腰にかけて斜めに天衣が横切り、下半身にはゆったりとした裳を着衣した姿を表現している。

SD3



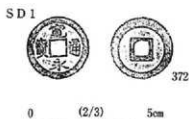
第56図 銅製小仏像実測図

手に持つ持物が、欠損のため明らかではないため、仏像の種類は確定できない。長らく土中に埋まっていたために、像の表面は、錆により腐食している箇所があり、もともと表面に鍍金が施されていたかどうかは定かではないが、類例からはその可能性もある。こうした小仏像の事例としては、経塚埋納品として

副葬されたものや中世以降の念持仏としての性格を持つものがある。類例は比較的少なく、県内では、下関市吉母浜遺跡出土の銅造十一面観音菩薩像が同様な事例として知られる。

(3) 近世 (第57図、図版24)

近世の耕地化に伴う人々の活動をうかがわせる遺物が陶磁器など少量出土している。372は寛永通寶である。背面は無文。直径2.5cm。



第57図 出土銭拓影

V まとめ

1. 神正遺跡 (A地区)

平成8年度の調査により、中世の室町時代後半の15～16世紀を中心とした集落遺跡であることが明らかになった。主な遺構は、獨立柱建物跡14棟、土坑145基、地下式横穴9基、墓4基、溝状遺構38条、柱穴約1,260個である(付図1)。主な遺物は、縄文時代～古代の石製品・須恵器・土師器のほか、中世の土師器・瓦質土器・陶器・輸入磁器・石製品・鉄製品・中国銭などである。調査結果をもとに、神正遺跡(A地区)の性格と特質にかかわる地下式横穴について取り上げてまとめたい。

地下式横穴については、近年全国的にも検出例が増え数百遺跡、1000基以上に達する。分布については、関東地方を中心とし、北部九州でも福岡・大分・熊本にかなりの報告例があり、また山口県内でも第10表に示したように近年発見例が増えている。機能については、基本的に地下貯蔵庫説と墓説の2つに分けられ、墓説は、永久埋葬施設と考える説および再葬を前提とする一次埋葬施設と考える説がある。最近の人骨検出例の増加や中世仏教との関連性の指摘などから、墓と考える説が有力になってきている。年代的には、13世紀後半から16世紀代に展開し、14～15世紀を最盛期とすると考えられている。近年全国的には「地下式横穴」の用語が一般的に使われる傾向にあるが、本報告書では、本県でのこれまでの「地下式横穴」の使用例と統一性を保つため、この用語を踏襲して使用した。

地下式横穴の立地条件としては、墓地・居館・城郭などに伴う場合が多い。本地下式横穴群の場合は、獨立柱建物・土坑・溝状遺構・墓などからなる屋敷・集落の構成要素のひとつとして存在するパターンといえる。また、調査区の北東部に地下式横穴SC1が1基、南部にSC2・3・4が3基、北西部にSC5・6・7・8・9が5基というように、3群に分かれている。

地下式横穴の形態的特徴については、竪坑の平面形態は、隅丸方形・横長隅丸長方形・楕円形・不整形の4タイプがあり、主室の平面形態は、単室構造では横長隅丸長方形・縦長隅丸長方形・楕円形・不整形、複室構造では円形+縦長隅丸長方形の5タイプがある。全体としての形態は、竪坑と主室のそれぞれの形態の組み合わせによって構成されている。しかし、こうした形態上の違いが、必ずしも群の違いと一致するわけではなく、同じ群の中でも、竪坑の位置と主軸方向はまちまちである。

出土遺物は全体的に少なく、機能や年代決定の有効な手段となり得る出土状況にあるものも少ない。遺物の種類としては、鍋・足鍋・すり鉢・大甕・羽釜・火鉢・ホーロクなどの瓦質土器・土師器を中心に、陶器、青磁・白磁・染付の中国製磁器、石臼・砥石・五輪石がある。出土状況としては、SC4とSC5が注目される。SC4は、床面貼り付きの状態で、染付磁器(58)と石臼(115)が、角礫とともに出土した(第8図、図版4)。SC5では、竪坑から前室にかけて、大量に内部を満たしていた角礫に混じって、鍋・足鍋(40～45、47・48)、大甕(50・51)、陶器(46)、ホーロク(49)、砥石(112)、石臼(116)、五輪石(119)が出土した(第11図、図版5)。遺物については、いずれも破片である点が指摘できる。特に、石臼、五輪石については、いずれも意図的に破砕された可能性がある。五輪石は、2破片が1個体に接合復元できた。石臼については、地下式横穴から破片で出土する例が比較的多い。民俗例との比較検討から石臼を魂の依代と考え葬送儀礼の際に使用した後、それを破壊して、横穴に廃棄したと解釈する説がある。その他の遺物も破損した状態での出土が多く、葬送儀礼

の一環として、死霊との断絶を意味する象徴的行為のために、器物を破壊したのではないかと解釈も行われている。本横穴での遺物出土状況も、こうした解釈と結びつき得るものであった。また、SC4とSC5では、横穴内部に角礫が投棄されていた。角礫の用途としては、横穴の閉塞自体を第一義目的とした場合と横穴の上部または周辺に、積石構造物が標識または精神的意味を持つものとして第一義的に造営されていた場合が想定できる。いずれの場合にしても、特定の意図を持って角礫を搬入し使用している。遺物として青磁・白磁・染付の輸入磁器が含まれることから、一定の上級階層にかかわる遺構であることが推測される。

出土遺物の年代は、SC4の染付磁器が、景德鎮の民窯系で16世紀後半の製品。SC5の鍋類は、15～16世紀に位置づけられる。46の備前焼壺は、備前焼Ⅳ期の15世紀頃に比定されよう。59の白磁が16世紀後半、60の青磁が14世紀後半～15世紀であり、瓦質土器・土師器なども含めて、本地下式横穴の年代として、基本的には15世紀から16世紀後半の範囲で押さえておきたい。

地下式横穴の機能については、立地条件、他の遺構との関係、横穴自体の出土状況、掘削に要する労力・費用・時間を支える精神的エネルギー、遺物の内容と出土状況などを総合すると、単なる地下貯蔵庫としてよりも、背後に精神的、宗教的意味合いを持つ施設と考える方がより説得力を持つと思われる。地下式横穴の源流については、中世の仏教思想、特に禅宗の影響を受けた墓とする説がある。本地下式横穴についても、現時点ではひとまず宗教的背景をもつ施設の範疇でとらえておきたい。

関東に分布の中心がある地下式横穴が、北部九州に飛び地的に分布する現象について、東国から九州への御家人の西遷によってもたらされたとする見解がある。山口県の地下式横穴についても、北部九州ルートでもたらされたと考えられる。地下式横穴の受容は、武士階層など比較的富裕階層がその担い手として想定されており、神正遺跡に隣接して北に所在する室町時代後半の有力氏族の館跡と推測される領家遺跡^(注3)の存在が注目される。領家遺跡の館主については、文献に具体的記録が残されていないが、神正遺跡は、その南に位置し、時期的にも一致することから、領家の館主の一族・家臣などと関連を持つ集落である可能性がある。こうした地方有力者層に、九州の有力氏族との関連ルートまたは中世仏教僧の地方有力階層への布教に伴い地下式横穴思想が導入されたのかもしれない。伝播の際、関門ルートからの東進コースのほかに、瀬戸内ルートを通じた大友氏の豊後地方などとの直接交流も視野に入れておく必要があろう。

いずれにしても、本遺跡で検出された地下式横穴は、今のところ山口県内では1遺跡地区内での検出数としては、9基と最も多く、また分布の上でも東限に位置し、出土状況・遺物などを含めて、中世のひとつの研究課題となっている地下式横穴問題に貴重な資料を提供することとなった。

第10表 山口県内主要地下式横穴一覧表

番号	遺 跡 名	所在地	基数	出 典	
				文	図
1	投票上遺跡(山ノ浦遺跡)	宇野町東木	1	朝田出人山口県教育財団・山口県教育委員会「熊鷹峠の地蔵跡(上ノ山地区)」(山口県埋蔵文化財調査報告 第91集) 1986	
2	我曲原遺跡	下関市我曲		山口県教育委員会「我々古遺跡群」(山口県埋蔵文化財調査報告 第71集)1983(文中に「下関市教育委員会・山形市教育委員会との共同調査による」との注記あり)	
3	山形古遺跡	豊浦町川原	1	豊浦町教育委員会・宗財団法人関心中心会等共同「山形古遺跡」1987	
4	志野遺跡	豊浦町川原	2	1999年度調査(山口県埋蔵文化財センター)による	
5	+	+	1	1997年度調査(豊浦町教育委員会)による	
6	坂ノ上遺跡	豊浦町上野庄	6	朝田出人山口県教育財団・山口県教育委員会「坂ノ上遺跡・熊鷹古遺跡」(山口県埋蔵文化財調査報告 第113集) 2004	
7	我々古遺跡群	豊浦町上野庄	6	山口県教育委員会「我々古遺跡群」(山口県埋蔵文化財調査報告 第71集) 1983	
8	宇野城	宇野町		山口県教育委員会「我々古遺跡群」(山口県埋蔵文化財調査報告 第71集)1983(文中に山口県立総合高等学校長尾原氏の調査によるとの注記あり)	
9	山形遺跡	山形市江崎	1	山口県教育委員会「山形遺跡発掘調査報告」1983	
10	阿加遺跡	阿加町阿加	1	阿加町教育委員会の調査による	
11	行刺遺跡	阿加町阿加	1	阿加町教育委員会の調査による(1986年)	
12	神正遺跡(人地区)	阿加町阿加	9	本報告書	

(2) 赤迫遺跡 (A地区)

平成9年度の調査により、古墳時代後期、古代(奈良時代末期～平安時代前半)、中世(鎌倉時代～室町時代)にわたり、断続的に営まれた集落遺跡であることが明らかになった。主な遺構は、竪穴住居跡10軒、掘立柱建物跡37棟、土坑160基、墓3基、堀1条、溝状遺構12条、柱穴約4,090個である(付図2)。主な遺物は、縄文・弥生時代の石器が数点出土したほか、古墳時代～中世の須恵器・土師器を中心に瓦質土器・製塩土器・輸入磁器・滑石製子持勾玉・石鍋・石製品・銅製小仏像などである。

遺跡全体を通じての歴史の変遷を概観すると、出土した石器から判断して、まず縄文時代から弥生時代にかけて、人々の生活の形跡をうかがうことができる。継続的な本格的拠点集落が形成された第1の画期は、造り付けのカマドを持つ隅丸方形竪穴住居が営まれた古墳時代後半の6世紀代になってからである。出土した須恵器などの遺物から判断すると、1期(6世紀前半～中頃の時期)→2期(6世紀中頃前後の時期)→3期(6世紀後半の時期)の3段階の変遷がたどられる。具体的には、1期(SB2・4・8)→2期(SB3)→3期(SB1)の変遷をとるであろう。基本的には陶器編年Ⅱ型式に相当する段階内での変化をたどる。陶器編年では、Ⅱ型式からⅢ型式への変化の中で須恵器の杯蓋と杯身の逆転現象が見られる。しかし、陶器編年Ⅲ型式の7世紀代に相当する宝珠つまみとかえりを持つ杯蓋タイプは、赤迫遺跡ではほとんど出土していない。その後、陶器編年Ⅳ・Ⅴ型式に相当する8～9世紀の奈良時代末から平安時代にかけての須恵器が出土している。こうしたことから、6世紀代に集落が営まれた後、7世紀代に一旦集落が衰退し、第2の画期として、8世紀半ばから後半代に再度集落が形成されたようである。中でも注目されるのは、SB24の大型掘立柱建物跡である。6間×2間(約15m×5m)の規模で、他の建物跡に比べて突出した存在となっている。棟方向は東西方向で、他のSB28・SB46などのやや規模の大きい建物も同じ棟方向を示しており、同時期の関連性を持つ建物群を構成する可能性がある。SB24は、東西に延びる丘陵の南縁側に位置し、南前方に井関川が流れ、当時は近くまで入り込んでいた可能性がある入り江(浜表の地名が残る)を見下ろす眺望・外観・防衛などの点でも絶好の立地条件にある。柱穴から奈良時代末～平安時代前半期の須恵器の杯蓋や8～9世紀代に比定される六連式製塩土器片が出土していることから、この時期の建物としてとらえられよう。この時期の大型掘立柱建物跡としては、県内では古代の周防国の中心であった周防国衙関連の建物跡のほかに、地方の郡郷レベルではあまり例を見ない。こうした点から、この大型建物は集落内部で何らかの特別の意味を持つ施設であったと考えられる。集落内部のみでその意味が完結する集落内特別施設であるのか、あるいは、たとえば周防国衙や吉敷郡衙、賀宝郷の中枢機関などのより上位の政治的レベルとの直接的結びつきを持つ公的性格を帯びた施設である可能性があるのかなど検討を要する点が多い。しかし、この大型建物は出土遺物も限られているなど単独での評価は難しく、今後の資料の蓄積を待って、性格を明らかにしていく必要があるといえよう。

平安時代後半の10～12世紀頃の遺物は出土量が少なく、遺物や遺構が増えるのは中世の鎌倉期以降室町期にかけての時代である。平安時代後半期には集落は衰退し、13世紀頃の中世以降に、第3の画期を迎え、集落は三たび本格的に形成され、14～15世紀代を中心に繁栄した模様である。

注目される遺構は堀跡である。堀出土遺物や周囲の中世の遺構・遺物の状況から、室町時代前半の14～15世紀頃の時期にこの堀は位置づけられるものと推定される。谷を挟んで北側の段丘に存在した

神正遺跡や館跡にかかわる領家遺跡が、室町時代後半の15-16世紀を中心とするのに対して、堀跡は時期的にこれらより古い様相を示すと思われる。今回の調査では、堀に囲まれた本拠となる具体的な館跡自体は確認されなかった。館跡の可能性としては、丘陵部を南北に断ち切る堀を挟んで、東側地区か西側地区が考えられる。標高が低くなって行く東側地区では、館にかかわるような具体的な遺構は検出されていない。一方、西側地区は、標高約18-19mで丘陵部の最高所であって、面積的にも広い平坦地を持つ。また南側と西側も谷となり、地形的にも自然の要害となっており、館の拠点としての恵まれた条件を満たしている(第2図)。現時点では、この西側の高台部に館の本拠が存在する可能性が高いと考えられる。江戸期の「地下上申絵図」に描かれているこの地域(井関)の絵図の中で、赤迫地区近くに「山城」の地名が記載されている点も気になる。

阿知須地域は、中世には白松氏とのかかわりが深い。白松氏は、その出自や厚東氏との関係など不明な点も多いが、阿知須地域と密接な関係があったことは、文献の端々にうかがわれる。この白松氏やこの地域に勢力を伸ばそうとしていた厚東氏と直接・間接的に何らかの関係がある勢力が、古墳時代・古代以来、政治的・軍事的・地理的条件に恵まれた赤迫の地に支配の拠点を置いたとしても不思議ではない。中世の周防・長門では、14世紀になり中央の南北朝の争乱を反映して、それまで力を持っていた厚東氏と新たに台頭してきた大内氏との勢力争いが展開され、結果的に14世紀半ばに厚東氏は大内氏に敗れ滅亡した。この間、白松氏を含めて、大内氏の拠点山口に隣接する阿知須地域の支配勢力にも何らかの大きな政治変動があった可能性がある。急激な政治変動を示唆するかのように赤迫遺跡の堀が、比較的短期間に人為的に廃絶され埋め戻された形跡をうかがわせる点は注目される。

これに対して、領家遺跡・神正遺跡は、室町時代後半の15-16世紀代と考えられ、赤迫遺跡より後続的である。厚東氏に勝利した大内氏の支配下に置かれた阿知須地域には、赤迫遺跡の堀と館が廃絶された後、今度は、大内氏とのかかわりを持つ政治勢力(白松氏も含めて)の拠点として新たに領家遺跡の地に館と堀・土塁が造営されたとの推測もできよう。その後、今度は16世紀後半の大内氏から毛利氏への政権交代期に、政治変動に呼応して、領家の館と堀が廃絶されたとも考えられる。

赤迫遺跡と領家遺跡にかかわる館や堀については、かなり大規模なものであるにもかかわらず文献記録の上では具体的な記載は残っていない。このことは、逆にいえば、人為的に廃絶されたような出土状況と併せて考えると両方とも政治的争いに敗れた側の拠点であったために、政治的実権を握った側が残した記録に名をとどめなかったという推測も成り立つ。

2年度にわたり実施された神正遺跡(A地区)と赤迫遺跡(A地区)の発掘調査により、阿知須の古墳時代から中世の歴史を解明していく上での貴重な手掛かりを得た。こうした成果が十分に活用されるとともに、さらに、将来的に赤迫遺跡に隣接する西側高台地区など周辺遺跡の全般的調査を通じて、今回新たに浮かび上がってきた課題に対する、より実証的検討が行われることが期待される。

注1 斎藤 弘 「地下式墓と葬送儀礼―熊本県下の事例を中心に―」(財団法人熊本県文化振興事業団埋蔵文化財センター「研究紀要第4号」1990) 高尾栄市 「中世の墓地―段切り状遺構―」(五段田遺跡調査会「五段田遺跡Ⅱ」1991)

注2 今井恵昭 「地下式墓出土の石臼について」(東京都埋蔵文化財センター「東京都埋蔵文化財センター研究論叢」1994)

注3 阿知須町教育委員会 「領家遺跡」1995
阿知須町教育委員会 「領家・神正遺跡(神正遺跡B地区)」1997

注4 中村浩 「須忍器」ニュー・サイエンス社 1980

中村浩編 「須忍器集成図録 第1巻 近畿編1」雄山閣 1995

注5 阿知須町 「阿知須町史」1981

圖 版



神正遺跡 (A地区)・赤泊遺跡 (A地区) 遠景 (B地区を含む)



神正遺跡 (A地区) 全景 (B地区を含む)



神正遺跡（A地区）発掘状況①



神正遺跡（A地区）発掘状況②



S K 120 (西から)



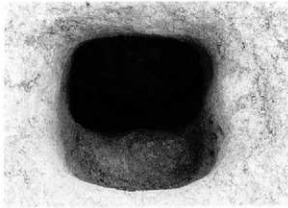
S K 119 (南から)



S K 121 (西から)



地下式横穴 SC 1 (東から)



地下式横穴 SC 2 (北から)

神正遺跡 (A地区) 検出遺構①



地下式横穴SC4 (西から)



地下式横穴SC7 (東から)



地下式横穴SC6 (北から)



SC6 主室内部



SC6 壁面工具痕



地下式横穴SC9 (東から)



SC8 (西から)



地下式横穴SC8主室の埋土状況 (東から)



地下式横穴SC5 (南から)



SC5 竪坑 (北から)



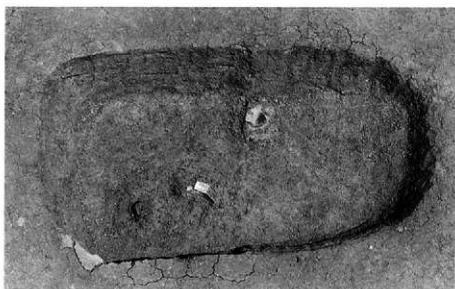
SC5主室集石出土状況 (南から)



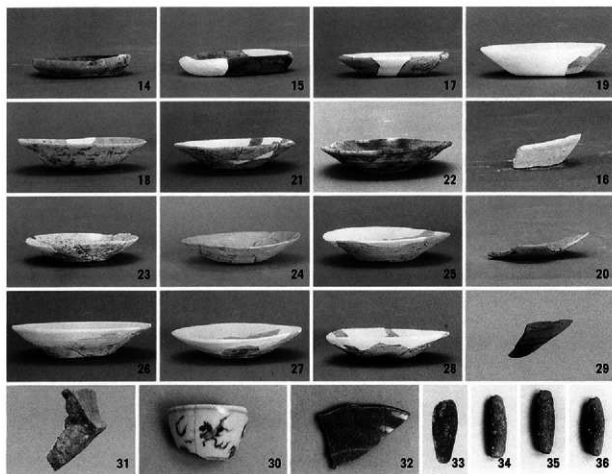
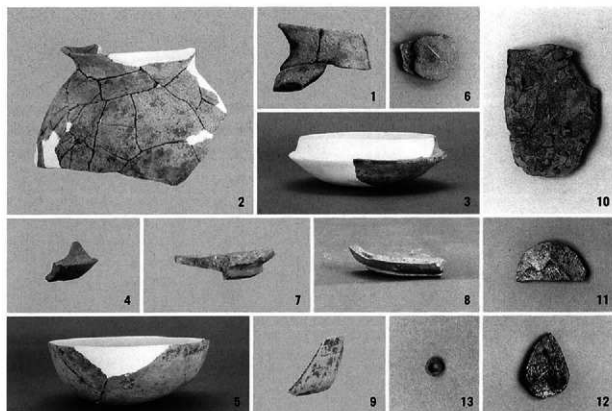
地下式横穴SC 3 (北から)



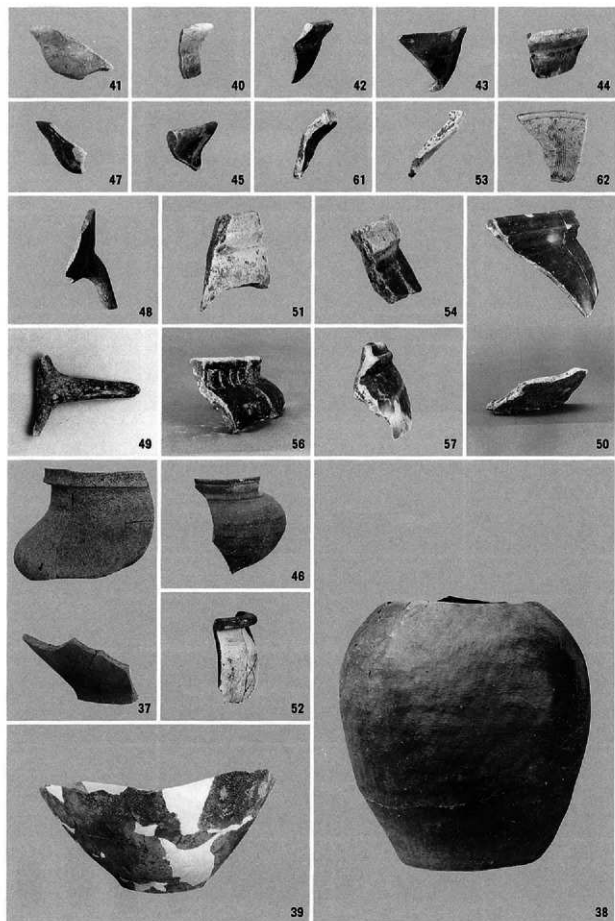
ST 1 (西から)



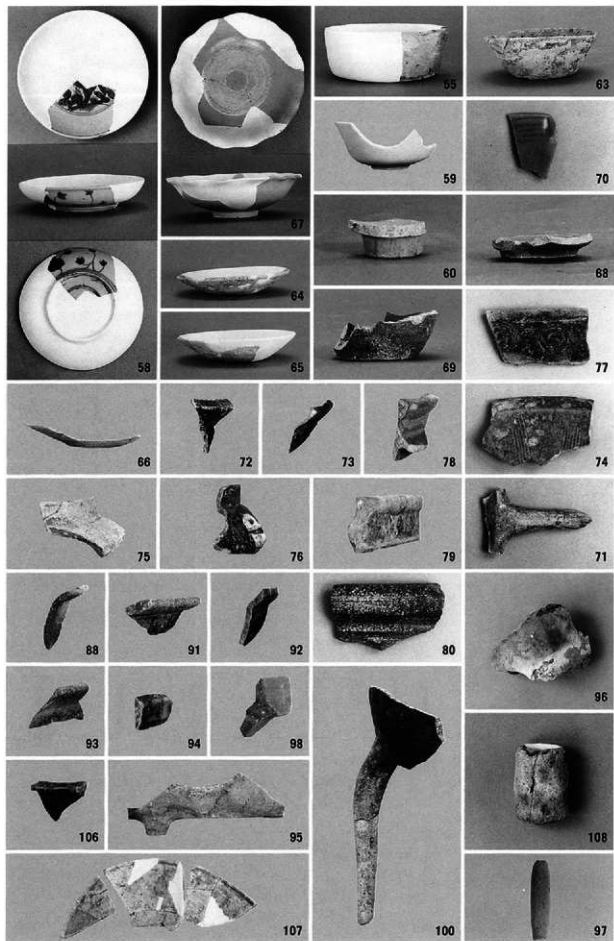
ST 2 (西から)
神正遺跡 (A地区) 検出遺構④



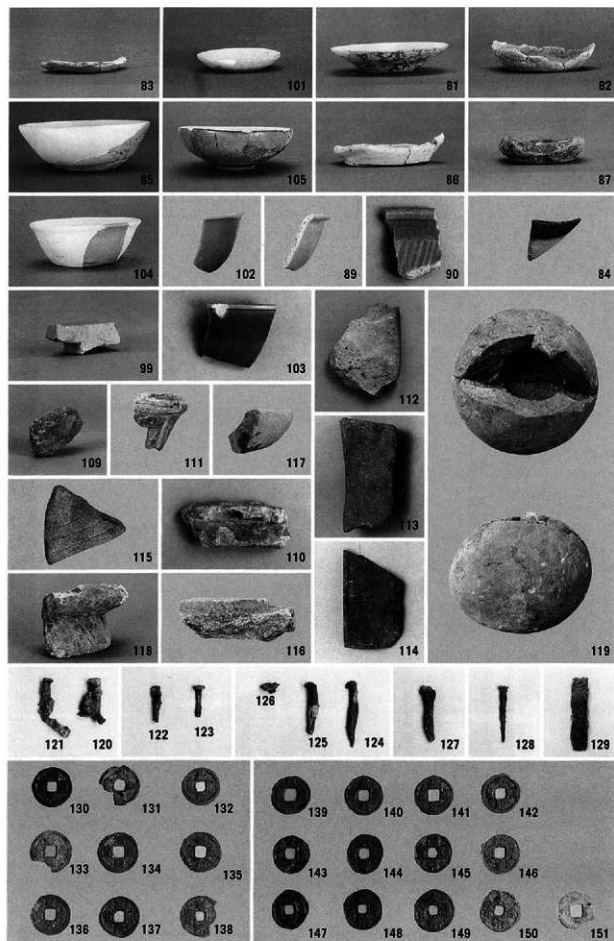
神正遺跡 (A地区) 出土遺物①



神正遺跡 (A地区) 出土遺物②



神正遺跡 (A地区) 出土遺物③



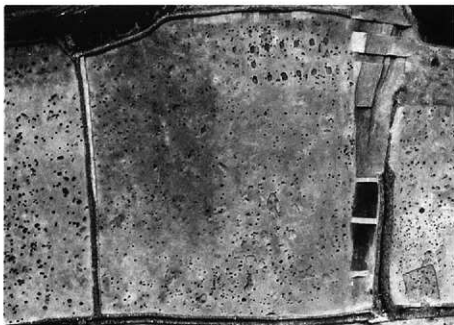
神正遺跡 (A地区) 出土遺物④



赤迫遺跡 (A地区) 遠景 (B地区を含む)



赤迫遺跡 (A地区) 全景 (B地区を含む)



赤迫遺跡 (A地区) 発掘状況①



赤迫遺跡 (A地区) 発掘状況②



赤迫遺跡 (A地区) 発掘状況③



SB 1 (南から)



SB 1 遺物出土状況 (南から)



SB 4 (南から)



SB 6 (東から)

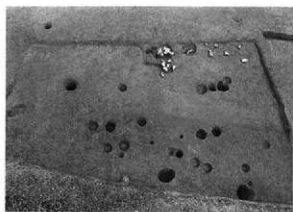


SB 5 (東から)

赤迫遺跡 (A地区) 検出遺構①



SB 2 (南から)



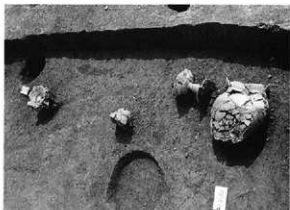
SB 3 (南から)



SB 10 (東から)

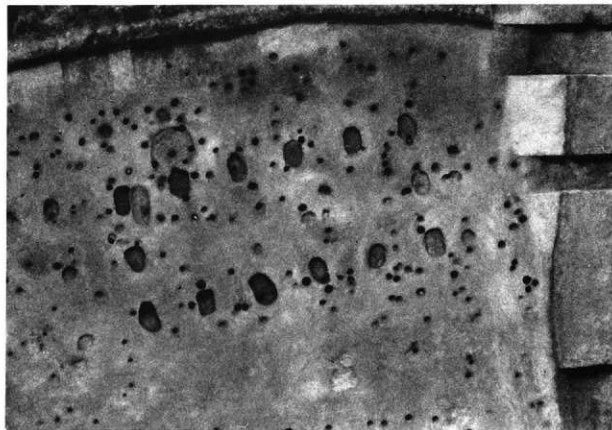


SB 3 遺物出土状況 (南から)



SB 10 遺物出土状況 (北から)

赤泊遺跡 (A地区) 検出遺構②



SB24 (北から)



SB24 (西から)



SB24柱穴土層断面 (東から)

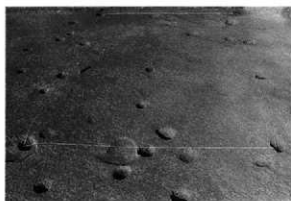


SB21 (南から)

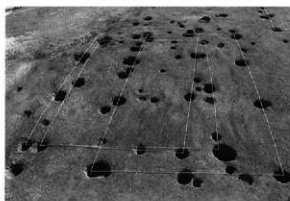


SB28 (東から)

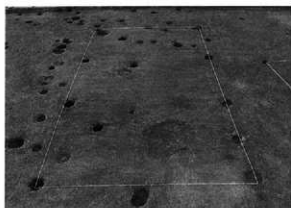
赤泊遺跡 (A地区) 検出遺構③



SB11 (東から)



SB12・13・14 (東から)



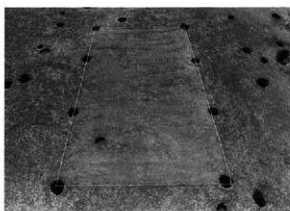
SB18 (北から)



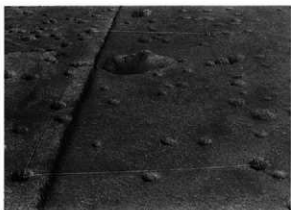
SB26 (西から)



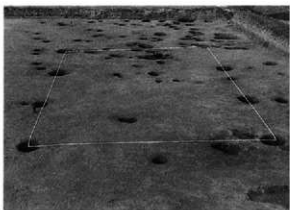
SB25 (西から)



SB22 (南から)



SB19 (東から)



SB29 (南から)



S K29 (南から)



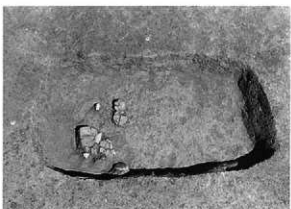
S K39 (東から)



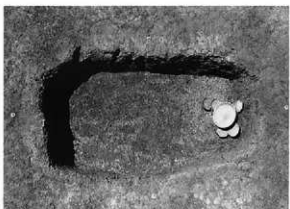
S K32 (東から)



ST 2 (西から)



ST 1 (西から)



ST 3 (東から)

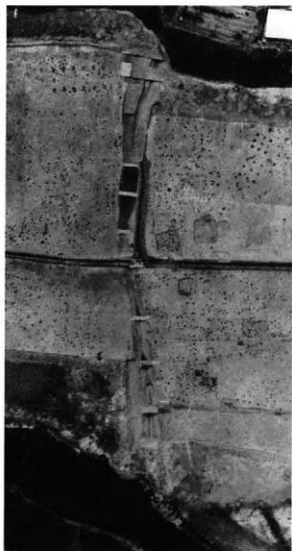


ST 1 遺物出土状況 (南から)



ST 3 遺物出土状況 (南から)

赤迫遺跡 (A地区) 検出遺構⑤



堀全景 (北から)



堀南側 (北から)



堀北側 (南から)

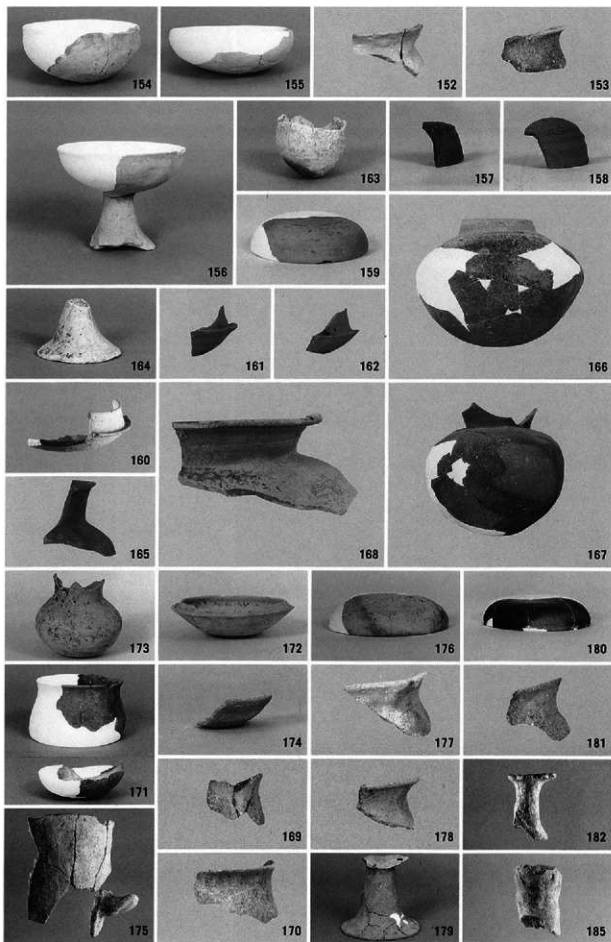


堀土層断面 (C-C')

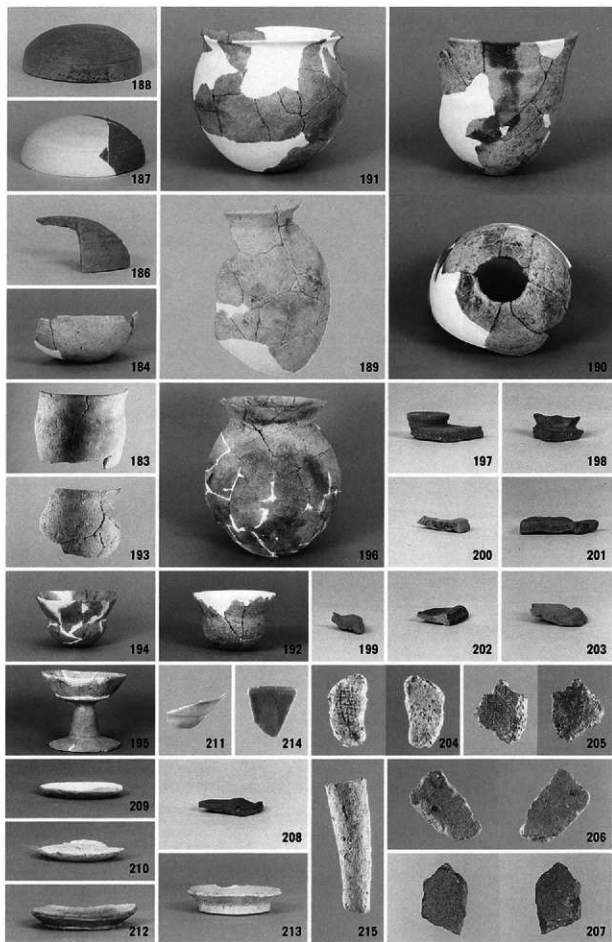


堀土層断面 (A-A')

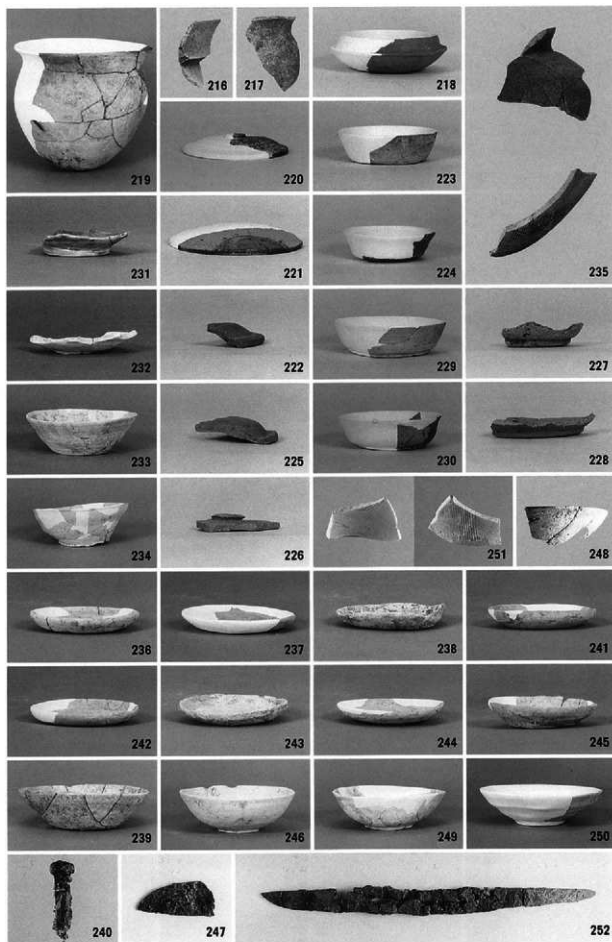
赤迫遺跡 (A地区) 検出遺構⑥



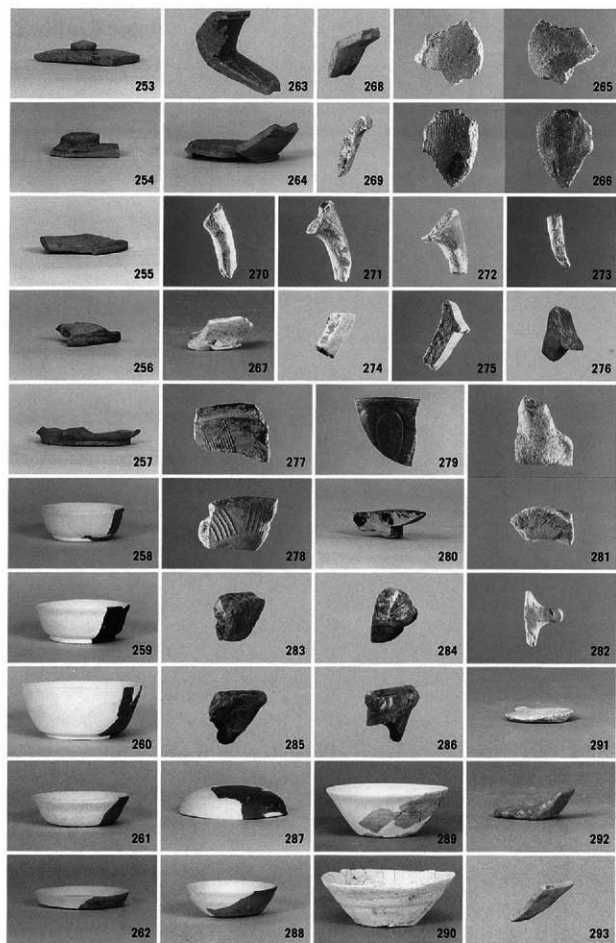
赤迫遺跡 (A地区) 出土遺物①



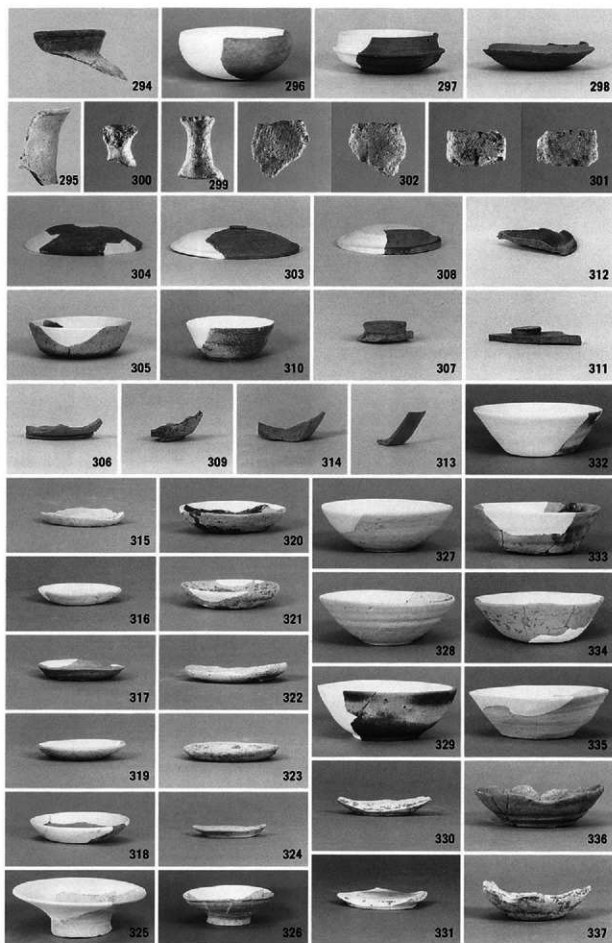
赤迫遺跡 (A地区) 出土遺物②



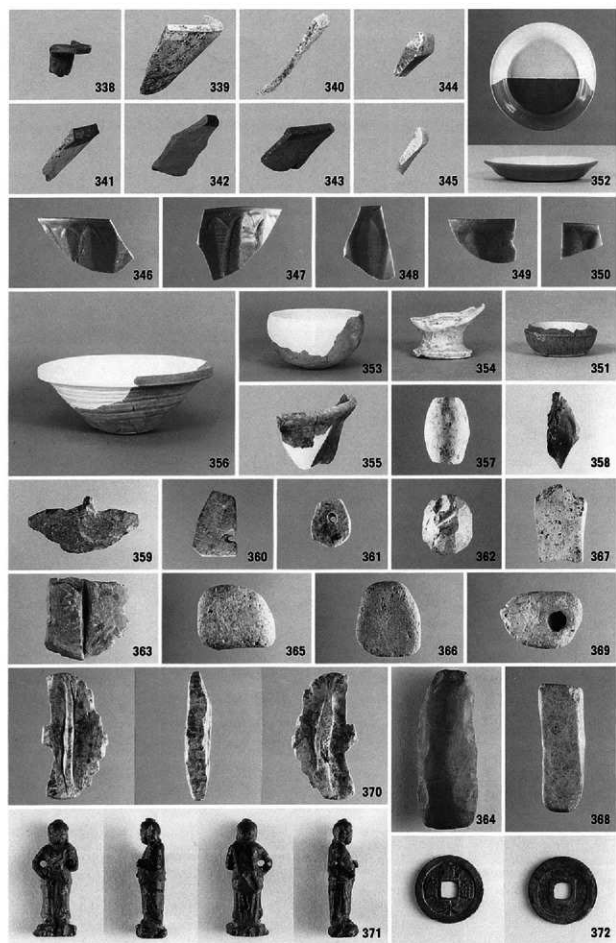
赤泊遺跡 (A地区) 出土遺物③



赤迫遺跡 (A地区) 出土遺物④



赤迫遺跡 (A地区) 出土遺物⑤



赤迫遺跡 (A地区) 出土遺物⑥

報告書抄録

ふりがな	しんしょういせき(えいちく)・あかさこいせき(えいちく)					
書名	神正遺跡(A地区)・赤迫遺跡(A地区)					
副書名	平成8年度・平成9年度県営ほ場整備事業に伴う発掘調査報告					
巻次						
シリーズ名	山口県埋蔵文化財センター調査報告					
シリーズ番号	第8集					
編著者名	上山住彦 鈴木卓 大野真司 直井晃 大村勇					
編集機関	山口県埋蔵文化財センター					
所在地	〒753-0073 山口県山口市春日町3-22 TEL 0839-23-1060					
発行年月日	西暦1998年3月20日 (平成10年3月20日)					

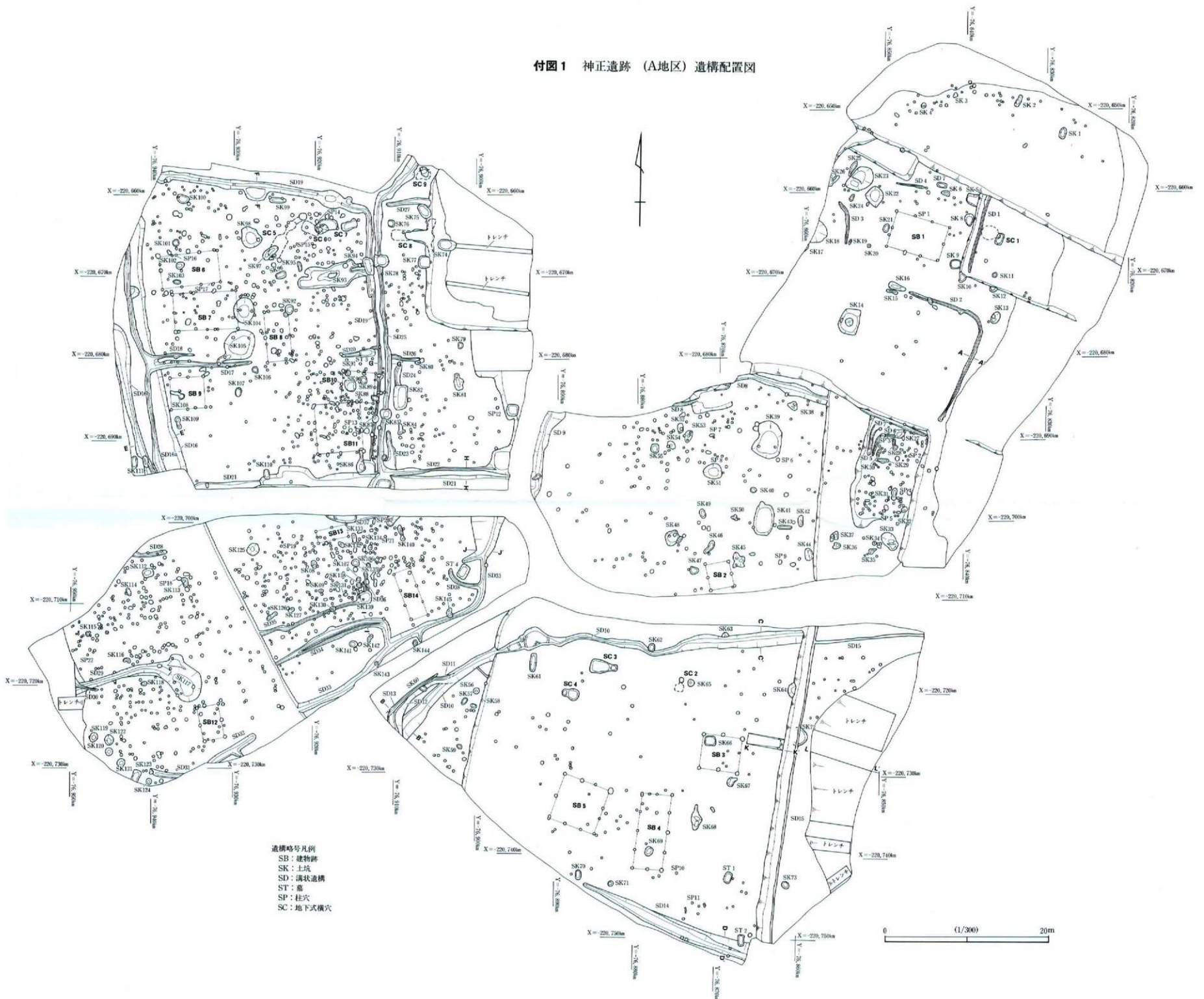
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
神正遺跡 (A地区)	山口県吉敷郡 阿知須町浜表	35403		34° 0' 34"	131° 20' 40"	19960509 ~ 19961121	8,000	ほ場整備
赤迫遺跡 (A地区)	山口県吉敷郡 阿知須町赤迫	35403		34° 0' 27"	131° 20' 35"	19970512 ~ 19971105	7,500	ほ場整備

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
神正遺跡 (A地区)	集落跡	中世	掘立柱建物跡 14棟 土坑 145基 地下式横穴 9基 墓 4基 溝状遺構 38条 柱穴 約1,260個	土師器 須恵器 瓦質土器 陶磁器 ふいご羽口 土錘 石鏝 砥石 石臼 五輪石 中国銭 鉄釘	地下式横穴は山口県内では1遺跡地区内での最多検出数となるとともに分布の上でも県内の東限に位置する。
赤迫遺跡 (A地区)	集落跡	古墳 古代・中世	竪穴住居跡 10軒 掘立柱建物跡 37棟 土坑 160基 墓 3基 堀 1条 溝状遺構 12条 柱穴 約4,090個	土師器 須恵器 滑石製子持勾玉 土師器 須恵器 瓦質土器 製塩土器 輸入磁器(青磁) 石鏝 砥石 銅製小仏像	古代の掘立柱建物跡1棟は大型(約15m×約5m)である。 中世の堀は東西方向の丘陵を南北方向にV字形に掘り込み、最大幅約5m、最大深さ約2mである。

付図1 神正遺跡(A地区)遺構配置図

付図2 赤迫遺跡(A地区)遺構配置図

付図1 神正遺跡 (A地区) 遺構配置図



遺構略号凡例
 SB: 建物跡
 SK: 土坑
 SD: 溝状遺構
 ST: 竈
 SP: 柱穴
 SC: 地下式横穴

0 (1/300) 20m

付图2 赤迫遗迹 (A地区) 遺構配置図



山口県埋蔵文化財センター調査報告第8集

神 正 遺 跡 (A地区)

—平成8年度県営ほ場整備事業に伴う発掘調査報告—

赤 迫 遺 跡 (A地区)

—平成9年度県営ほ場整備事業に伴う発掘調査報告—

1998年 3月

編集 財団法人 山口県教育財団

発行 山口県埋蔵文化財センター
(山口市春日町3-22)

阿知須町教育委員会
(吉敷郡阿知須町2743)

印刷 大村印刷株式会社